
蒼海の天使～病院船「氷川丸」～

石田零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼海の天使く病院船「氷川丸」く

【Nコード】

N1750L

【作者名】

石田零

【あらすじ】

かつて、日本とアメリカの間で戦争が起こった。太平洋戦争と呼ばれたその戦争は、多くの尊い命を犠牲にした。その中で、尊い命を必死に助ける者たちがいた。赤い十字架を掲げた船、病院船。危険と隣り合わせの海で、彼らはただひたすらに命を助けた。そこには、軍艦とは違う彼らの「戦場」が存在していた。病院船「氷川丸」に乗り組んだ青年と、船に宿る艦魂の少女。二人が紡ぐ物語を乗せて、船は海を進む。

<序章>蒼穹の回想（前書き）

初めまして、石田零といっています。他の艦魂作家の先生方の作品に触発され、自分も投稿しました。未熟な点も多いと思いますが、宜しくお願いします。

<序章>蒼穹の回想

神奈川県横浜市。首都圏に位置するこの都市は、日本の開国以来、港町として栄えてきた。今日でも、日本の主要な貿易港の一つである。

その横浜市の臨海部に位置する山下公園。やましたこうえん横浜の名所のひとつであるここに、一隻の船が係留されている。「氷川丸」ひかわまる——戦前、北太平洋航路で活躍し、戦中は病院船として太平洋戦争を生き抜き、戦後は再び北太平洋を駆け巡った貨客船である。現在は山下公園に係留され、船内を見学できるようになっている。

戦前の様子を今に伝える「氷川丸」。その船首に、一人の少女が立っていた。客船の乗務員の格好をした少女は船上から海を行き来する船たちを眺めている。セミロングの黒髪が、海風に靡く。

係留されている「氷川丸」の上空でカモメが舞う。雲ひとつ無い快晴の空に純白の翼が映える。カモメの気持ち良さそうな鳴き声が波の音に混じって少女の耳に届いた。

少女が見上げると、カモメの群れが青空を舞台にダンスをしていた。優雅に舞うその姿を少女は穏やかな瞳で眺める。

「いい天気ですね・・・」

海風に靡く髪を押さえながら、少女が呟く。

「・・・あの時も、こんな、いい天気でした」

少女はどこか遠い所を見詰める様に言った。抜けるような青空の下、少女は彼と海を駆け抜けた日々を思い返していた。

<序章>蒼穹の回想（後書き）

今回はプロローグです。如何だったでしょうか。物語を書くことは初めてな上に、知識が乏しいため、色々とおかしな所が出てくると思います。その際は、やんわりと御指導ください。ご意見・ご感想、お待ちしております。

<第一話>邂逅（前書き）

第一話投稿です。タイトルの通り今回は物語の始まり、出会いの話です。どうぞお楽しみください。

<第一話>邂逅

一九四一年十二月八日、空母「赤城」を旗艦とする機動部隊が真珠湾に奇襲攻撃を行い、太平洋戦争の火蓋が切つて落とされた。

それから約二週間後の十二月二十一日。一隻の船が一ヶ月に渡る改装を終え、新しく生まれ変わった。

横須賀海軍工廠の艤装岸壁に係留されている一隻の船。改装を施されたその船体は純白に塗られ、日の光を浴びて輝いている。純白の船体には緑色の線が帯の様に巻かれ、赤い十字架が描かれている。万国共通の塗装を施されたその船は、病院船であつた。

塗りたての白い船体を輝かせる船の名は、「氷川丸」^{ひかわまる}。元はシアトル航路に就役していた日本郵船の貨客船である。

「氷川丸」は一九三〇年竣工の貨客船で、姉妹船に「日枝丸」^{ひえまる}と「平安丸」^{へいあんまる}がある。総トン数は一万一六二二トン。全長一六三・三メートル、全幅二〇・一二メートル、吃水九・二メートル。二機のディーゼルエンジンを備え、最高速力は十八ノット。長女の「氷川丸」と同様に「日枝丸」と「平安丸」も海軍に徴用され、特設潜水母艦への改装を受けている。

「氷川丸」が海軍に徴用されたのは一九四一年の十一月。シアトルから在米邦人を乗せて横浜に帰港した直後の事だつた。「氷川丸」が横浜に帰港したのは十一月十八日。三日後の二十一日には横須賀に回航されて改装が始められた。一ヶ月という短期間で行われた改装は、正に突貫工事だつた。

病院船となつた「氷川丸」は直ちに中部太平洋方面の防備を担当する第四艦隊に配属され、新たな乗組員を迎えた。その中の一人、ひだかゆうと日高雄人一等兵曹は岸壁に係留される「氷川丸」を見て感嘆の声を漏らした。

「綺麗な船だな・・・」

日光に照らされる「氷川丸」の白い船体は美しく光り、優美な姿を海面に浮かべている。その姿は雄人に白鳥を連想させた。こんなに美しい船にこれから自分が乗り組むのかと思うと、雄人はわくわくした。

「つと、いけない。見惚れている場合じゃなかった」

足を止めて「氷川丸」に見入っていた雄人は我に返ると、再び歩き出した。間近に迫ってくる「氷川丸」を見上げながら雄人は不思議な高揚感を覚えていた。

期待に胸を膨らませて「氷川丸」へと乗り込む雄人。その様子を、一人の少女が見ていた。歳は十代の中頃。大人びた顔つきはともすれば十代後半の様にも見えるが、まだあどけなさを残している。服装は純白のナース服。帽子の赤十字が白い生地の上でその存在を大きく主張している。

デッキの上に立つ少女は手摺に掴まり、近付いて来る人物を眺めている。景色を映す彼女の双眸は吸い込まれる様な漆黑。伸ばした黒髪は三つ編みに纏められ、肩から下げられている。

こちらに向かって来る青年の足が止まり、それを追っていた少女の目の動きも止まった。静止する青年を見ていた少女はくすつと笑った。

「ふふつ。あの人、私のこと綺麗だつて」

微かに頬を赤らめながら少女は嬉しそうに言った。船から離れた所にいる者の眩きを船上から聞き取る事など常人には成し得ない業である。しかし、この少女はしっかりと青年の眩きを聞き取っていた。

「・・・あの方は、『私』を見たら何て言ってくれるかな？」

少女は一人眩き、楽しそうに笑った。

「・・・・・・・・・・はあ」

それから数十分後、「氷川丸」のデッキの上で溜息が零れた。溜息の主は雄人だった。さつきまでの元気はどこへいったのか、雄人は暗い表情で海面を眺めている。頭上に広がる青空とは対照的に、雄人の表情は浮かない。

なぜ、雄人はこんなに落ち込んでいるのか。その理由は・・・・・・・・

「病院船とはいえ、元は客船なのに部屋が船倉だなんて・・・。

あんまりだ・・・」

ぶつぶつと愚痴を零す雄人。その背後から、声が聞こえた。

「こんなにいい天気なのに、暗い顔していたらもったいないですね」

声を聞いた雄人は背後に視線を向けた。そこにいた人物を目にし、雄人は驚きの表情をみせた。

「・・・え？」

雄人の視線の先には、一人の少女がいた。ナース服に身を包んだ十代中頃の彼女は、先ほどデッキの上で雄人の事を見ていた少女だった。

「・・・女の子？」

雄人は信じられないといった表情で少女を見る。無理もない。大日本帝国海軍の艦艇に女性が乗り組む事などあり得ないからだ。病院船も例外ではなく、看護婦は乗船していない。ましてや、年端もいかない少女が乗っている事など絶対にあり得ない・・・筈だった。

しかし、その認識を打ち砕く光景が目の前に存在している。混乱する雄人を他所に、少女は雄人に話しかける。

「あの・・・もしかして、貴方は私が見えるんですか？」

「え？あ、うん。見えるけど・・・」

混乱しつつも雄人が答える。すると少女は感慨深そうに言った。

「……久しぶりです。私が見える人に出会うなんて」

「……え？え？」

奇怪な質問とその答えに対する反応。少女の言動が寸分たりとも理解できず、雄人はますます混乱した。

「君は……？」

少女はハッと気付くと、慌てた様子で自己紹介をした。

「申し遅れました！私は氷川丸かんこんといいます。この船、『氷川丸』の艦魂です」

氷川丸と名乗った少女はそう言うってお辞儀をした。雄人は首を傾げた。

「……艦魂？」

「艦魂をご存じないのですか？」

驚いた様子で少女が聞く。雄人が頷くと、少女は説明を始めた。

「艦魂というものは、文字通り、船に宿る魂の事です。艦魂はどんな船にも一隻に一人、必ず宿っています。そして、全員が例外なく若い女性の姿をしていて、民間船では航海安全の守り神、軍艦では武運長久の女神などとして祀られています。ですが、その姿を見る事ができる人間はごく僅かで、一隻の船に一人いるかいなかで

す。・・・大雑把に説明すると、こんな感じです。分かりましたか？」

「とすると、君がこの『氷川丸』の・・・」

「はい。私がこの『氷川丸』艦魂の氷川丸です」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・もしかして、疑ってます？」

「・・・・・・・・うん」

少女の問いに、雄人は肯定の返事を返した。

「確かに、にわかには信じがたいですね。・・・それでは、私がこの『氷川丸』の艦魂である証拠をお見せします」

「・・・・・・・・証拠？」

「はい。艦魂は一種の瞬間移動能力を持っていて、自分や近くの艦艇に自由に移動する事ができます。それをこれからお見せします」

そう言うつと少女は雄人の腕を掴んだ。次の瞬間、二人は光に包まれ、デッキから姿を消した。

「・・・・・・・・え？」

雄人は自らの身に起こった事を理解できなかった。少女に腕を掴まれた次の瞬間、自分は船内に移動していた。しかもここは機関室。

船の最下層だった。一瞬で移動する事など、不可能だ。

「どうですか？」

声を聞いて我に返ると、微笑を浮かべる少女が立っていた。

「屋外デッキから機関室への瞬間移動。これが艦魂の力です。信じてもらえましたか？」

少女の問いに答える言葉も出ず、雄人はただ黙って頷いた。その腕を掴み、少女が言う。

「それでは、デッキに戻ります。行きますよ」

二人は光に包まれると一瞬の内にデッキの上に戻った。

「驚いた。君は、本当に艦魂なんだね・・・」

「だから最初に言ったじゃないですか。私は『氷川丸』の艦魂です、って」

少女はふてくされた様に口を尖らせる。しかし、その表情はどこか楽しげだった。

「それでは、改めて自己紹介を。私は病院船『氷川丸』の艦魂、氷川丸です」

「僕は日高雄人。階級は一等兵曹だ」

「よろしく願います、日高一曹」

「日高一曹だなんて、かしこまった呼び方しなくて良いよ。雄人で構わない」

「そうですか？では・・・雄人さん、これからよろしく願います」

「うん。宜しく、氷川丸」

差し出された少女の手を雄人が握る。抜けるような青空の下、二人は互いをしっかりと見据え、固く手を握り合った。

青年、雄人と少女、氷川丸はこうして出会った。知り合った二人が初の任務に出発するのは、これから二日後の事だった。

<第一話>邂逅（後書き）

第一話、如何だったでしょうか。今回は氷川丸と雄人の出会いの話でした。序章から日を空けずに投稿したいと思っていたのに日が空いてしまいました・・・どのくらいのペースになるかは分かりませんが、定期的に投稿していきたいと思います。

ご意見・ご感想、お待ちしております。

<第二話>初任務、その途上

見渡す限りの水平線。空と海、二つの青が支配する世界を一隻の船が走っていた。純白の船体には緑色の帯が巻かれ、赤十字の印がその存在を目立たせている。

波を掻き分けて進む「氷川丸」の姿は、遠目には白鳥のようにも見える。広大な海原を鉄の白鳥が優雅に泳いでいく。

その船上で、雄人は手摺に寄りかかりながら海面を眺めていた。蒼い海が白波を立てて碎け、後方に流れていく。・・・と、雄人は大きな欠伸を一つした。

「まったく・・・日が高い内から、なに欠伸なんかしてるんですか」

欠伸をした雄人の背中に声がかかる。雄人が振り返ると、声の主である氷川丸が立っていた。肩から下がった三つ編みが風に揺れる。

「ああ、氷川丸か。おはよう……。ふあ……。…」

雄人は氷川丸に挨拶すると同時にもう一度欠伸をした。それを見た氷川丸は呆れた声で言った。

「おはよう、じゃないですよ。もう昼ですよ？それと、昼間から欠伸だなんてだらしないです」

「そんな事言われても・・・眠いものは眠いんだよ。ほら、『春眠曉を覚えず』って言うし」

「今は十二月です。冬です。春眠ではなくて冬眠です」

「冬眠か。それも良いかも。穴の中で好きなだけ寝ていられる・
・・・」

「良くありません！なに言っているんですか！」

日中から寝る気満々の雄人を氷川丸が叱る。雄人はその剣幕にたじろぎながらも言葉を返す。

「よく眠れないんだから仕方ないじゃないか。士官と違って僕たちの居住区は船倉なんだから。眠りにくいんだよ」

「そんなもの、すぐに慣れて下さい。雄人さん、貴方も帝国海軍の軍人ならこの程度の事すぐに克服できるはずですよ」

「やっぱり氷川丸は厳しすぎるよ・・・」

「そんな事ありません。これが普通ですよ」

容赦の無い氷川丸の言葉に雄人が落ち込む。氷川丸は腰に手を当てて「まったく・・・」と溜息をついた。氷川丸と出会ってから、もうすぐ一週間。雄人は事あるごとに氷川丸に叱られていた。

雄人が言う通り、氷川丸は厳しい性格をしている。これには一人の男性の存在が大きく関わっていた。その人物の名は秋吉七郎。あきよししちろう「氷川丸」の初代船長である。

秋吉船長の乗務員に対する指導は、マナーに厳しい日本郵船の中

でも特に厳しかった。彼の指導はズボンのしわや鉛筆の置き方ひとつにまで及び、その厳しさは「軍艦氷川」と呼ばれるほどであった。しかし、汚れた靴下を履いていた乗務員を叱った時には後でそっと新しい靴下を届けるなど、他人への優しさも併せ持っていた。

その秋吉船長も艦魂が見える一人であり、氷川丸も随分と指導された。厨房の料理を盗み食いた時など「大切なお客様に差し出す料理を盗み食いするなど何事だ!!」と烈火の如く怒られたという。しかし、普段の彼は優しく穏やかな人で、よく氷川丸の相手をしてくれた。氷川丸はそんな彼が大好きだった。今でもその思いは変わらない。秋吉船長は、氷川丸にとってお父さんの様な存在なのだ。

秋吉船長が築いた「軍艦氷川」の空気は船員たちに代々受け継がれ、彼から直接指導を受けた氷川丸も彼の教えをしつかりと守っている。氷川丸の真面目で厳しい性格は、そこからきているのだった。

「雄人さん、今私たちがいるのはどこですか？」

「どこって・・・太平洋だけど」

「どうして、私たちは太平洋にいるんですか？」

「それはもちろん、任務で」

「分かっているならしつかりして下さい」

病院船への改装が終了して二日後の十二月二十三日、「氷川丸」は横須賀を出港して初の任務へと向かった。目的地はマーシャル諸島。ここには開戦劈頭のウェーキ島攻略作戦で負傷した海軍陸戦部隊の将兵が収容されていた。彼らの救護が病院船「氷川丸」の初任

務である。

「いいですか、雄人さん。私たちの双肩には人の命がかかっているんです。気を緩めないで下さい」

「気負いすぎるのは良くないと思うけど・・・」

そこまで言った所で、雄人は再び大きな欠伸をした。雄人の瞼は半分閉じていて、いかにも眠そうだ。

「はぁ・・・仕方ないですね」

氷川丸は溜息をつくと雄人の手を掴んだ。

「？」

「・・・だらしなのは駄目ですが、寝不足で倒れてもらっても困ります。だから・・・私の部屋を貸します」

そう言つと氷川丸は自室へと瞬間移動した。

「ここは・・・？」

「私の部屋です」

二人が来たのは一等客室。ふかふかのベッドが二つ並び、模様の描かれた綺麗なシーツがかけられている。部屋には洗面所も備えられている。

「ベッドは二つありますから、好きな方を使ってください」

氷川丸が雄人を促す。雄人は距離が近かった窓側のベッドに倒れこんだ。

「ふかふかだ・・・」

「ここは予備部屋ですから、誰も入って来ません。ゆっくり休んで下さい」

「ありがとう、氷川丸」

「今日は特別です。次からは・・・」

氷川丸の口が止まる。雄人は既に整った寝息を立てて眠っていた。

「・・・本当に眠かったんですね」

氷川丸は雄人の身体に毛布を被せた。穏やかな表情で眠る雄人の頭を撫でながら、氷川丸は微笑んだ。

「お休みなさい、雄人さん」

氷川丸の優しい声が部屋の空気に溶けた。

<第二話>初任務、その途上（後書き）

作者「今回から後書きは対話形式でいきたいと思います。では、改めて紹介します。本作ヒロインの氷川丸です」

氷川丸「皆さん、こんにちは。病院船『氷川丸』艦魂の氷川丸です。よろしくお願いします。．．．ところで作者さん」

作者「何でしょう？」

氷川丸「この後書き．．．対話形式にしたのはいいですけど、この作品って登場人物が少ないですよ。それなのに対話形式にしちやって、大丈夫なんですか？」

作者「あっ．．．．．」

氷川丸「もしかして、忘れてたんですか？．．．なにやってるんですか、まったく。しっかりして下さい」

作者「うつつ、厳しい．．．」

氷川丸「．．．まあ、登場人物が少ない中でいかに後書きを盛り上げていくのかも作者さんの腕の見せ所、といった所でしょうか」

作者「頑張ります．．．」

氷川丸「では、読者の皆様に挨拶を」

作者「はい、分かりました。この作品を読んでいる読者の

皆様に心よりお礼申し上げます」

氷川丸「ご意見・ご感想、お待ちしております」

登場人物紹介

ひかわまる

氷川丸

身長：162cm

外見年齢：17歳

姉妹船：日枝丸、平安丸

日本郵船がシアトル航路に投入した12,000トン級貨客船の一番船。戦前は太平洋を146回も横断し、秩父宮ご夫妻やチャールズ・チャップリンなども乗船した。太平洋戦争の開戦により、病院船となる。

性格は真面目で、自分にも他人にも厳しい。典型的な委員長タイプ。一方で、繊細で優しい面もある。髪は長く、三つ編みにして纏めている。

久しぶりに出会った自分を見る事のできる人間、雄人と共に太平洋を駆け巡る。

ひだかゆうと

日高雄人

身長：170cm

年齢：20歳

病院船「氷川丸」に乗り組む事になった青年。看護科に所属し、階級は一等兵曹。性格は温和で優しい。中の上か下あたりの、比較的裕福な家庭に育つ。氷川丸曰く、「悪い人ではないけれど、どこか抜けている」。人を傷つける事が嫌いで、看護科を希望した

理由もそこにある。

艦魂である氷川丸と出会い、彼女と共にこの戦争を戦い抜く事になる。

＜第三話＞南陽の訪問者

横須賀を出港して一週間後の十二月三十日。「氷川丸」はマーシャル諸島を目前にしていた。傷病兵たちが収容されているルオット島への到着予定日は翌日である。

「氷川丸」デッキ上。そこには三つ編みを風に靡かせる氷川丸の姿があつた。水平線を見詰める彼女の表情には若干の緊張が浮かんでいる。

「やあ、氷川丸」

この一週間で聞き慣れた声に氷川丸が振り返る。声の主である雄人が氷川丸に歩み寄る。

「いい天気だね」

よく晴れた空を仰ぎながら雄人が言う。氷川丸は無言で頷いた。

「気持ちいいね」

「・・・そうですね」

答える氷川丸の声は硬い。雄人は首を傾げた。

「・・・氷川丸、何かあつた？」

「え？」

「今日の氷川丸は何かいつもと違うというか・・・硬い感じがする」

雄人の言葉に氷川丸は驚いたような表情をした。

「やはり、そう見えますか・・・確かに、私は少し緊張しています。顔には出していないつもりでしたが・・・ばれちゃったね」

「・・・明日の事？」

「はい。初任務ですから。正直言って、不安です」

硬い表情のまま氷川丸が言う。それを聞いた雄人は意外そうに言った。

「へえ、氷川丸でもそんな気持ちになるんだ」

「・・・今、さりと失礼な事を言いませんでしたか？」

氷川丸が鋭い視線を雄人に送る。雄人は慌てて弁解した。

「あつ、違う違う。氷川丸に繊細さが無いって意味じゃなくて、えつと・・・ほら、氷川丸は真面目で何でもそつなくこなせるイメージがあつたから意外だなあ、って思つて」

「・・・そういう意味でしたか。ですが、次からは誤解を招くような言い方は謹んで下さい」

「気をつけます・・・」

「でも」

「??」

先ほどとは一転した柔らかい口調。肩を落としていた雄人が顔を上げると、そこには氷川丸の穏やかな微笑があつた。

「雄人さんに話したら、心の中が少しすっきりしました。ありがとうございます」

「どういたしまして」

微笑む氷川丸に雄人も笑い返す。その後、二人は氷川丸の部屋でお茶を楽しみ、明日から始まる怒涛の日々までの束の間を過ごした。

翌日の十二月三十一日。「氷川丸」はついにルオット島に到着した。

赤道付近の強烈な日差しが肌を焼き、蒼い海がきらきらと光る。前方に見えるルオット島にはドイツ領時代に植えられた椰子の木が立ち並んでいて、典型的な南国の島という印象を与える。常夏の海の気温は十二月といえども高く、じっとしていても汗が滲み出ている。

真っ白な船体を陽光に輝かせる「氷川丸」。その船上で雄人が汗を拭った。

「暑い・・・」

太陽が照りつけるデッキの上で雄人が眩く。その隣では同じように氷川丸がハンカチで汗を拭っている。

「本当に、暑いですね。横須賀を出て三、四日間はまだ寒いくらいだったというのに・・・さすが赤道ですね」

言い終えて氷川丸は手を空中にかざした。すると、淡い光と共に二本のラムネが現れた。念じたものを具現化させる艦魂の力を使って出現させたものだ。

「飲みますか？」

「うん」

差し出されたラムネを雄人が受け取る。暑さで乾いた喉にラムネの炭酸が染み渡る。

「いよいよ到着だね」

「はい」

雄人の言葉に氷川丸が頷く。「氷川丸」は現在、島の沖に停泊するための投錨作業を行っている。前方に見えるルオット島にはウエーキ島攻略作戦に参加した艦艇が錨を落としている姿が見える。

「うわあ、凄いなあ・・・」

停泊する艦隊の威容に雄人は感嘆の声を漏らす。この時、雄人の目に映っていた艦は第四艦隊の「夕張」「天龍」「龍田」といった

軽巡や、応援に駆けつけた第六戦隊の「古鷹」「加古」「青葉」「衣笠」だった。

「氷川丸」の投錨作業が完了するや否や、それらの在泊艦艇から下ろされた内火艇が次々と「氷川丸」へと向かってきた。

「うわっ！な、何だ！？」

突然の出来事に驚く雄人。彼は他の兵たちと一緒に慌てて舷梯を下ろしにいった。舷梯を登って内火艇から人が移って来る。彼らはデッキに上がるなり口々に医薬品の支給を求めた。

「俺は『青葉』から来た。医薬品を補充したい。病院長に会わせてくれ」

「俺は『衣笠』からだ。俺の所にも分けてくれ」

「え、えつと・・・取り敢えず、こちらへ」

雄人は逸る人々を抑え、受付のある先任伍長室へと連れて行った。

「ふう、びつくりした・・・」

氷川丸の所に戻って来た雄人は溜息をついた。氷川丸が彼に労いの言葉をかける。その時、二人の目の前に光が生まれ、一人の少女が現れた。

光の中から降り立った少女は、幼い容姿をしていた。歳は十代前半。髪はそれほど長くなく、大きな丸い瞳が眼鏡のレンズ越しに覗く。服装は軍服ではなく、科学者が着ているような白衣だった。

「私は第六水雷戦隊旗艦『夕張』艦魂の夕張です。ウェーキ島攻略部隊本隊の旗艦として挨拶に参りました」

科学者の格好をした少女——夕張が敬礼する。氷川丸も答礼して自己紹介する。

「海軍特設病院船『氷川丸』艦魂、氷川丸です。ウェーキ島攻略作戦の負傷者の収容を行いに参りました」

「遠路はるばるご苦勞様です。負傷者は後ほど輸送船で送るので、よろしく願います。では、私はこれで」

そう言つて夕張が立ち去ろうとした、その時。新たな光が生まれて二つの人影が現れた。

「病院船の艦魂にお知らせだよ……つて、うわあっ!!」

ドンッ!!

光の中から飛び出した片方の人影が自艦へ戻ろうとしていた夕張に激突した。もの凄い勢いでぶつかった人影は夕張諸共デッキに転倒して停止した。

「痛たた……」

ぶつけた額をさすりながら夕張にぶつかった少女が立ち上がる。歳の頃は氷川丸と同じくらい。髪型はショートヘアで、綺麗な青葉の形をしたヘアピンで前髪を留めている。彼女は自身の下敷きになつてのびている夕張に気づくと、慌てて抱き起こした。

「ゆ、夕張っ！大丈夫！？・・・酷い。誰がこんな事を」

「貴女ですよ・・・」

「え、っ！？」

氷川丸の嘆息混じりの言葉に少女が衝撃を受ける。氷川丸は愕然としている少女に話しかける。

「私は病院船『氷川丸』艦魂の氷川丸です。・・・貴女は？」

「私？私は青葉型巡洋艦一番艦『青葉』艦魂、青葉だよ。ついでに言っておくと第六戦隊旗艦。よろしくッ！」

「はい。よろしくお願いします。青葉さん」

「ダメダメ！『さん』付けなんて余所余所しいよ。呼び捨てでOK！あ、そうそう。氷川丸にお知らせが・・・」

「青葉、少し落ち着いて」

機関銃のように話し続ける青葉をもう一人が遮る。彼女は氷川丸に向き直ると口を開いた。

「私は古鷹型巡洋艦一番艦『古鷹』艦魂、古鷹です。青葉が騒がしくてごめんなさい」

「いえ、お気になさらずに。元気があって良いと思いますよ」

「そう言ってもらえると助かるわ。ありがとう」

黒い長髪を流して古鷹が微笑む。古鷹は氷川丸より少し年上、十代後半頃の容姿。落ち着いた雰囲気を持つ女性である。

「ねえねえ、氷川丸」

「なに？青葉」

「氷川丸にお知らせ。ウチントコの乗組員たちが薬貰いに押し寄せてくるから気をつけて・・・って、もう来ちゃってるみたいだね」

「うん・・・。次からはもっと早く来てね。大変だったから」

青葉が言葉の途中で下ろされた舷梯とそこに群がる内火艇を見つけて、苦笑した。氷川丸は懇願するような口調で言った。

「僕、完全に忘れられてるよね・・・」

三人が賑やかに会話をしている中、雄人は日陰で夕張を寝かせていた。船内から調達してきた氷袋を夕張の額に載せる。

「う・・・ん・・・」

氷の冷たさに刺激されたか氷川丸たちの声が聞こえたか、夕張が薄っすらと瞼を開いた。その瞳が雄人を映す。

「気がついた？」

「あなたは・・・？」

「僕は日高雄人一等兵曹。『氷川丸』の乗組員だよ」

「・・・艦魂が見えるんですか？」

「うん。見えるよ」

夕張の問いに雄人が頷く。夕張はどんぐりのように大きい瞳を開き、驚きの表情を見せた。

「艦魂が見える人なんて、初めて会いました。・・・あれ？」

段々と意識がはつきりとしてくるにつれ、夕張は自身の置かれた状況に気づいた。デッキの日陰で横に寝かされている夕張。彼女は雄人の足を枕代わりにしていた。要するに膝枕。

「・・・ふ、ふええええええええつつ！？」

叫び声を上げながら夕張が飛び上がる。その拍子に額の氷袋が落ち、中身がこぼれた。夕張は顔を真っ赤にして固まった。

「夕張・・・どうしたの？」

「っ！いえ、何でもありませんっ！」

雄人の問いに答える夕張の顔は、赤い。舌が回らずに言葉を囁んだ。

「~~~~ツ!!」

言葉を囁んだ事により恥ずかしさが上乘せされ、夕張はさらに顔を赤くする。そこへ、叫び声を聞いた氷川丸たちがやって来た。

「夕張どうしたの!? 顔真っ赤だよ?」

「雄人さん、何があつたんですか?」

青葉が夕張に、氷川丸が雄人にそれぞれ聞く。固まって答えない夕張に代わって雄人が答える。

「それが・・・よく分からないんだよ。日陰で寝かせていて・・・起きたと思ったら赤くなつてまた固まつて・・・」

「ふうん。・・・って、キミ、私たちが見えるの?」

「うん。僕は日高雄人。『氷川丸』の乗組員だ。因みに階級は一等兵曹」

自己紹介した雄人に青葉と古鷹も再び自己紹介する。

「日高一曹、か。よろしくね」

「雄人で良いよ」

「うん、それでもいいんだけど・・・ねえ?」

氷川丸の事を横目で見ながら青葉は意味深な笑みを浮かべる。雄

人は頭上に疑問符を浮かべ、氷川丸は微かに頬を朱に染めた。

「ま、とにかく。私と姉さんは日高一曹って呼ぶよ」

「分かった。宜しく」

雄人と青葉、古鷹が互いに握手をする。

「挨拶も済んだ事だし、私達はそろそろ御暇おいとまするわ。また会いましょうね」

「またね」

硬直した夕張を連れて古鷹と青葉が瞬間移動する。デッキの上に静寂が戻った。

「賑やかでしたね、雄人さん」

「そうだね」

「一旦部屋に戻りましょうか」

氷川丸が言った時、船内に放送が流れた。負傷者を乗せた輸送船「海平丸」が接舷する。手の空いている者は負傷者を「氷川丸」に移乗させよ、と。

「・・・どうやら休んでいる暇は無いみたいだね」

「頑張ってください、雄人さん。冷たい飲み物を用意して待っていますね」

「うん。ありがとう。行ってくるね」

「行つてらっしゃい」

雄人は氷川丸に手を振り、作業に向かった。

<第三話>南陽の訪問者（後書き）

氷川丸「前回の更新から間が空きましたね」

作者「はい。学校の定期試験が近付いてきたもので・・・」

氷川丸「確かに、試験は疎かにはできませんね。ただ、こちらの更新も忘れないで下さいね？」

作者「承知しております」

氷川丸「では、今回はこの辺りで・・・」

青葉「ヤッホーッ！！お邪魔しまーすっ！」

氷川丸「っ！？」

作者「ああ、青葉。いらっしやい」

氷川丸「びつくりした・・・。青葉、いきなり大声出さないでよ」

青葉「あはは、ゴメンゴメン」

作者「あれ？夕張と古鷹は？二人も呼んだ筈だけど」

青葉「姉さんは固まったままの夕張に付き添い中。二人とも来れないよ」

作者「了解」

青葉「それにしても、豪華な部屋だね。ここどこ？」

氷川丸「私の一等社交室だよ（後書き内では『氷川丸』は貨客船の状態です）」

青葉「氷川丸のかぁ。さすが客船。ウチとは比べ物にならない豪華さだね。・・・お、ソファーもふかふか♪」

氷川丸「青葉、お茶淹れようか？」

青葉「うん、よろしく」

作者「では、今回はこの辺りで。この作品を読んでくれている全体的の方に心よりの感謝を申し上げます」

青葉「意見・感想もよろしくね」

登場人物紹介

夕張ゆうばり

夕張型巡洋艦一番艦

身長：138cm

外見年齢：11歳

姉妹艦：なし

夕張型軽巡洋艦の一番艦。実験艦であるため、姉妹艦はいない。

科学者の様な白衣が特徴。幼い外見の通り、純真無垢な性格。好奇心も強く、自称「ノーベル科学賞ものの実験（実際は小学校の理科実験程度）」を度々行っている。

青葉あおば

青葉型巡洋艦一番艦

身長：160cm

外見年齢：17歳

姉妹艦：衣笠

古鷹型重巡洋艦を改良した青葉型重巡洋艦の一番艦。明るさが取柄の元気娘。ざつくばらんな性格で、誰にでも気軽に話しかける。余りに話しすぎるため、周りから注意される事もしばしば。青葉型は本来、古鷹型として計画されていたため、古鷹型の二人を姉と呼んでいる。歳の近い氷川丸とは馬が合う様子。

古鷹ふるたか

古鷹型巡洋艦一番艦

身長：165cm

外見年齢：19歳

姉妹艦：加古

古鷹型重巡洋艦一番艦。髪は長く、落ち着いた雰囲気を漂わせている。誰にでも丁寧な言葉遣いで接し、優しいと評判。一方で、怒ると鬼も逃げ出す程に怖いという噂があるが真偽は不明。

<第四話>任務開始！

錨泊する「氷川丸」に負傷者を乗せた輸送船「海平丸」かいへいまるが接舷する。接舷を確認すると、担架を担いだ兵員が「氷川丸」から「海平丸」に乗り移る。その中には雄人の姿もあつた。

「自分は下半身を持ちます。一曹は上半身を」

「分かった」

相方の兵の言葉に頷き、雄人は傷病兵の両脇を持つ。そして、二人がかりでその人物を持ち上げ担架に乗せた。

「「せーのっ！」」

二人で声を合わせて担架を持ち上げる。患者を揺らさないように気をつけながら「氷川丸」へと運ぶ。二隻の船の間に架けられた渡し板を渡り、雄人は患者を「氷川丸」船上に運んだ。

患者を「氷川丸」に運んで来ると、船上で待機していた兵員が患者を受け取り、甲板上のハッチからクレーンを使い患者を船内に下ろす。ぱつくりと口を開けたハッチの中に、クレーンに吊られた患者がゆつくりと下ろされていく。船内に下ろされた患者は、そこから客室を改装した病室へと搬送される。これらのハッチは、貨客船時代に貨物の積み込みに使用されていた物だ。

患者を託した雄人は空になった担架を担ぎ、相方の兵と共に再び「海平丸」へと乗り移った。「海平丸」に溢れる傷病兵を片端から担架に乗せ、「氷川丸」へと運び込む。甲板上のハッチだけでは患

者を捌き切れず、比較的軽症の患者は背負って病室まで搬送するな
どした。

数時間に及ぶ患者の収容作業は昼過ぎになってようやく終わった。
この収容作業で「氷川丸」が「海平丸」から収容した傷病兵は一八
七名に上った。

収容された患者たちは身体を清潔にされ、包帯などを取り替えら
れた。傷病兵用の白衣に着替えた患者たちを軍医士官の医師たちが
診察していく。下士官や兵は診察の補助や患者の手当てにあたる。
雄人も患者の手当てに携わり、他の兵たちと共同で包帯の交換や傷
口の消毒などを行った。

「・・・看護師さんよ」

包帯を取り替えている最中、兵士が口を開いた。彼の歳は二十代
中頃。雄人より少し年上だ。

「何ですか？」

何かを言おうとした兵士は傷の痛みで顔をしかめた。痛みが去る
と彼は雄人の顔を見てこう言った。

「ありがとな。来てくれて」

「いえ。これが僕たちの仕事ですから」

雄人が答えると兵士は笑った。

「そうか。でも・・・来てくれて本当に助かった。ありがとう」

一日の作業を終えた雄人は氷川丸が待つ一等客室へと向かった。扉を開けると、椅子に座って読書をしている氷川丸の姿が目に入った。

「あ、お帰りなさい。雄人さん。お疲れ様です」

「ただいま」

扉が開く音に気づいた氷川丸が顔を上げる。彼女の顔を見た雄人は若干の驚きを覚えた。

「あれ？氷川丸、目悪かったの？」

「え？・・・ああ、これですか？」

そう言って氷川丸はかけていた眼鏡を外した。

「目は悪くないですよ。ただ、物をよく見る時は眼鏡をかけるようにしているんです。ほら、こんな風に」

氷川丸は外した眼鏡をもう一度かけ直した。細い黒縁の眼鏡は落ち着いた雰囲気の水川丸にぴったりで、彼女をより知的に見せていた。いつもより大人びた雰囲気の水川丸に、雄人は胸が高鳴るのを感じた。

「ところで、水川丸が読んでいた本って、どんな本なの？」

「『平家物語』です」

氷川丸が見せたのは豪華な装丁に包まれた厚い本。表紙には平氏一族の興亡を描いた軍記物語の題名が記されていた。

「『平家物語』……。渋いね……」

「……別に良いじゃないですか。私がどんな本を読んでも」

「それは、そうだけど……」

確かに、氷川丸がどんな本を読もうとそれは彼女の自由であり、雄人に口出しする権利は無い。しかし、可憐な少女が読んでいる本が「平家物語」というのは違和感がある。

「飲み物を取って来ますから、少し待っていて下さい」

氷川丸は読みかけの本に栞を挟み、瞬間移動で部屋を去った。雄人はテーブルの上に置かれた本を手取る。その本の最初の一ページを読み終わる前に、氷川丸が戻って来た。

「お待たせしました……。って、人の本を勝手に読まないで下さい」

「ごめん、ごめん」

「アイスティーです。どうぞ」

「ありがとう」

氷川丸は二つのグラスをテーブルに置く。グラスの中には氷で冷やされたアイスティーが注がれている。

「このアイスティー、よく冷えてるね。美味しいよ」

「予め作っておいた物を厨房の冷蔵庫を借りて冷やしておいたんです」

「なるほど。上手い事を考えたね」

「喜んでもらえてなによりです」

嬉しそうに笑う氷川丸。と、彼女の顔に影が落ちた。

「それで・・・どうでしたか？収容された兵隊さんたちは・・・」

恐る恐るといった様子で聞く氷川丸に雄人が答える。

「うん・・・。患者の殆どは身体に銃弾を受けている。銃弾が身体を貫通している人もいれば体内に残ってしまっている人もいる」

「身体に、銃弾・・・」

そう呟く氷川丸の顔は蒼い。恐らく、身体を銃弾が貫く光景を想像しているのだろう。唸りを上げ、猛烈な速度で我が身を貫く弾丸。肉が抉られ、鮮血が飛び散り、断末魔の叫び声が響く。その光景は例え想像のものでも少女を恐怖に陥れるには十分だった。

「助ける事は、できるんでしょうか・・・」

俯く氷川丸に雄人はしつかりとした口調で言う。

「それが僕たちの仕事だ」

「・・・そうですね。私たちが弱気でいたら、人を助ける事ではできませんよね」

氷川丸は瞼を閉じ、深呼吸を一つした。

「傷付いた人を助ける事が病院船の務め。ならば私は、粉骨碎身の気持ちでその務めを果たします」

氷川丸が力強く宣言する。雄人も決意を口にする。

「僕もだ。一生懸命やるよ」

決意の籠った眼差しで意気込む二人。すると、氷川丸が吹き出した。

「えっ、どうして笑うの!？」

「だって、いつもぼけっとしてるのに・・・雄人さんに真面目な顔は・・・くくっ、似合いませんよ」

「酷っ!」

必死に笑いを堪える氷川丸とショックを受ける雄人。さっきまで部屋を支配していたシリアスな雰囲気は一瞬の内に崩れ去った。

「冗談ですよ。そんなに気を落とさないで下さい」

口ではそう言う氷川丸だが、まだ笑いを堪えているのがばれだ。その後暫く、落ち込む雄人とそれを慰める氷川丸のやり取りが続いた。

氷川丸の慰めにより雄人が精神的打撃から立ち直った後。一頻り談笑した雄人は自室に戻る事にした。

「それじゃあ、そろそろ僕は戻るよ」

「はい。お休みなさい、雄人さん」

「うん。お休み」

雄人はそう言うトドアノブに手をかけた。部屋を出ようとした瞬間、雄人が振り返って言った。

「あ、そうそう。氷川丸、その眼鏡すごく似合ってるね。可愛いよ」

瞬間的に頬を朱に染めた氷川丸が言葉を発する前に雄人は部屋の外へ姿を消した。小さく音を立てて扉が閉まり、部屋に静寂がもたらされた。

「・・・・・・・・つ」

氷川丸は頬を紅く染め、彼が去ったあとを見つめていた。無言だった氷川丸はやがて、くすつと小さく笑った。

「可愛い、って言うてくれました・・・」

頬を朱に染めながらも、嬉しそうに呟く氷川丸。彼女は暫く幸せそうな笑みを浮かべていた。

<第四話>任務開始！（後書き）

作者「Buenos Dias!」

青葉「ぶ、ぶえの・・・何て言ってるの?」

氷川丸「Buenos Dias・スペイン語で『こんにちは』
って意味よ」

青葉「へえ」。氷川丸、スペイン語話せるんだ」

氷川丸「挨拶だけね。・・・で、何でいきなりスペイン語なんですか?」

作者「この間、期末テストがあっただ。そうしたら、スペイン語で大苦戦してね。一から復習している所なのさ・・・」

氷川丸「まったく・・・。普段からしっかり勉強していないからこうなるんですよ。反省して下さい」

作者「仰る通りで・・・」

青葉「ははは。容赦ないね」

氷川丸「スペイン語の話はさて置き。本編の方はようやく病院船らしい話になりましたね。少しだけですが」

作者「はい。これからもっと病院船らしくしていきたいです」

氷川丸「それと、更新ペースに大体の目処が立ったそうですね」

作者「ええ。基本的に、一ヶ月に一度のペースで更新する事になると思います。遅筆なため、中々筆が進まず・・・」

氷川丸「まあ、自分のペースで進めて下さい。くれぐれも放置する事だけはしないように」

青葉「そうそう。放置だけは勘弁してね。私なんか、最後は修理もされずに呉で・・・モゴッ!？」

氷川丸「（青葉の口を塞ぎ、小さな声で）それは禁句！本編ではまだ開戦直後なんだから」

青葉「（首を縦に振って頷く）」

氷川丸「（青葉を開放して）・・・さて、ではそろそろ締めまし

ようか」

作者「そうだね。毎度の事ながら、この作品を読んでもくれている
全ての方に心よりの感謝を。ありがとうございます」

氷川丸「ご意見・ご感想、お待ちしております」

<第五話>船上の正月

朝四時を少し過ぎた頃。東の水平線を染めながら朝日が顔を出す。北緯九度、東経一六七度という座標に位置するルオット島の日の出は日本と比べ遥かに早い。炉から取り出したばかりの鉄の様に真っ赤に燃える太陽が、世界に光をもたらす。

海上に佇む純白の病院船「氷川丸」。彼女の船体にも朝日が神々しい光を投げる。純白の船体がそれを反射し、美しく輝く。その姿は天使か女神の様に見えた。

その「氷川丸」船上。雄人は東から昇る朝日を眺めていた。起床時間まではまだ時間があるが、彼はそこに立っていた。

「早いですね」

背後からかけられた声に雄人が振り向く。そこには長い三つ編みを下げた少女が立っていた。

「そう言う氷川丸もね。どうしたの？」

「特に理由は。ただ、目が覚めたので」

「僕も同じ。何故か分からないけど目が覚めちゃってね」

氷川丸は雄人の隣に立つ。手摺に手をつき、朝日を眺める。

「綺麗ですね」

「そうだね。綺麗な初日の出だ」

「雄人さん」

雄人に向き直る氷川丸。昇り行く朝日を背に、彼女は言う。

「あけましておめでとうございます」

「うん。あけましておめでとう、氷川丸」

「今年もよろしく願いしますね」

「こちらこそ。宜しく」

初日の出を見ながら新年の挨拶を交わす二人。今日は一月一日。激動の昭和一六年は昨日で終わりを告げ、今はもう新たな年。昭和一七年が、始まるうとしていた。

朝六時。起床ラッパが鳴り兵員たちが起き始める。布団を畳み、手早く身支度を済ませたらそこから日朝点呼、体操と続くのが普段の流れなのだが、今日は少し勝手が違った。

七時一五分。「氷川丸」後部デッキに全乗組員が召集された。デッキに並ぶ兵員たちは皆、純白の第二種軍装に身を包んでいる。純白の船体を持つ「氷川丸」の上に、同じく純白に身を包んだ男たちが集まっている。正装をしているのはもちろん、新年を祝うためだ。天皇陛下が居られる宮城を遥拝した後、総員で記念撮影を行った。記念撮影の時には氷川丸も雄人の隣にひよっこりと入っていた。後

日、写真が現像された時にそこに人影の様な物が見えるといつて、ちょっとした心霊写真騒ぎになったのだが、それはまた別の話。

記念撮影が無事に終わると、全員に雑煮が振舞われた。「氷川丸」は徴用にあたり、船と乗組員が一体で借り上げられる形式になっていたため、「氷川丸」固有の乗組員も多く乗っていた。日本郵船時代からの熟練の司厨員たちが作った雑煮は頬が落ちるほどに美味しく、誰もが舌鼓を打った。雑煮に入っている餅は「氷川丸」甲板で乗組員たちが搗いた冬餅ならぬ南国餅である。

美味しい料理は心を和ませる。今が戦時中である事も、ここが戦地である事も忘れ、乗組員たちは互いに新年を祝い合った。この時ばかりは普段は厳しい上下の関係も些か緩み、階級を超えて互いに語り合った。

「はい、氷川丸」

プロムナードデッキに立つ氷川丸へ雄人が雑煮を持って来る。氷川丸はお礼を言っただけを受け取った。

「本当にお正月なんですネ」

雑煮を食べながら氷川丸がしみじみと言う。雄人は怪訝な顔をした。

「当たり前じゃないか。いきなりそんな事言っただうしたの？」

「ここの風景を見ると、日付の上ではお正月だと分かっているけどもなかなか実感が湧かなくて・・・」

お雑煮を食べて、ようやく実感が湧きました」

「あはは。確かにそうだね」

雄人はデッキからの景色を見て苦笑した。蒼い海にぎらぎらと照りつける太陽。椰子の木が生える島。正月というよりは、真夏だった。

「おい、貴様暇か？」

後ろから声がかけられる。雄人が振り向くと、中尉の階級章をつけた士官が数人の兵を引き連れてこちらに来ていた。

「あ、はい。特にやる事はありませんが・・・」

「そうか。それなら、少し俺達を手伝ってくれ」

「手伝い、ですか？」

「ああ。これから病室の奴らにも雑煮を配りに行くんだが、もう少し人手が欲しくてな。貴様も来い」

「はい。分かりました」

雄人は頷くと、氷川丸に場を離れる事に対する謝罪の視線を送った。氷川丸は「仕方ないですね」と言うように肩を竦めた。

「よし、行くぞ」

中尉を先頭に、雄人たちは雑煮を患者たちに配りに行った。

「勇敢なる兵士諸君、新年あけましておめでとう！」

大きな声で言いながら中尉が病室に入る。部屋の中の視線が彼に集まった。

「君たちも知つての通り、今日は一月一日。元旦だ。そこで、我々から君たちに贈り物がある！」

中尉の言葉を合図に雄人達が部屋へと入る。その手に持たれた物を見た瞬間、患者達から歓声が上がった。

「おおっ！！」

「新年といえば雑煮だ！たとと食え！」

雄人達が患者に雑煮を渡していく。渡した途端に彼らは雑煮に食いつき、あつという間に平らげた。幸せそうなに雑煮を頬張る彼らを見てみると、心が温かくなるのを感じた。

「あまり急いで食うなよ？餅を喉に詰まらせて死んだなんて、洒落にならんからな！」

そう言つて中尉はガハハと豪快に笑った。それにつられて他の兵たちも大きく笑った。

患者たちに雑煮を配り終えた雄人はその後、別の士官に捕まり今度は島の野戦病院に氷を贈りに行く事になった。氷はもちろんの事、水さえ満足に手に入らない島の兵士たちにとってこの贈り物は何物

にも勝る最高の贈り物だった。貰った氷を氷水にして飲んだ兵士たちは口々に生き返る心地がすると言い、感謝の言葉を述べた。

南国の日の出は早い。それは同時に、日の暮れも早いという事を意味している。朝四時に日が昇るルオットでは、午後四時になる少し前には日が暮れる。西の海を薔薇色に染め上げて、赤く膨れた夕日が水平線に没する。やがて完全に日が沈み、南国の島に夜がやってきた。漆黒の夜天に、白銀の星屑が輝く。

雄人と氷川丸は夜風に当たりながら星空を眺めていた。

「こうして見ると、星って宝石みたいですね」

「宝石かあ。そう言われると、確かに宝石みたいだね」

「あれを身につける事ができたら、きっと綺麗なんでしょうね」

氷川丸はうつとりとした様子で溜息をつく。その姿はどこにでもいるような、普通の女の子だった。そんな彼女がこれから危険に満ちた海を駆けていかなければいけない事を思うと、雄人の胸は痛んだ。

「あ！あれ、南十字星じゃないですか？」

氷川丸が夜空の一点を指差して言う。雄人が視線を送ると、無数に光る夜空の中に一際輝く四つの星があった。

「私、南十字星なんて初めて見ました。シアトル航路では絶対に

「あつはは。ゴメンゴメン」

悪びれた様子もなく笑顔で謝っているのは、青葉の形のヘアピンをつけたショートヘアの少女。青葉型巡洋艦一番艦「青葉」艦魂の青葉だ。

「あ、日高一曹。どうもこんばんは」

氷川丸を適当にあしらいつつ、青葉は雄人に挨拶する。雄人も挨拶を返す。氷川丸も何を言っても無駄だと思ったのか、静かになった。

「……で、何の用なの？」

「んー、特にないよ。遊びに来ただけ」

「なら早く帰って」

「ひどっ!？」

「冗談よ。……………多分」

「多分なの!？」

「嘘よ。本当に冗談」

「うう……酷いよ氷川丸」

「海に落とされたお返しよ」

氷川丸が小さく舌を出す。青葉は膨れっ面を作るが、その表情は楽しげだ。昨日会ったばかりなのに、二人はすっかり打ち解けている。どうやら馬が合うらしい。

「せっかくのお正月だっていうのに、こつも人数が少ないとつまらないなあ」

青葉が愚痴を零す。現在ルオット島に錨泊している艦艇は十指に満たない。「夕張」率いる第六水雷戦隊と「天龍」「龍田」は昨日の内にトラックへ向けて出港していた。ルオットに残っているのは「青葉」率いる第六戦隊（巡洋艦四隻）と敷設艦「沖島」を旗艦とする第十九戦隊（敷設艦四隻）程度だった。

「ああ、早くトラックに戻ってみんなと騒ぎたいな」

澄んだ漆黒を眺めながら青葉は言う。口が寂しくなったのか、おもむろにラムネを出現させて栓を開けた。

「ねえ氷川丸、何か面白いものない？」

「面白いもの、ね……。ちよつと待ってて」

そう言つて氷川丸は暇を潰せそうな物を探しに行った。戻つて来た氷川丸が手にしているのは、輪投げの道具一式。それを見た青葉はむっとした表情を作る。

「氷川丸。私のことバカにしてるでしょ」

「そんな事ないわよ。青葉こそ輪投げのこと馬鹿にしてるみたいけど、輪投げは客船の船客たちにも提供されていたれっきとした娯

「楽しんだからね」

目標となるピンを置きながら氷川丸が言う。

「そうなのかあ。ってことは、それは氷川丸が客船だった頃に使用ってたやつ？」

「ご名答。雄人さんはどうですか？」

「うん。やらせてもらおうよ」

棒を置き終えた氷川丸は雄人と青葉がいる所まで戻るとルールを説明した。

「ルールは簡単。この九本の輪を投げてピンに入れる。投げ入れたピンに書かれた数字の合計が多い方が勝ち。重複した場合はそれも計算に入れる。分かった？」

「ああ」

「もっちらん！」

三人の立つ位置から目標である棒までの距離は八メートル強。まずは青葉が輪を投げる。

「いつけええっ！」

勢い良く投げられた輪が空を切り、ピンへと向かう。そしてそれは「3」の数字が書かれたピンに入った。

「よしっ、3点ゲット！」

青葉がガッツポーズをとる。残る八本の輪の内、さらに三本がピンに入り、合計得点は16点になった。

「次は僕だね」

雄人が輪を投げる。九本の内、四本が入り得点は12点。

「うーん、12点かあ・・・」

「私の方が上だね」

ピンに入った輪の数は共に四本。しかし、雄人が入れたピンは点数が低いピンだったため、青葉の点数には及ばなかった。

「最後は私ね」

二人の横から氷川丸が一步、前へ出る。その瞳には遊びを楽しむ子供の様な輝きと、獲物を狙う鋭さが宿っている。

「ちよつと間が空いちゃったけど・・・それっ！」

氷川丸が輪を投げる。力み過ぎず、かといって弱すぎず。絶妙な力の入れ具合で投げられた輪は的確にピンを射止めた。

「まずは9点、っと」

涼しい顔をして言う氷川丸。彼女はさらに点数を伸ばし、結果は命中六本、合計27点。

「私の勝ちね」

「うー……。もう一回！」

11点差をつけられて敗れた青葉が再戦を申し込む。デッキの上に輪を投げる音と、それに合わせて一喜一憂する少女たちの声が響く。

「氷川丸、投げるの上手いなあ。……………それっ！」

「当たり前よ。太平洋を往復してる間、何回やったと思ってるの？……………えいつ！」

会話を挟みながら輪投げをする二人。雄人はその様子を壁に背を預けながら眺めている。

一頻り輪投げを楽しんだ青葉は自艦へと戻っていった。帰る間際、古鷹の説教が待っていると云って顔を青くしていた。なんでも、戦隊旗艦の職務をほったらかしにして遊びに来ていたらしい。艦魂にも人間と同様に階級や役職があり、第六戦隊旗艦の青葉は大佐の階級を持っている。といっても、ざつくばんな性格の彼女は階級は飾り程度にしか考えておらず、階級の関係無しに誰にでも気軽に話しかけている。そして、艦魂たちにも各々の階級に応じて書類整理などの職務がある。連合艦隊旗艦ともなれば、それこそ山の様な書類に目を通さなければならなくなる。戦隊旗艦の青葉が目を通さなければならぬ書類はそれほど多くはなかったが、それでも遊び好きな彼女にとって机に縛り付けられるその行為は苦行であった。

「ああ、憂鬱だなあ……………。氷川丸、私の代わりに書類片付け

てくれない？」

「イヤ。そういうのは自分でやるべきよ」

氷川丸はぴしゃりと言った。青菜に塩をかけた様に青菜が萎れる。

「ほら、落ち込んでても書類は減らないんだから。早く片付けちゃった方がいいわよ」

青葉の背中を叩く氷川丸。その様子は、宿題を嫌がる生徒に注意する学級委員のようだった。

「面倒くさいなあ・・・」と呟きながら青葉は自艦に帰る。それを見送った二人はそれぞれの部屋に戻った。

慌しくも平和な一日が過ぎ去り、戦場の元旦は終わりを告げた。

嵐の前の静けさか・・・夜闇の中、船体に打ちつける波は不気味なほどに静かだった。

<第五話>船上の正月（後書き）

氷川丸「『蒼海の天使』 第五話。あとがきコーナーの始まりです」
青葉「ねえねえ氷川丸」

氷川丸「何？青葉」

青葉「・・・あれ、なに？」

作者「orz」

氷川丸「ああ、あれね。サッカーのW杯で日本が負けちゃったから落ち込んでいるらしいわ」

青葉「そーなのかー」

氷川丸「そうなのよ。普段はスポーツにはあまり関心がない作者さんも、今回は興味を持っていたみたい」

青葉「・・・それって、にわかファン？」

作者「そんな言い方はないだろっ？確かに、にわかファンかも知れないけど！日本チームを応援する気持ちはしっかり持っていたんだから！」

青葉「うわっ！？復活した！」

氷川丸「ようやく起きましたね」

作者「さて。今回の話、如何だったでしょうか？」

氷川丸「今回は前回までと比べて少し長いですね」

作者「少しね。いつも三千文字ちよいのところが五千文字くらいになった」

氷川丸「それに見合った質はあるんですか？」

作者「頑張っではいる。でも、まだまだ精進する必要性は感じている・・・」

氷川丸「では精進して下さい」

作者「はい・・・」

氷川丸「それでは、締めましょうか」

作者「この作品を読んでくれている全ての読者様に心からの感謝

を送ります」

氷川丸「次回もお楽しみに」

青葉「意見・感想も受付中」

<第六話>昇る煙 零れる雫

緊張が張り詰めた戦場に束の間の平穏が流れた翌日。再び日が昇ったルオット島は戦場としての自覚を取り戻していた。その中で、一隻の船が出港の準備を行っている。純白に塗られた船体を光らせるその船は赤十字を描いた煙突から黒煙を立ち昇らせている。

出港準備に勤しむ「氷川丸」では船の運航を司る船員たちが各部の最終確認を行っている。

「私たちも後から行くね」

ゆつくりと動き出した「氷川丸」の船上で氷川丸と青葉は暫しの別れを惜しんでいた。

「早く来なさいよ？」

「分かってるって。じゃ、気をつけてね」

正午、「氷川丸」は紺碧の海に白い航跡を描きながらルオットを後にした。燦々と日差しが照りつける海を「氷川丸」は往く。トビウオが「氷川丸」の起こす波に驚き、ぴょんぴょんと飛び跳ねる。水面から姿を現したそれらは鰭を羽の様に広げ、水面すれすれの高さを滑空する。少しの間空気を捉えていたトビウオたちは、やがて海の中に姿を消した。

ルオットを出発した「氷川丸」は一月五日早朝、トラック諸島に

到着した。トラックといえば言わずと知れた帝国海軍の重要拠点である。「氷川丸」が入港した時も、旗艦「鹿島」以下第四艦隊の艦艇が停泊していた。その中には「氷川丸」と入れ違う形でルオットを出た「夕張」たちの姿もあった。

威容を海上に現す艦艇たちの間に「氷川丸」が入り込む。灰色に身を包む彼女たちの中で「氷川丸」だけはその趣を異にしていた。もつとも、ここでは純白の「氷川丸」の方が景色に映える。コバルトブルーの海は底が見通せるほどに透き通り、白い珊瑚礁がそこに輝いている。その上に身を浮かべる「氷川丸」は、その美しい船体を数倍美しく輝かせていた。

錨を下ろしたところで、病院長以下士官たちが第四艦隊司令長官である井上成美中将いのうえしげよしに着任の挨拶をするため「鹿島」を訪ねた。彼らは井上中将への挨拶を済ませると夏島にある根拠地隊や海軍病院などを巡り、そこでも挨拶をして回った。その間、艦魂である氷川丸も「鹿島」の艦魂へ挨拶をしに行き、そこで労を労われた。

さて、港に停泊した時の楽しみといえば何と言っても上陸である。トラック諸島で一番大きな夏島には内地人が営む商店が存在し、兵士たちで賑わっている。「氷川丸」の乗組員たちにも休養と慰安のため上陸の許可が与えられた。しかし、一度に全員が上陸するわけにはいかないため、上陸するのは四分の一ずつと決められた。上陸は七日から始まり、上陸を許された兵たちは我先にと陸に上がり、後日に上陸を控えた兵たちも久しぶりの陸を楽しむにしていた。

上陸が始まったその日の深夜。草木も眠る丑三つ時とはよく言つたもので、暗闇が支配する夜の海には一切の音がなく、時が止まったかのような錯覚さえ抱かせる。今宵はやけに明るい月の光が、島に灯る明かりを霞ませる。

舷窓の傍に置かれた一台のベッド。そこに横たわる兵士に月光が降り注いでいる。彼の命の灯火ともしびは、今正に燃え尽きようとしていた。舷窓の外に見える蒼い月よりもさらに蒼く、彼の顔は染まつている。そよ風の音にも掻き消されそうな細い息が病室の静寂に溶ける。

風前の灯の命となつた彼の頭では、過去の出来事が走馬灯の様に流れていた。故郷で自分の帰りを待つ家族、生きる意味を教えてくれた恩師、日が暮れるまで共に遊んだ友達……。様々な懐かしい顔が自分の前に現れ、過ぎ去っていく。そして、薄っすらとその瞳を開いた彼は、自分の傍らに立つ影に気づいた。

暗くてよく見えないが、その影の輪郭は細く、まるで少女のようだった。影が、一歩前に出る。部屋に流れ込む月光がその素顔を照らし出す。

それは、間違いなく少女だった。蒼白い光に照らされた純白の少女は彼の手に自分の手を重ねた。柔らかな指先の感触を通して彼女の温かさが伝わってくる。

「……………ごめんなさい」

申し訳無さそうな、悲しそうな表情で少女は言った。

何故この子は謝っているのだろうか。兵士は思った。だが、それを深く考える前に彼は少女の頬を伝う光るものに目を奪われた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

涙を流しながら少女は謝る。白い頬を伝った雫が兵士の手に落ちる。

少女が謝る理由も、涙を流す理由も兵士には分からなかった。だが、それは問題にはならなかった。死に逝く自分のために涙を流してくれる人がいる。それだけで兵士は報われた気がした。

ありがとう——心の中で呟くと、彼は目を閉じた。そして、二度と目覚める事はなかった。その死に顔は、とても安らかなものだった。

兵士を看取った氷川丸は彼の頬をそつと撫でると涙を拭い、病室を出た。蒼白い月の光だけが、変わらず部屋を照らしていた。

日が昇る。力強い光が世界を照らし出す。人々の気持ちを清々し

くする朝の光。だが、その光を受けてなお、「氷川丸」は重い空気に包まれていた。

デッキの上に居並ぶ人々は皆一様に沈んだ表情をしている。その理由は、彼らの前に安置された棺にある。

棺の中には、今朝亡くなった兵士が眠っている。彼はルオットで収容した海軍陸戦隊の兵士だった。銃弾に倒れ傷つきながらも、生き続けようとした兵士。しかしそれが叶う事はなかった。生きるために病床で戦い続けた彼は、今朝ついに力尽きた。病院船「氷川丸」での、初めての死亡者だった。

七時十分、告別式が行われた。乗組員の中で多少の心得を持つ者が式を取り仕切った。そして八時。煙突裏に造られた火葬場で、亡くなった兵士は荼毘に付された。この火葬場も、病院船への改装時に設置されたものである。火葬の受け持ちは機関科員となっている。石油バーナーの火を使い、遺体を焼く。それを行う彼らの胸中は如何ばかりだろう。推して知るには余りある。

よく晴れたトラックの蒼穹に、一筋の煙が立ち昇っていく。それを見送る者たちは皆、一言も喋らない。全員が死んだかのような沈黙が支配するデッキの上で、常人には聞こえない泣き声が聞こえる。

「ごめんなさい・・・・・・ごめんなさい・・・・・・」

空に流れ消えていく煙を見つめながら涙を流す少女は何度も繰り返す。その顔にはやり切れない思いが浮かんでいた。

彼の最期を看取った時のように、氷川丸は泣いていた。瞳から頬にかけて、一本の線が跡を残している。

氷川丸が自らの船内で人の最期を看取ったのは、今回が初めてではない。貨客船であった頃も、それはあった。講道館の設立者である嘉納治五郎も、I O C 総会で東京オリンピック招致に尽力した帰途、「氷川丸」船上で息を引き取った。

だが、過去のそれと現在のそれは話が違ふ。かつての彼女は貨客船であり、貨物や人を運ぶのが仕事であった。それに対して、今の彼女は病院船。人の生命を救うことが仕事である。それなのに、彼の生命を救うことができなかった。少女の小さな胸は、自責と贖罪の気持ちで張り裂けそうだった。収容した患者全員を救う事ができればそれに越したことはない。だが、現実はそうはいかない。頭では分かっているつもりでも、いざその事態に直面してみると、そう簡単に割り切れるものではなかった。

やがて煙が完全に消え、遺骨が取り出された。そして葬式は終わり、一人、また一人とその場を離れていった。

全てが終わった後も、氷川丸はそこに残っていた。焦点の定まっていない瞳が虚空を映す。その背中に、雄人は声をかけた。

「氷川丸」

一度呼んでも答えはなかった。二度目で氷川丸はゆっくりと振り向いた。

「雄人……さん」

蚊の鳴くような声で氷川丸は言った。耳に届いた音から声の主が誰なのかは分かっているようだが、まだその瞳は虚ろなままだった。

「氷川丸」

彼女の前に立った雄人はもう一度名を呼んだ。その手が氷川丸の頬に触れると、氷川丸は小さく震えた。

「涙、残ってるよ。拭いて」

雄人のハンカチが氷川丸の頬を拭う。頬に残された涙の跡が消えていく。

「・・・雄人さん・・・私、助けられませんでした・・・あの人の命を、救ってあげられませんでした・・・」

氷川丸がぼつりぼつりと言う。そうする間にも、瞳の縁からぽたぽたと新たな雫が零れ落ちる。

「仕方がないよ。助けられなかったのは残念だけど、都合良く全員を助けられるとは限らない」

罪悪感に苛まれる氷川丸に雄人は慰めの言葉をかける。

「でも・・・私は、病院船です。傷ついた人を助けることが使命であるはずなのに、それができませんでした・・・。病院船、失格です・・・」

涙を湛えた瞳が上目遣いで雄人を見る。思いつめたその表情に、雄人は何を言うべきか迷った。言葉を探しても、今の氷川丸の慰めになる言葉を雄人は持っていなかった。けれど、何もしいわけにはいかなかった。

すつ、——と雄人の右手が伸びる。そしてそれは氷川丸の頭に
乗った。自分に向かって迫る手に氷川丸は初め反射的に目を閉じた
が、自分の頭を撫でる温かさに気がつき、目を開けた。

「ごめんね、氷川丸。僕は今の君にかけてあげられる言葉を持っ
ていない……。だから、これくらいしかできない」

「雄人さん……」

申し訳無さそうに言う雄人を氷川丸は見つめる。やがて、彼女は
その口元を微かに緩めた。

「大丈夫です……これだけで、十分です」

小さな声で氷川丸は言った。しかしその声音は、先程までのよう
に悲しみに暮れたものではなかった。

「雄人さんのおかげで、落ち着きました。ありがとうございます」

雄人と氷川丸はプロムナードデッキに設けられたベンチに座って
いた。二人の手にはラムネが握られている。因みにこれは雄人が船
内から持ってきた本物である。

「……先程は恥ずかしいところをお見せしました」

氷川丸が恥ずかしそうに言う。その顔は若干俯き、頬はほのかに
赤く染まっている。

「そんな事ないよ」と雄人は否定の返事を返し、続ける。

「氷川丸は自分の任務を果たそうと努力している・・・誰よりもね。だから、助けられなかった事を凄く悔やんでいる。氷川丸は真面目だから、どこか気負い過ぎているところがあるんじゃないかな。もう少し肩の力を抜いても良いと思うよ」

雄人の言葉に氷川丸はこくりと頷く。そしてラムネを一口飲むと、思い出したように言った。

「そういえば、雄人さんの上陸は明日ですよ」

「うん。そうだよ」

「久しぶりの陸、楽しんできて下さいね」

「ありがとう。帰ってきたらお土産話を聞かせてあげるよ」

「それは楽しみです。期待してますよ」

氷川丸の顔に笑顔が戻ったことに雄人は内心で安堵の息をついた。ラムネを飲み終えた雄人は仕事に向かうため氷川丸と別れた。雄人を見送った氷川丸も、転移の光に包まれて自室へ戻る。

南国の風が一つ、船内から重い空気を掃き出すように強く吹いた。

<第六話>昇る煙 零れる雫（後書き）

氷川丸「夏の足音も近づいてきた今日この頃。皆さん、いかがお過ごしでしょうか。『蒼海の天使』後書きコーナーの始まりです」

青葉「……」

氷川丸「どうしたの？青葉」

青葉「……出番が少ない。どういうこと？」

作者「仕方ないさ。氷川丸はもうトラックにいるんだから。ルオットにいる青葉は出番がなくて当たり前」

青葉「え……。つまんなーい」

作者「因みに次回も出番なしね。そもそも、主役は氷川丸なんだから出番が少なくても文句言うな」

青葉「むう……」

氷川丸「それにしても、最近は暑いですね。作者さんの通ってる学校も夏休みが近いですし、そろそろ本格的な夏になりますね」

作者「そうそう。ようやく夏休みだよ。楽しみだなあ」

氷川丸「夏休みで羽を伸ばすのも良いですけど、しっかり勉強もして下さいよ？この間の試験、散々な結果だったじゃないですか」

作者「うぐっ……。わ、分かっているさ」

青葉「大変だね」

作者「それはさておき……。夏といえば、いよいよ始まりましたね」
青葉「何が？」

作者「甲子園の県予選だよ。スポーツは苦手だけど、これは毎年見てる」

氷川丸「作者さんの高校はもう試合したんですか？」

作者「したよ。一回戦は勝った」

青葉「おお。やるねえ」

作者「うちの高校はかつては県でも指折りの実力校だったからね。甲子園出場も一度や二度ではないし。老いたりとはいえ、まだまだ一

回戦で負けられないよ」

氷川丸「このまま勝ち進んでくれるといいですね」

作者「うん。選手の間々がベストを尽くしてくれる事を祈る」

氷川丸「そうですね。では、この辺で」

作者「この作品を読んでくれる読者の皆様に心からの感謝を。次回もお楽しみに」

氷川丸「ご意見・ご感想、お待ちしております」

<第七話>乗員たちの羽休め

青い空の上で、太陽が誇らしげに輝いている。強い日差しに照りつけられる白い砂浜は熱を蓄え、素足で歩くと火傷しそうなほどに熱い。その砂浜に波が寄せ、乗り上げては勢いを衰えさせて沖へと帰っていく。ザア、ザア、という一種懐かしさを覚えさせる音が間断なく繰り返す浜。そこに作られた栈橋に、一隻の内火艇が接舷する。その接舷を確認するや否や、内火艇からわらわらと男たちが栈橋に上がる。そして、脱兎の如く街へ繰り出した。

鯨波を上げるこの群衆は、病院船「氷川丸」の乗組員。四分の一ずつの上陸が許可された、今日の上陸者たちだ。病院船への改装を終え、横須賀を出航したのが去年の12月23日。それ以来、乗組員たちにとっては半月ぶりの陸である。上陸は前日から始まっており、先の上陸を果たした乗組員から話を聞かされた彼らは自らの上陸への期待を益々募らせ、上陸日を待ち焦がれていた。

その結果が、勢い良く街に雪崩込む乗組員たちの姿となっている。兵たちは数人単位で固まって思い思いの場所へ足を運ぶ。トラック諸島の中心地であるここ夏島には、大概の施設が揃っている。道沿いにはカフェや雑貨屋が並び、人々が賑わいを見せている。道を少し歩いた所には、慰安所もある。一部の兵は一目散にそこへ向かって走って行った。

そんな中、雄人は一人のんびりと道を歩いていた。所々アスファルト舗装がされた道路は南国の強い日差しを受けて熱を帯び、日光を照り返して肌に感じる暑さを増す手助けをしている。手の甲で額の汗を拭う雄人はなるべく日陰を選びながら道を行く。そんな中、現地住民の人々は裸足でアスファルトの上を歩いている。彼らの着

ている服は鮮やかな原色に染められ、目に眩しい。棧橋から海岸沿いに延びていた道はやがて海から離れ、島の内陸へと向かう。熱帯の植物の並木を眺めながら進むと、役所などの施設が見えてくる。その中の一つに雄人は入る。

そこは、郵便局だった。窓口に座る男性局員が雄人に声をかける。雄人は局員に故郷への手紙を渡した。局員は宛先に記入漏れが無いを確認し、それから手紙を受け取った。雄人は手紙を出し終えると郵便局をあとにした。

外に出た途端、南国の熱気が肌に絡む。

行きと同じように雄人は日陰を選びながら歩く。日陰をなぞるために若干俯き加減になっていた雄人の視界で、素早く動く影があった。

木から木へと飛び移るように移動した影の正体確かめるために雄人は顔を上げる。強い日差しに目を細めた雄人の視線の先を、赤い何かが素早く横切る。バサバサという羽音を発するそれは近くの木の枝にとまった。

雄人が枝にとまった影の正体に視線を向ける。それは真つ赤な鳥だった。鮮やかな色の羽毛を持ったその鳥は、樹下から自分を見上げる雄人に気づく様子もなくのんびりと木陰の涼みを享受している。そして、軽い鳴き声を上げると何処ともなく飛び去った。

初めて見る真つ赤な鳥に、雄人は嘆息を漏らした。見ると、他にも色鮮やかな鳥たちが並木で羽を休めている。内地では決して見ることの無い鳥の姿は気温の高さと共に雄人にここが赤道直下であることを再認識させた。

「（氷川丸にも、見せてあげたいな——）」

ごく自然に、雄人はそう思っていた。この綺麗な鳥たちを彼女に見せてあげたい。見せたなら、彼女は何と言っただろうか。きっと彼女も初めて見るはずだ、驚くに違いない——。

そんな事を考えながら、雄人は来た道を戻る。海岸沿いの道に戻って来た雄人は棧橋の所で足を止めた。キラキラと日の光に煌めく海上には、純白を輝かせる彼女の姿がある。珊瑚礁を挟んだ先には第四艦隊旗艦「鹿島」の姿もある。マストに軍艦旗と中将旗を靡かせ、「鹿島」はその身を佇ませる。濃灰色に塗られた艦体は「氷川丸」とは対照的に鈍い輝きを放っていた。

戦闘に携わる艦と、そこで傷ついた者たちを癒す船……どちらが優れているかではない、どちらも欠くことのできない存在——。身を置く場所こそは違えど、想いは同じ。それぞれの戦場で、務めを果たす——。

自分は他人を傷つけることが嫌いだった。だから、海軍に入ることになった時も看護科を選んだ。実際に戦場で危険に身を曝す彼らの苦労は自分には想像もつかない。だが、それでもできる事はある。戦いで傷ついた彼らの苦しみを癒すこと、それが自分のできる事であり、使命——。その務めを、しっかりと果たさなければならぬ。

改めて決意を胸に刻んだ雄人は再び道を歩きだした。今度行くのは初めて行った方向とは反対、棧橋が上がってから右へ進む道だ。海岸沿いに並ぶ椰子の木と白い砂浜という、絵に描いたような南国の光景を楽しみながら雄人は歩を進める。この道でも、さっき見た鳥たちが道沿いの木々とまっている。少し歩くと、雑貨屋が立ち

並ぶ通りに差し掛かった。道の左右に内地人が経営する土産物屋が軒を連ねている。雄人はその内の一軒に入った。

こぢんまりとした店の中には、様々な商品が並べられている。島民の生活に必要な日用品や軍人向けの土産物など、売り物の種類は幅広い。今のところ日用品に不自由はしていないので、雄人はお土産探しに専念した。といっても、小さな雑貨屋である。置いてある商品の数は少ない。めばしい品を見つけられなかった雄人は次の店に移った。

難しい顔をして雄人は店先の商品を眺める。その口から少し困ったような声が漏れる。

「女の子へのお土産って、どんな物にすれば良いんだろう・・・」

はあ、と溜息が一つ、雄人の口からこぼれる。

雄人は棚に並ぶ民芸品のアクセサリを一つ手に取った。そして、船で自分の帰りを待っている彼女の姿にそれを重ねる。

「（これは、違うかな）」

手に取った品を棚に戻す。その動作を何度か繰り返して、店を幾つか梯子したところで雄人はその品を見つけた。

「これは・・・」

雄人は見つけた品を手に取る。手の平にのるそれは、ブローチだった。そのブローチは雄人の目に覚えのある形——真っ赤な鳥の姿をしていた。

「それはトラック雀のブローチですよ」

店の奥から出てきた、店主と思わしき中年の男が言う。

「トラック雀？」

「はい。ちゃんとした名前は別にあるみたいですが、この島にいる派手な色をした鳥はみんなトラック雀って呼ばれています。この島の名物みたいなものですね。兵隊さんもここに来るまでに見たでしょう？」

「はい。綺麗な鳥でした。あれほど色鮮やかな鳥は、内地では見られません」

「そうでしょうね」

店主は小さく笑った。

「お土産ですか？お安くしますよ」

「本当ですか？」

「ええ」

表示価格の一割引で雄人はそのブローチを購入した。それを小さな包みに入れてもらう。

「ありがとうございました」

店主の声を背中に受け、雄人は店を出た。日はまだ高い。雄人は島を散策することにした。

そして、その日の夕刻。島と沖の「氷川丸」を結ぶ定期便で雄人は船に戻った。お土産を携えた雄人が一等客室へ向かおうとすると、背後からこの半月ですっかり聞き慣れた声が聞こえた。

「お帰りなさい、雄人さん」

「氷川丸」

「上陸、楽しめましたか？」

「うん。でも、暑いから疲れたよ」

服の襟を摘んで風を送る動作をしながら雄人が言う。西に傾いた日を見送りながら氷川丸も同意する。

「そうですね。あるぜんちな丸も、かなり参ってる様子でした」

「・・・あるぜんちな丸？」

「はい。ほら、あそこに泊まっている船ですよ。彼女も私のように海軍に徴用されて、輸送船として働いているそうです。同じ客船同士、ちよっとお話をしました」

「氷川丸」から少し距離を置いた所に錨を下ろしている船を指して氷川丸が言う。そこには「氷川丸」と同じ客船の姿をした船がいた。軍艦とは違うシルエットを描き出すその船の名は、「あるぜんちな丸」。元は大阪商船の南米東岸航路用の豪華客船である。

総トン数一万二七五五トン、全長一六七・三メートル、全幅二一・六メートル、吃水八・六メートル。二基のディーゼルエンジンは一万六五〇〇馬力の出力を発揮し、二ノットの最高速力を生み出す。船体は「氷川丸」より少し大きく、速力も「氷川丸」の一八ノットと比べて三ノット速い。

「あるぜんちな丸」は日本政府の「優秀船建造助成施設」によって建造された船であり、政府が建造にあたり補助金の交付や便宜を図る代わりに有事の際には空母への改装が行える設計で建造されていた。実際に、彼女は後に空母への改造を受け、航空母艦「海鷹^{かいよう}」として生まれ変わる事になる。

「凄いなあ。初めて見たよ」

「私だつて負けてません」

ライバル会社の船が褒められているからか、氷川丸が若干むきになったような口調で言う。頬を少し膨らませる氷川丸の頭に、雄人は手を置く。

「分かつてる。『氷川丸』も良い船だと思うよ。いや、僕は『氷川丸』の方が好きだ」

「あ、ありがとうございます……ます……」

膨らませた頬はいつの間にか元に戻り、今度は薄い朱に染まっている。顔を俯けた氷川丸は、頬の赤みを隠してくれている夕日に心の中で感謝した。

「それで、あるぜんちな丸とはどんな話を話したの？」

「えっ・・・と、主に客船時代の事ですね。お互いの航路での思
い出話をしました」

「へえ・・・。例えば？」

「そうですね・・・。私なら、喜劇王チャップリンが乗船した時
の話ですね。あるぜんちな丸の場合は、ヘレン・ケラー乗船の時の
話などを」

「チャップリンにヘレン・ケラーって・・・二人とも、有名人じ
やないか。そんな人たちを乗せるなんて、氷川丸もあるぜんちな丸
も凄いね」

「えへへ・・・」

雄人に褒められ、氷川丸は照れたようにはにかんだ笑みを見せた。

「さて、私の話はこの辺りにしておいて。雄人さんの上陸話も聞
かせて下さい。期待して待っていたんですから」

「分かったよ」

待ち切れないといった様子の氷川丸に苦笑して、雄人は陸での事
を話しだした。その話を、氷川丸は興味深そうに聞いている。

「へえ、ここにはそんなに綺麗な鳥がいるんですか・・・。一度
でいいから見てみたいです」

雄人の予想通り、氷川丸はトラック雀の話に興味を持ったようだった。そんな氷川丸に雄人はポケットから取り出した包みを渡す。

「はい。氷川丸にお土産」

「・・・私にですか？」

「うん」

「ありがとうございます。・・・今、開けてもいいですか？」

「もちろん」

「では。・・・わあ——」

包みを開けた氷川丸が息を零す。小さな包みには、鳥の形をした赤いブローチが入っていた。入り日影に翳しながらそれを眺める氷川丸の表情はとても嬉しそうだ。

「これ、雄人さんが言っていた——」

「そう。トラック雀。そのブローチだよ」

氷川丸の言葉を引き継ぐ形で雄人が答える。

「素敵なお土産、ありがとうございます、雄人さんっ！」

満面の笑みを見せて氷川丸は言った。そして、早速貰ったブローチを服の胸につける。

「どうでしょう・・・似合ってますか？」

「うん。似合ってるよ」

雄人が言くと氷川丸は嬉しそうに笑った。嬉々としてブローチを弄る氷川丸の姿を見ると、苦勞して選んだ甲斐がある。普段は落ち着いていて大人っぽく見える氷川丸も、今は年相応の少女の顔をしていた。夕日は既にその身を半分ほど海に沈め、夕闇はいよいよ濃くなってきている。「飯だ、飯だ」という兵たちの声が聞こえる。時間を見ると、もう夕食の時間だった。氷川丸と一旦別れ、雄人は三等ラウンジを改装した下士官・兵用の食堂に向かった。

食堂に入ると、食欲をそそる美味しそうな香りが鼻孔をくすぐった。今日は金曜日。金曜日といえばカレーである。先に席についている兵たちの話声に混じってスプーンを動かす音が聞こえる。雄人も席につきカレーを食べ始めた。

余談だが、「氷川丸」の料理は、二つのグループが分かれて作っている。一つは、「氷川丸」固有の司厨員。彼らは「氷川丸」固有の乗組員と海軍側の士官の食事を担当する。もう一つは海軍の司厨員で、こちらは患者と海軍側の下士官・兵の食事の担当だ。従って、雄人は海軍の司厨員が作ったカレーを食べていることになる。

別に、主計科の作るカレーに文句があるわけではない。彼らの作るカレーも美味しい。けれど、料理に定評のある日本郵船スタッフが作るカレーを一度は食べてみたいと、スプーンを動かす雄人は密かに思うのだった。

食事を終えた雄人はプロムナードデッキに上がった。食事の後はこうして風に当たるのが雄人の日課である。そして、この時間は食

後の休憩であると同時に、別の時間でもある――。

「雄人さん」

星を眺めていた雄人はかけられた声に振り向いた。

「お食事、楽しめましたか？」

「うん。仲間たちとも話したしね」

待ち人である彼女――氷川丸の問いに雄人は答える。

「やっぱり、金曜日の楽しみはカレーだね」

と、雄人は氷川丸の頬に付いている物に気がついた。

「・・・氷川丸も、美味しく頂いたみたいだね」

「――っ!？」

雄人の微笑に気づいた氷川丸が慌てて手鏡を出す。そして、自分の頬に付いたカレーのルーを確認し、かああっ、と頬を赤らめた。

「あ、あのっ、これは・・・」

ハンカチで頬を拭いた氷川丸は手をあたふたと振りながら言う。

「あまりにも美味しそうだったので、つい・・・。それに、鍋の中にまだ沢山残っていたので捨ててしまうのは勿体無いなあ、と思っ
て・・・」

「責めてるわけじゃないよ」

必死に弁解する氷川丸に雄人は笑いながら言う。

「それより、見つからずに食べる方が難しくなかった?」

「はい……。まだ厨房の方々も片づけの途中でしたから、隙を探して見つからないようにこっそりと盛りつけて、一気に部屋まで瞬間移動して食べました。食器を戻す時も、見つからないようにするのが大変でした……」

「普通の人が見たら、カレーの皿が宙に浮かんでいるように見えるからね。見つかったら幽霊騒ぎになるよ」

「雄人さんが司厨員だったら堂々と分けてもらえたんですけどね」

「今から僕を転職させる気?」

「冗談ですよ」

「そうである事を願うよ。僕はそんなに料理は得意じゃないんだから」

「そうなんですか?それなら、今のは冗談じゃないことにします」

「そんなあ。勘弁してよ」

「ふふふっ」

困り果てたような声を出す雄人を見て氷川丸が笑う。途方に暮れた声を出す雄人も口元は笑っている。二人はそんな他愛も無いやり取りを繰り返して時を過ごした。

「・・・・・・・・何だろう？」

ふと、雄人が何かに気づく。どこからか兵たちのざわめき声が聞こえる。どうやら、後部デッキから聞こえてくるようだった。

「ちよつと見てきますね」

そう言つて氷川丸が小走りで後部デッキに向かう。そして、弾んだ声を発しながら戻つて来た。

「雄人さん！後部デッキで映画を上映するみたいですよ。見に行きませんか？」

言いつつ、氷川丸の手はもう雄人の手をしっかりと握っている。その素早さに苦笑しつつ、雄人は頷いた。

「うん、良いよ」

スクリーンを張つただけの即席の映画館には結構な人数の観客がいる。兵だけでなく、動ける患者も見に来ているようだった。その人混みの後ろから背伸びをするようにして、雄人と氷川丸が顔を覗かせる。

映写機の準備が終わり、いよいよ上映が始まる。カラカラと回るフィルムが映し出す映像に合わせて皆の歓声上がる。フィルムは皆が知っているような有名作品だ。勧善懲悪の王道パターンで幕を

閉じたフィルムに観客たちから拍手喝采が湧き上がった。その間に次のフィルムが映写機にセットされる。

二本目の上映が始まる。今夜は、賑やかな夜になりそうだ。

<第七話>乗員たちの羽休め(後書き)

青葉「毎度お馴染み後書きコーナー！始まり始まりー」

氷川丸「~~~~」

青葉「氷川丸、随分とご機嫌だね」

氷川丸「(ブローチを弄りながら)まあね」

青葉「(日高一曹にお土産貰ったの、よっぽど嬉しいんだなあ……)」

氷川丸「ところで作者さんは？」

青葉「さあ？またどこかで『orz』なんてやってるんじゃない……」

作者「俺、参上ー!!」

氷川丸&青葉「「っ!」?」

作者「ふう、何とか間に合った……って、あれ？二人とも、どうしたの？」

氷川丸「いきなり現れないで下さい！青葉じゃあるまいし、びつくりしたじゃないですかっ！」

青葉「私って氷川丸にそんな風に思われてるのかぁ」

氷川丸「最初に会った時も夕張に激突してたし、この間だって私を後ろから海に落としたじゃない」

青葉「ははは。そういえばそうだったね」

氷川丸「笑い事じゃないわよ……。その激突癖、どうにかならないの？」

青葉「癖、っていう程のものじゃないと思うけどな……。……ん、何やら美味しそうな匂いが……。作者、何か持って来た？」

作者「うん。海軍カレーパンを人数分。はい、どうぞ」

青葉「おおっ。サンキュー」

氷川丸「ありがとうございます。どうしたんですか？これ」

作者「お土産。ヨコスカサマーフェスタに行ってきたんだ。因みに、

ヨコスカ（以下略）というのは、海上自衛隊と米海軍の基地が同時公開され、夜は花火大会が催されるという横須賀市の一大イベントです。今年は8月7日に開催されました」

青葉「ほーらのほー（訳・そーなのかー）」

氷川丸「食べたまま喋らないの。それで、具体的にはどんな企画が行われたんですか？」

作者「主に艦艇公開だね。今回の目玉は護衛艦『きりしま』。並んで停泊していたアーレイ・バーク級共々、黒山の人だかりができていたよ」

青葉「（カレーパンを食べつつ）・・・『霧島』？」

作者「『霧島』じゃなくて『きりしま』。戦艦とは別物の護衛艦って艦種。かつての戦艦みたいに国防の要を担う存在だよ」

青葉「へえ、そーなのかー。（写真を見ながら）何だか高雄型みたいに大きい艦橋だねえ」

氷川丸「他には何があつたんですか？」

作者「ヘリコプターによる救難展示を数回やっていたよ。それと・・・気のせいだったのかな、『きりしま』を『みらい』って呼んでる人を見たような・・・」

氷川丸「『みらい』って、あのイージス艦が太平洋戦争にタイムスリップする漫画の『みらい』ですか？」

作者「多分、いや絶対それ」

氷川丸「『いそかぜ』とか呼ぶ人はいなかったんですか？」

作者「そっちはいなかったね」

青葉「ああ美味しかった。ごちそーさまー」

氷川丸「あつ、私のカレーパンが！青葉、食べたでしょ！」

青葉「だって氷川丸がなかなか食べないんだもん。冷めないうちに食べられた方がカレーパンも幸せかなーと思つてね」

氷川丸「返しなさい！」

青葉「だが断る！ていうか無理！」

（逃げる青葉、追う氷川丸）

作者「あー、二人とも行っちゃった……。仕方無い、一人でやるか。この作品を読んでくれている方々に心からの感謝を捧げます。ご意見・ご感想、お待ちしております」

氷川丸「待ちなさいっ！」

青葉「ああもう、しつこいな」

（その後、氷川丸が息切れるまで青葉は逃げ続ける羽目になったという・・・）

追記・今日、8月9日は長崎に原子爆弾が投下された日。投稿後に書きそびれた事に気づき、追記しました。この場を借り、原爆をはじめ、先の大戦で命を落とした方々に胸奥よりの追悼の意を表します。

<第八話>第一航空艦隊入港す

太平洋に、朝が訪れる。月と星だけが頼りの漆黒の世界は終わりを告げ、東の水平線が東雲色しのめいろに染められる。そこから燃えるように赤い日輪が姿を現し、世界に光をもたらす。

まだ朝靄に覆われた世界。視界はかなり悪い。その靄の中に、黒い影が浮かび上がった。一見、島と見間違っようなそれはしかし、島ではなかった。影は徐々にその大きさを増しながら、ゆつくりと動く。そして、地を揺るような重低音を響かせて正体を現した。

全身に鉄の臭いを纏う艦。波を砕く艦首には金色しんじきの菊花紋章が輝き、威厳を誇る。そこに聳える支柱が、広大な飛行甲板を保持する。左舷に建つ艦橋には旭日を模した軍艦旗がはためき、下方に湾曲した煙突からは排煙がもうもと靡いている。大日本帝国海軍航空母艦「赤城」——日本機動部隊の旗艦を務める大型空母だ。

その「赤城」の飛行甲板。その先端近くで、一人の少女が靄の向こうをじっと見つめていた。彼方を透かし見るように目を細めていた少女は、じれったそうに言った。

「ねえ、加賀。まだ着かないの？」

少女の周りには、目に見える限り、誰もいない。独り言のように放たれた言葉にはしかし、確かに返事が寄越された。

『長官、十分前も同じ質問してましたよ？今日中には着きますから、辛抱して下さい』

「だって早く休みたいんだもんっ。あたし、疲れたよ」

直接、頭の中に聞こえた返事に少女は泣き言を返す。会話の相手が漏らす嘆息が少女に聞こえた。

『はぁ……。こんな長官でよくまあ、あれだけの大仕事が無事終わりましたね』

「むう。あたしだって、やればできるんだよ」

『分かっています。とにかく、後少しの辛抱ですので、我慢して下さい』

「はい……」

元氣なく返事をして少女は会話を終えた。そして、一つ欠伸をすると光の中に姿を消した。

連合艦隊の一大拠点、トラック諸島。この日、トラックはいつも増して賑わっていた。その理由は、海の上にあった。紺碧の海に錨を下ろしているのは、目を見張るような大艦隊。戦艦、空母、巡洋艦……。海を圧する巨艦が、ここに集結していた。

今日トラックに入港してきたこの艦隊の名は、第一航空艦隊。航空母艦「赤城」を旗艦とする機動部隊であり、真珠湾奇襲攻撃の立役者。日本にとっては虎の子よりも大事な存在だ。

一航艦（注・第一航空艦隊の略称）が入港すると各艦の舷側では兵たちが帽子を振って艦隊を迎え、歓声を浴びせた。今まで軽巡洋艦や駆逐艦しかいなかったトラックの泊地は、急に賑やかになった。

「これは・・・壮観だね・・・」

圧倒された様子で雄人が言う。隣の氷川丸も感嘆の息を漏らしている。正に、息を飲む状態だ。

「『赤城』に『加賀』に『翔鶴』か・・・。おっ、あつちには『霧島』もいるぞ！」

同じようにデッキに上がっている兵の一人が興奮した様子で艦の名前を並べている。彼の指を追って雄人も視線を動かす。背が高く、平たいシルエットの空母に、城のような檣楼を備える戦艦。どちらかというと言艦の方が格好良いな、などと思っていると、「あつ」と氷川丸が声を漏らした。

「どうしたの？氷川丸」

怪訝な顔をして聞く雄人。氷川丸がそれに答える前に、二人の後ろから声が聞こえた。

「やはりお主であつたか、氷川丸」

「比叡さん！」

名前を呼ばれた氷川丸は振り返ると、そこに立っていた妙齡の女

性を見つけて声を上げた。比叡と呼ばれた女性は、優しいな笑みを浮かべて言った。

「久しぶりだな、氷川丸。達者でおったか？」

「はい。ご無沙汰してます。比叡さんも、お元気そうで何よりです」

何年かぶりに会った同級生のように親しく会話する二人。会話の流れに完全に置いていかれた雄人は小声で氷川丸に聞いた。

「ねえ、氷川丸。あの人は……………」

「あ、すみません。雄人さんはまだ会った事がありませんでしたね」

氷川丸は雄人と女性の間に入り、彼女を雄人に紹介した。

「こちらは比叡さん。戦艦『比叡』の艦魂です」

「せ、戦艦『比叡』っ!？」

氷川丸の紹介に雄人が驚きの声を上げる。確かに、目の前に立っている女性は若さの中にただ者ではない威厳を潜ませている。だが、それがよりにもよって帝国海軍最古参戦艦の一隻である「比叡」の艦魂だとは思ってもよらなかったのである。

「ほう。この者は私が見えるのか」

比叡が僅かに眉を上げる。

「少年……いや、青年と言ふべきかな。我が名は比叡。金剛型戦艦二番艦、戦艦『比叡』の艦魂だ。宜しく頼む」

「日高雄人一等看護兵曹です。こちらこそ、宜しくお願いします」

「ふつ、そう固くなるな。楽にしろ」

緊張した様子で敬礼する雄人に比叡が言う。手を下ろした雄人は、それでもまだ幾分固くなっている。

そんな雄人を見て微笑を浮かべた比叡は氷川丸に視線を向けた。

「それにしても……お主も随分と派手に化粧直しをしたものだ。一目見ただけではお主であると分からなかったぞ」

「あはは……。確かに、そうですね」

真っ白に塗られた船体を眺め回しながら言う比叡に氷川丸は苦笑する。

「服も、看護婦らしくなったな」

「今の私は、病院船ですから」

「そうだな。似合っているぞ」

「……ねえ、氷川丸」

親しげに会話をしている二人の間に、おずおずと雄人が入り込む。

「何ですか？雄人さん」

「氷川丸と比叡さんって、いつ知り合ったの？」

氷川丸は人差し指を顎にあて、考える仕草をする。その間に、比叡が答えを返した。

「確か・・・昭和八年の大演習観艦式の時だったな。合っているか、氷川丸」

「あつ、はい。その時です」

比叡の確認の問いに氷川丸が頷く。

二人が言っているのは、昭和八年八月二五日に行われた大演習観艦式の事である。「長門」「陸奥」をはじめ、総勢一六〇隻もの艦艇と二〇〇機もの航空機が横浜沖に集結した。この時の観艦式で御召艦に選ばれたのが、当時練習戦艦となっていた「比叡」である。そして、「氷川丸」は招待客一〇一五人を乗せ、御召艦「比叡」の後に従い、居並ぶ艦艇の間を巡航したのだ。

「あの時の氷川丸は、これ以上無い程に緊張していたな。セメントで固めたように固くなっておったぞ」

「ひ、比叡さんっ。その時の事は話さないで下さい！」

過去を振り返る比叡は思い出し笑いを堪えながら話す。氷川丸の制止も空しく、比叡の回想は続く。

「観艦式が始まる直前には、顔を真っ青にしていたな。私が宥めてようやく落ち着いたのだ」

「へえ、そうだったんですか」

「~~~~~っっ!」

勝手に話を進める比叡を止める術を氷川丸は持ち合わせていなかった。こうして氷川丸がわなわなと口を震わす間にも、比叡は立て板に水を流す勢いで話を続ける。

「緊張してカチカチに固まるなんて、氷川丸にも可愛いところがあるんだね」

茶化すような声を出す雄人を、氷川丸はきつと睨みつける。

「考えてもみて下さいよ、雄人さん。東京湾を埋め尽くさんばかりに、大小様々の艦艇が勢揃いしているんですよ？その中を、しかも、天皇陛下が座乗されている御召艦の後に続いていくんですよ？緊張しないわけがないじゃないですか！失敗したらどうしようとか、色々心配になって泣きそうだったんですよ!？」

「わ、分かった分かった」

ず。ずい。ずい。

長い三つ編みが一文ごとに詰め寄る。そのたびに花の香のような甘い香りが漂うが、勢いに押される雄人にはそれを楽しむ余裕はない。本当に大変だったのか、氷川丸の瞳は微かに濡れている。

「で、でも、御召艦の後に続いて観艦式に参加するなんて滅多にできない事だよ。凄いよ」

その場を取り繕うように雄人が言うが、氷川丸の視線はまだ緩まない。

「そ、それに・・・氷川丸はその大役を見事に果たしたんだから、やっぱり凄いよ」

もう一押し言葉を添えて氷川丸の頭にぽんと手を置く。ようやく、氷川丸の表情が柔らかくなった。

内心、ほっとした雄人は早く観艦式の話から離れようと話題を変えた。

「あ、そういえば・・・ハワイ攻撃、お疲れ様でした」

「労いの言葉を貰う程の事はしておらぬ。何せ、我々は敵の姿さえ見ておらぬのだからな。やった事といえば、空母らと連^つんで海を流れただけだ」

「それでも、立派に空母護衛の務めを果たしたじゃないですか」

「与えられた任務は確実にこなすのが、軍人の責務だからな。だが・・・私は戦艦。やはり、己が砲で敵と手合わせしたいものだ」

力を入れた拳に視線を落とし、比叡が言う。

「きっとその内、機会が訪れますよ。でも、くれぐれも無茶はしないで下さいね」

氷川丸の心配に比叡は微笑で答えた。

「心得ておる。己を過信し、蛮勇を振るうは、それ則ち破滅に通ず。自ら死ににいく様な真似はせぬ。勇氣と無謀は、別物だからな」
だが、と付け加える。

「臆してばかりでは戦は出来ぬ。勇は存分に振るわせてもらうぞ」
そして、「一六インチ砲と撃ち合うのも一興だな」と続けた。

「それを無茶って言うんですよ！」

「ハ、ハ、冗談だ」

一四インチ、つまり三六センチの主砲しか持たない身でありながら一六インチ、つまり四〇センチ砲を持つ相手と撃ち合いたがる比叡に、氷川丸は呆れの混じった叫び声を上げた。

「まあ、如何に私が此処で望みを語ろうとも、全ては司令部の胸三寸だ。私には精々、奴らが艦隊決戦を企画してくれる事を祈るくらいしか出来ん」

諦念をこめた溜息を零しながら、比叡が言う。

「さて、そろそろ私は失礼するぞ。どうも、今日は眠くて敵わん」

大欠伸をかました比叡が転移の光に包まれる。目の縁に滴をのせた比叡の姿が淡光の中に消える直前、ちんにゅうしゃ闖入者が現れた。その人物は転移の光を放つ比叡の背後に現れると、正に転移直前の彼女の不意

を打つように、その背中に盛大に突進した。

どんがらがっしゃーんっ！

派手な音と砂埃を生み出して二つの人影はデッキの上に倒れ込む。倒れ込むが早いか、上に乗っかる人物が半身を上げた。

「やつりいー！大成 功っ！まったく、氷川丸は鈍くさいんだから」

してやつたりといった顔で得意気に言うのは青葉だった。自分の下でデッキに突っ伏している人物を見てニヒヒ、と悪戯っぽく笑っている。

突然現れた青葉の台詞の一部に疑問を感じながら、氷川丸は口を開く。

「……………青葉、何してるの…………？」

「何って、決まってるでしょ。鈍くさい氷川丸に体当たりを——
——って、あれ？」

答える途中で、異変に気づいた青葉が顔を上げる。自分が下敷きになっているはずの氷川丸の声が上から聞こえる。顔を上げた先には、呆れ顔の氷川丸がいた。

「あれ、氷川丸？」

ぽかんと口を開いた青葉が間抜け面を晒す。

「どうして、そこに？私が体当たりで押し倒したはずじゃ……」

「……何言ってるのか、さっぱりなんだけど……。とにかく、私はさっきからここに立ってるし、貴女に体当たりされた覚えも無いわよ」

「ほえ？それじゃあ、これは——」

視線を落としていった青葉が、硬直する。一瞬にして顔から血の気が失せて、真っ青に染まる。ひきつった笑顔が頬に貼り付き、凍らせたように剥がれなくなった。理由は、簡単——自身が下敷きにしていた人物が誰なのか、認識したからだ。

「ひつ……！！」

掠れた短い悲鳴を上げて青葉が下敷きにしていた人物から飛び退さる。それを合図にしたかのように、倒れていた人物がゆっくりと起き上がる。

「不意打ちとは、良い度胸だな……」

比叡の右手が、左腰の軍刀に伸びる。音も無く抜かれた白刃が、陽光を妖しげに反射する。

「そこに直れ！成敗してくれるッ！」

言うが早いか、比叡の放った一閃が白銀の線を空中に描いた。すんでのところでそれを避けた青葉は脱兎の如く逃げ出した。

「逃がさんっ！」

疾風のような速度で比叡がそれを追う。暫くの間、「氷川丸」を舞台にした命懸けの鬼ごっこが行われた。

「はあ、はあ……。もう……。無理。走……。れ……。ない……。はあ、はあ……。」

見つかる＝斬撃という危険極まりない鬼ごっこをどうにか生き延びた青葉は、デッキの上にへたり込み、壁に背を預けていた。一言喋るたびに、華奢な肩が大きく波打つ。

「自業自得ね」

反省しなさい、と氷川丸が青葉を窺める。しかし、言葉とは裏腹に彼女の手は持っているラムネを青葉に手渡す。

「……。……。ありが、と」

青葉がラムネを口に運ぶ。栓は元から開けられていた。

「ぶはあ……。生きてるって、素晴らしいね」

悟りを開いたような物言いをする青葉。その身体には数力所、打撲傷がある。

「峰打ちだから安心しろ、って……。峰打ちでもかなり痛いんだけど……。」

青い痣になった傷跡をさすりながら、青葉は小さく顔をしかめた。

「あの人、本当に容赦ないんだからなあ・・・」

「これに懲りたら、次からは普通に出てくることね」

胸を反らして上から目線で言う氷川丸。「むう・・・」と青葉は口を尖らせた。

「お姉ちゃんお姉ちゃん！」

その時、眩い光が辺りを包み、一人の少女が現れた。その少女は青葉の袖を掴むと慌てた様子で言った。

「お姉ちゃん！赤城司令が作戦会議をやるから早く来て、だって！」

かなり慌てた様子の少女の言葉に、青葉は明らかに面倒そうな顔をする。

「ええゝ。めんどくさいなあゝ。衣笠、代わりやつてくんない？」

「駄目だよつ。第六戦隊の旗艦はお姉ちゃんなんだから、お姉ちゃんが行かないと！」

青葉の無責任な頼みに、衣笠と呼ばれた少女は反論する。そして、「早く早く！」と青葉を急かす。

「はあ・・・。仕方ないなあ」

青葉がかつたるそうに立ち上がる。そして、ほんの僅かな希望を見出すような眼差しを氷川丸に向ける。

「ねえ、氷川丸。会議・・・・・・・・」

「ダメ」

「うぐう・・・・」

がつくりとうなだれた青葉は頭一つ分小さい少女に手を引かれ、転移の光の中に消えた。転移の間際、少女は「失礼します」と二人に丁寧な御辞儀をした。

それを見送ってから、氷川丸は「はあ・・・・」と溜息をついた。

「あれじゃ、どっちが姉だか分からないじゃない・・・・。そう思いませんか、雄人さん」

「確かにね」

氷川丸に同意を求められた雄人は、苦笑しながら答えた。

「まあ、あの姉妹はあれで上手くやってるみたいだから、あれで良いんじゃないかな」

「・・・・そういうものでしょうか？」

「そういうものだと思うよ」

「うーん・・・」

氷川丸は納得がいかない様子だったが、「雄人さんがそう言うなら、きっとそうなんでしょうね」と言った。

「さ、私たちも患者さんたちの手当を頑張りましょう。ずばらな青葉も会議に出ているんですから。私たちが怠けてはいられません」

「『ずばら』って・・・」

「事実ですから。さあ、雄人さん。今日も頑張りましょう」

氷川丸の先導で二人は船内に入って行った。

<第八話>第一航空艦隊入港す（後書き）

青葉「酷い目に遭った……。やつぱり、比叡あの人怖いよ。よく氷川丸はフツーに接してられるね」

氷川丸「青葉が不意打ち紛いの事するからでしょ。比叡さんは優しい人よ」

青葉「会う機会が少ないからそう言えるんだよ。試しに氷川丸も海軍に入って毎日一緒に過ごしてみなよ。あの人の恐ろしさが分かるから。それはもう般若か生剥げのように……………」

比叡「誰が生剥げだ？」

青葉「ぎゃあっ！！出た、鬼！」

氷川丸「あ、比叡さん」

比叡「上官に向かって鬼とは、中々度胸のある口の聞き方だな」

青葉「ごめんなさいごめんなさい！！」

比叡「謝って済むなら警察も憲兵も要らぬわ！そのなつとらん口の聞き方を再教育してくれる！」

青葉「ひいひいっ！」

氷川丸「まあまあ比叡さん。落ち着いて下さい。青葉も悪気があるわけじゃないですから」

青葉「氷川丸……………（涙）」

氷川丸「それに、この後書き空間は私の船内ですから。絨毯やソファーに血が付くと交換が大変なので、流血沙汰はなるべく御遠慮下さい（注・後書きは『氷川丸』の船内、一等社交室で行われているという設定です）」

比叡「む、それは済まぬ。私とした事が、配慮が足りなんだ……。確かに、この部屋の調度品はどれも高価な物のようだな。水兵らの寝起きする吊り床とは比べ物にならぬ。これを汚すのはまずいな」

氷川丸「御協力、ありがとうございます」

青葉「なんだ、氷川丸は私のことを庇ってくれたわけじゃないん

だ………（泣）」

比叡「さて、ではそろそろ締めるか。氷川丸、頼む」

氷川丸「はい。この作品を読んでくれている読者の皆さんに心からの感謝を。ご意見・ご感想、お待ちしております」

登場人物紹介

比叡^{ひえい}

金剛型戦艦二番艦

身長：173cm

外見：21歳

姉妹艦：金剛、榛名、霧島

金剛型戦艦の二番艦。戦艦なのに山の名前を艦名としているのは、建造当初は巡洋戦艦であつたから。帝国海軍の中でも最古参の部類に入り、戦艦の中では姉の金剛に続く古参である。外見は二十代前半で、艶やかな長い黒髪を持つ麗人。厳格な性格で、軍規を固く守り、これを乱す者には罰を以て接する。そのため、多くの艦魂（特に駆逐艦などの小艦艇）から恐れられている。青葉の天敵。

<第九話>戦争という名の現実（リアル）

機動部隊の大艦隊がやってきてから一日。南国の陽気あふれるトラックは、ようやく帝国海軍の重要拠点としての様相を呈し始めていた。

これまで巡洋艦以下の艦艇だけしかいなかった泊地に、その何倍もの大きさの戦艦や空母が錨を投げて停泊している。巡洋艦も立派な軍艦ではあるが、やはり戦艦には敵わない。巨大な城郭のように聳える戦艦を前にすると、巡洋艦が駆逐艦のように小さく見えた。

真珠湾攻撃を成功させた機動部隊は一旦、柱島に戻り、補給と整備を行った。そして、続く南洋諸島攻略のために再び出撃し、ここトラックへやって来た。

機動部隊の軍艦たちは、来るべき出撃に備えて粛々と準備を進めている。ホースを伝って油槽船が各艦に燃料を補給し、他の船からも種々の物資の補給が行われている。

「氷川丸」も医薬品の補給を行える態勢でいたが、まだ戦闘の前であるため、各艦共に医薬品の欠乏は無かった。仕事が無いのは寂しいが、そうした状態はすなわち、艦の将兵たちが健康である事の証だ。

「皆さん、無事に帰って来てほしいですね」

補給の様子を眺めながら、氷川丸が言った。

「大丈夫だよ。皆、百戦錬磨の強者たちだから」

一緒にその光景を眺めていた雄人が言う。氷川丸は「それもそうですね」と答えると舷側の手摺から手を離して伸びをした。

「んっ………。風が涼しくて、気持ち良いですね」

「そうだね。今日は比較的過ごしやすい気温だ」

「これなら患者さんたちも幾らか楽ですね」

「うん。いくら冷房をかけているとはいえ、熱帯の気温の高さは堪えるからね」

赤道直下の熱帯地方は、年間を通して気温が高い常夏場所である。それに加えて湿度も高い。病床の患者たちには辛い環境である。元が客船である「氷川丸」は空調設備が完備されているが、それでも限界はある。患者の中には人口密度の高い病室よりも、風通りの良いデッキの上を好む者もいた。

やがて仕事開始のラッパが鳴り、雄人は今日一日の仕事に取りかった。

病院船に收容されている患者は、一時的に戦闘任務から外された存在である。しかし、重傷者を除き、療養中も彼らは規則正しい生活をする事になっている。

そのため、朝になると看護兵たちが患者を起こしに行くのだが、流石は軍人といった所か。殆どの場合、起こしに行った時には既に

彼らの大半は起床しているのだった。

起床の次は、朝食だ。厨房で作られた食事を、各病室に運んでいく。食事はそれぞれの病室で食器によそう。この時、動ける患者が配膳を手伝ってくれる。その理由が、看護兵の労を軽くしようとする配慮なのか、早く飯にありつきたい食欲によるものなのかは分からない。どちらにしてみても、看護兵たちにとっては助かる行為だった。

午前の仕事を終えた雄人は食堂で昼食を食べていた。部屋に置かれたラジオから独特の調子のアナウンサーの声が流れている。

その声をBGMにしながら兵たちは箸を動かしている。雄人も慣れた手つきで箸を操り、肉じゃがを口に運ぶ。ラジオから流れてくるのは国内外のニュース。といっても、時局柄、外国の情報が入ってくることは殆ど無く、国内のニュースも戦争に関わることが殆どだった。ラジオが知らせるのは快進撃を続ける日本軍の様子。勝利の報せがもたらされる度に、食堂に歓声が湧いた。

その時、ラジオが次のニュースを流した。

『昨日、東シナ海において陸軍病院船「ハルピン丸」沈没す。敵潜水艦の魚雷攻撃を受けたものと思われる』

瞬間、室内の時が止まった。音が消え、色も消えたようだった。誰もが自分の聞いた二つの単語を反芻した。「病院船」「沈没」――。背筋に悪寒が走った。

だが、ラジオは何事も無かったように次のニュースを伝え、そして音楽を流しだした。ドイツ・イタリアと三国同盟を締結し、連合国と敵対するようになってからラジオでアメリカやイギリスの音楽を聞くことは無くなった。耳にするのはドイツとイタリア、そして日本の音楽だけだ。

ベートーベンの交響曲第五番の演奏が部屋の静寂を破った。夢から醒めた子供のように食堂にいる者たちは呆然とした顔で互いを見合った。

「なあ、さっきのニュース・・・聞いたか？」

一人が聞き、もう一人が青ざめた顔で頷いた。

「病院船は、ジュネーブ条約で守られているんじゃないのか？」

「だが、武器の輸送などに使われれば条約の保護から外れる。その時は攻撃されても文句は言えない」

「陸軍の病院船は武器を運んでいたというのか？我が国の船がそんな事をするはずない」

「ああ。俺もそう思う」

「なら、どうして『ハルピン丸』は沈められたんだ」

「敵が条約を無視して攻撃したんじゃないのか？」

「糞ッ！鬼畜米英め！！」

「待て、まだそうと決まった訳じゃない。輸送船と誤認されたのかも知れないぞ」

其処此処で聞こえる話し声の中、雄人だけは堅く口を閉ざしていた。

「（病院船が、沈没——）」

周囲の声の中にもあるように、病院船の中立と安全はジュネーブ条約によって保証されている。だが、現実の戦闘では100%それが守られるとは言い切れない。誤って攻撃を受ける事もあるだろうし、病院船と分かって攻撃を受ける可能性も考えられる。

だが、過程はこの際、関係無かった。雄人の心では『沈没』の二文字が渦巻いていた。

病院船なら、安全だ——今までの自分は、どこか楽観的に考えていた。しかし、今、ラジオが伝えたニュースはその思考を完全に吹き飛ばした。

病院船でも、攻撃を受ける。そして、沈没する可能性すらある——それは、分かっていながら今まで心のどこかで意識的に見ていなかった現実だった。そして、その現実を認識した途端、雄人は慄然とした。瞬時に導き出された最悪の予想が、彼を恐怖の底へと突き落としたのだった。

もし、この船が敵の攻撃を受けたら、どうなるか——いくら一万トンを超える排水量を持つ「氷川丸」といえど、被害は大きいだろう。最悪、沈没もあり得る。その場合、彼女はどのようなのだろう

か・・・？

艦魂とは、その船そのものである。本体である船が傷つけば、それはそのまま、艦魂にも適用される。魚雷で船腹を破壊されれば腹を抉られ、砲弾が甲板を穿てば背を裂かれる。そして、沈没すれば・
・死ぬ。

雄人は潜水艦の雷撃を受け、水柱を立たせる「氷川丸」の姿を想像した。轟音と共に揺れる船体。火災が起こり、船は次第に傾いていく。総員離船が言い渡され、患者が急いで甲板に上げられる。重傷者を優先して乗せた救命艇が次々に海へと降ろされていく。船内を回って残された患者がいない事を確認した雄人は甲板に続く通路を急いだ。恐らく、自分が最後の一人だろう。救命艇がまだ残っていると良いが・・・。

だが・・・その時、雄人は見た。火炎の中に倒れる少女の姿を――。

炎に吞まれ、息も絶え絶えに助けを求める少女の身体は真っ赤に染まっていた。血の海に倒れ、炎に捲かれる少女。その痛ましい姿に雄人は言葉を失い、立ち尽くした。そして、再び爆発が起こり、少女は――

「おい、雄人ッ!!」

肩を揺すられる感覚に雄人は我に返った。怪訝な表情の仲間が、心配そうに聞いてきた。

「大丈夫か？顔色悪いぞ」

「あ、うん……。大丈夫」

雄人は残った肉じゃがを流し込むと席を立った。

「一応、診てもらった方が良いんじゃないか？疲れが溜まってるのかもしれないぞ」

「平気だよ」

無理矢理に作った笑顔で答えた雄人は、そのまま逃げるように食堂を出た。

廊下を歩く雄人の頭の中では、さっきの光景が何度もフラッシュバックされていた。どんなに必死に忘れようとしても、最悪の想像が頭から離れない。

闇雲に船内を歩く雄人はやがて、デッキの上に辿り着いた。潮風が沖から涼しい空気を運んでくれている。

手摺に掴まり、海を見下ろした雄人は溜息をついた。暗い心とは対照的に、海は明るく煌めいている。

その差を感じて、再び溜息をつきそうになった時、背中から声が聞こえた。

「溜息ばかりついていると、幸せが逃げちゃいますよ」

振り返ると、そこには悪戯っぽい笑みを浮かべた氷川丸が立っていた。

「どうしたんですか？ 雄人さん。そんなに暗い顔して」

言いながら、氷川丸は雄人に近づく。肩から下がった三つ編みが、ひよこひよここと揺れる。

「昼間から暗い顔されたら、こっちまで沈んだ気持ちになっちゃいますよ？」

「・・・・・・・・」

「・・・雄人さん？」

異変に気づいた氷川丸が雄人の顔を覗き込む。その瞬間、氷川丸の身体が強く引つ張られた。

「なっ・・・・・・・・」

一瞬の内に起こった出来事に氷川丸は混乱する。遅れて、自分が雄人に抱き締められているのだと気づいた。

「雄人・・・さん・・・？ 一体、どうし——」

「恐いんだ」

氷川丸の言葉を遮るようにして雄人が言う。雄人はラジオのニュースの話と、その瞬間に脳裏をよぎった最悪の想像について話した。

「そうだったんですか・・・」

話を聞き終えた氷川丸は一言、そう言った。

「僕は恐い・・・。氷川丸が傷つく事が」

雄人の声は、震えていた。

氷川丸は暫く無言でいたが、やがて優しい声で言った。

「雄人さん」

俯かせていた顔を上げ、雄人は氷川丸を見た。

「雄人さんが私の事を心配してくれて、嬉しいです。・・・でも、そんなに考え過ぎないで下さい」

「氷川丸・・・」

「そうやって苦しんでいる雄人さんを見ているのは、辛いです・・・」

本当に辛そうに、氷川丸は目を伏せた。

「・・・それでも、やっぱり恐いんだ」

繰り返す雄人の腕の中で、氷川丸は胸の奥が錐で突かれたように痛むのを感じた。雄人が苦しんでいる事が、辛かった。彼の苦悩を取り除いてあげられない事が、悲しかった。そんな自分が、やるせ

なかった。

自分は、病院船だ。傷ついた人々を癒す事が、自分の使命だ。それなのに、大切な人の苦しみを癒してあげる事すらできない。大切な人ひとり助けられずして、どうして多くの人を助けられようか。どうして、病院船を名乗れようか。

氷川丸は、自分を情けなく感じた。同時に、何としてでも雄人の心を癒してあげたいと思った。

「それなら――」

氷川丸の右手が伸び、雄人の頬に触れた。驚いた様子の雄人の丸くなった瞳を見て、氷川丸は言った。

「それなら、私の傍にいて下さい。いつでも私の隣に立っていて下さい。・・・雄人さんが一緒なら、私は何も恐くありません。どんな危険も、乗り越えられます」

それは、氷川丸の偽らざる本心だった。微かに朱の差した頬で、氷川丸は微笑んだ。

「雄人さんが、私を支えて下さい。私も、雄人さんを支えますから」

風が、デッキの上を駆け抜けた。氷川丸の長い三つ編みが揺れ、彼女の甘い香りが辺りに撒かれた。

静寂が、二人の間に満ちた。二度、三度と、打ち寄せる波の音が響く。四度目の音が響く瞬間、雄人は短く答えた。

「分かった」

氷川丸は、再び自分の身体に強く力が加わるのを感じた。今度は驚かなかった。それはとても優しく、温かい感覚だった。氷川丸は、胸の奥にあつた痛みがすうつと溶けてなくなっていくのを感じた。代わりに、肌を通して受けた彼の温もりが胸の中に満ちていった。

氷川丸は目を細めて幸せそうに微笑んだ。そして、両腕を雄人の身体に回し、抱き締めた。

「ありがとう、氷川丸」

「何がですか？雄人さん」

「僕の事を気遣ってくれて。氷川丸の事を心配していたのに、逆に心配させちゃって・・・情けないな」

「・・・そんな事、ないです・・・」

氷川丸は雄人の胸に顔を埋めた。直に聞こえる彼の鼓動を聴きながら、氷川丸は言った。

「雄人さんは、情けなくなんかないですよ」

「そうかな」

「そうですよ」

「・・・ありがとう」

熱帯にしては涼しい陽気の日、二人の周りだけは熱い空気が流れていた。

その日の夜。

いつもは熱帯夜の寝苦しい夜も、今日は少し楽だった。雲のない夜空には満天の星空が広がり、甲板では患者や付き添いの看護兵がデッキチェアに座ってその眺めを楽しんでいる。

それは何も人間だけに限った話だけではなく、そこに停泊する艦艇の艦魂たちもまた、星屑の輝きに心を癒していた。

「綺麗だね」

「氷川丸」の甲板で、青葉がラムネを片手に言った。ハッチの上にごろりと寝転がり、星空を満喫している。上空の視界を遮るものが何もない露天甲板からの眺望は、最高と言えた。ただ一つ、気になるのは――

「ねー氷川丸。あの突っ立てる棒、何とかならない？視界の隅に入って気になるんだけど」

「馬鹿言わないでよ」

ハッチの脇に立つクレーンを指差して言う青葉。その言葉に氷川

丸が呆れる。

「クレーンは荷役の時に絶対必要な物なの。あれが無かったら船倉に貨物を積めないし。それに、今は患者の人を船内に収容する時にも使ってるんだから」

「そつかあ。なら仕方ないねえ」

ラムネを飲み干した青葉は、新しいものを取り出してまた飲み始めた。彼女の周りには、空のラムネ瓶が無数に散乱している。何本かはハッチの上から甲板に転がり落ちている。

「一体、何本飲むつもり？」

「さあ？」

氷川丸の問いに、青葉は気の抜けた返事を返す。溜息をつく氷川丸の横で、夕張が笑った。

「比叡さんがいたら、怒られちゃいますね」

「夕張も比叡さんの事、知ってるの？」

「知らないはず無いじゃないですか！」

夕張は大声を出した。

「あの人の恐ろしさは帝国海軍全艦魂が知っていますよ！鋭い目つき、ドスの効いた声！あれはもう艦魂じゃありませんっ」

そこまで言つて、夕張は、はつと後ろを振り返つた。

「良かった、いない……」そう言つて胸を撫で下ろす。

そんなに恐がらなくても……、と氷川丸は苦笑する。余談だが、艦魂たち（特に小型艦艇の）が比叡に対して抱く恐怖は半端なものではなく、一部の艦魂たちの間には、『比叡に怒られなくてすむお守り』なる物が流布する程だつた。

和やかな空気が流れる船上。だが、その空気は一瞬にして切り裂かれた。

けたたましい警報サイレンが、突如、夜の静寂を打ち砕いた。トラックにいる全ての将兵が緊張に顔を強張らせた。

「な、何……!?!」

突然の出来事に驚く氷川丸。そんな氷川丸に向けて、素早く飛び起きた青葉が言う。

「空襲警報だよ」

「えっ……」

青葉の言葉に氷川丸は絶句する。

「……義姉^{ねえ}さん? ……うん。……うん。……分か
つた。すぐ行く」

念話を終えた青葉は、夕張に何事か伝えた。二人は、もはや先程

までとは別人となっていた。年相応の少女の面影はそこに無く、代わりに軍人としての表情が現れていた。

「青葉・・・」

呼びかけられた青葉は振り向くと、口元に微笑を浮かべた。

「へーき、へーき。敵機はそう多くないっていうから。多分、片手で数えられるくらい。どうせ、偵察ついでに爆撃してやるうつて思ってたんでしょ」

場の緊張にはそぐわない明るい口調で言った青葉は、夕張に声をかけた。

「夕張、行くよ」

「はい」

配下の駆逐艦への指令を出し終えた夕張を従え、青葉は自艦へ転移した。氷川丸は、「青葉」が泊まる方向を見詰めた。

「氷川丸！」

かけられた声に振り向くと、そこには雄人がいた。雄人に手を引かれ、氷川丸は船内に避難した。

「雄人さん、空襲警報って・・・本当ですか？」

「・・・うん。残念ながらね」

不安げに聞く氷川丸に雄人は沈んだ声を返す。空き部屋の一等客室。氷川丸の自室であるそこに、二人はいた。

窓の外から覗く景色は、暗い。暗い海と空。そこへ、不意に光の筋が伸びた。漆黒の夜空に走る白い光線が、狂ったように夜空を照らし出す。その根元では、カメラのフラッシュのような光が散発的に散っている。少し遅れて、くぐもった砲撃の音が聞こえてくる。陸上の高射砲が、砲撃を始めたようだった。

雄人と氷川丸は、その様子を窓から見詰めている。その雄人の袖を、氷川丸の手が掴んだ。

「・・・大丈夫だよ」

氷川丸の手に自分の手を重ね、雄人が言う。

「僕が傍についているから。恐くないよ」

「・・・はい」

優しく肩を抱く雄人に、氷川丸が答える。その時、サーチライトの光芒の中を黒い影が落ちていくのが見えた。

「！」

その正体に気づいた瞬間、地上に炎が生まれた。投下された爆弾が、地上に落ちたのだ。直後、別の場所でもう一発爆弾が炸裂した。

二発の爆弾を炸裂させ、敵機は去っていった。空襲後のまとめによると、空襲をしてきた敵機は一機だけ。投下された爆弾の内、二

発が炸裂し、二名の死亡者と九名の負傷者を出した。負傷者は巡洋艦「鹿島」を経て、「氷川丸」に搬送された。

「氷川丸、大丈夫!？」

空襲警報が解除されてすぐ、青葉が飛んできた。転移するやいなや、青葉は氷川丸に怪我の有無を尋ねた。

「平気よ。私はみんながいる所からは少し離れてたし。それに、雄人さんが付いていてくれたから」

「そつか。良かった」

氷川丸の返事を聞き、青葉は安堵の息をついた。

「青葉は怪我してない？」

氷川丸の問いに、青葉は首を横に振った。

「全然。掠り傷もしてないよ。他のみんなも無事だよ」

それと・・・と青葉が続ける。

「陸に落ちた爆弾で負傷者が出たから、その人たちの事よろしくね。後で誰かが届けに来るから」

「もちろん。任せて」

氷川丸が力強く頷くのを見ると、青葉は転移して消えた。数分の静寂の後、氷川丸がおもむろに言った。

「これが・・・戦争なんですね」

「・・・うん」

雄人は小さく頷いた。

「でも、前線で戦う兵士たちはもつと過酷だ。空襲だって一機だけなんて事は無いし、爆弾だって雨霰と降ってくる」

「・・・そうですね」

「彼らと比べると、僕たちは比較的安全だ。直接、敵と戦う事は無いからね。だからこそ――」

「私たちが後方でしつかりと支援しないといけない、ですね」

雄人の言葉を氷川丸が引き継ぐ。

「兵士の皆さんが前線で命懸けで戦っているんです。私たちも、全力を尽くさないといけませんね」

「ああ。一人でも多くの人を助け、救う。それが僕たちの役割だ」

雄人の言葉に、氷川丸はしつかりと頷いた。「鹿島」から九人の負傷者が送り届けられたのは、その後の事だった。

<第九話>戦争という名の現実（リアル）（後書き）

作者「危うく一ヶ月一話更新の自分ルールを破る所だった・・・」

氷川丸「ギリギリセーフ、でしたね」

作者「読者の皆さん、お待たせ致しました」

青葉「ねえ、もうちょい早くできないの？」

氷川丸「無理よ、青葉。それができてたら、とっくにやってるわよ」

青葉「そっか」

作者「すみません。何分、遅筆なもので・・・」

氷川丸「そんな作者さんにプレゼントがあります」

作者「え？プレゼント？」

氷川丸「はい」

作者「そいつは一体どんな物で？」

氷川丸「これです」

バサッ（氷川丸、プレゼントを覆っていた白い布を取り払う）

作者「えっ・・・。なに、それ・・・」

氷川丸「『九三式注射器』です」

作者「・・・ハイ？」

氷川丸「九三式魚雷つて、知ってますか？」

作者「そりゃもちろん。帝国海軍の秘密兵器、酸素魚雷でしょ？」

氷川丸「この注射器は、その九三式魚雷を注射器に改造したものです」

作者「はいいいっ!？」

青葉「私のトコの魚雷を一本引き抜いて、夕張が造ったんだよ」

夕張「魚雷の推進機構をなくす代わりに、大量の液体を注入できるようにしました」

作者「何て事しやがるんだ、このロリツ子白衣娘は・・・で、こ

の注射器をどうするの?」

氷川丸「作者さんに注射します」

作者「・・・もう一度、言ってもらおうか?」

氷川丸「作者さんの筆が早くなるように、この注射器から栄養剤を注入します」

作者「ちょ、おまつ・・・。冗談だろ?」

氷川丸「青葉、比叡さん、お願いします」

青葉「はいよ」

比叡「相分かった」

(青葉・比叡、作者を拘束)

作者「え、ええ?」

氷川丸「それじゃあ、いきますよ。古鷹さん、持つの手伝ってもらえますか?」

古鷹「ええ。良いわよ」

作者「今日は随分と人数多いな・・・って、そんな事より!これやバイでしょ!危ないって!」

氷川丸「大丈夫ですよ、作者さん。中身はリポ。タンDですから。

有害なものではないですよ」

比叡「大丈夫だ、問題ない」

作者「大丈夫じゃない、問題だ!そもそも、それは人体に注入するものじゃない!」

氷川丸「いくよ、青葉。ファイトーツ!」

青葉「イツパーツツ!」

作者「ウギヤアアアツツ!」

青葉「ありやりや。倒れちゃったよ。どうする?氷川丸」

氷川丸「しばらく起きそうにないし、私たちだけで締めましょう」

青葉「りょーかい。そんじゃ、読者のみんなに感謝の言葉を。ありがとね」

氷川丸「ご意見・ご感想、お待ちしております」

<第十話>潜水母艦「平安丸」

氷川丸が人生初の空襲を経験した次の日、トラックに集結していた機動部隊が出港した。ラバウル攻略のための出撃である。旗艦「赤城」を主体とする艦隊が、濛々と黒煙をたなびかせて出港していく。その姿は頼もしく、甲板で見送る将兵に、彼らがいる限り日本は負けないという絶対不敗の自信を与えた。

雄人も、その一人だった。舷側に詰め寄る仲間たちと共に帽子を振って機動部隊の出撃を見送っていた。手摺りから身を乗り出して「俺達の分も戦ってきてくれー！」と叫ぶ患者もいる。皆、それぞれに声援を送っていた。

「みなさーん！ 気をつけて下さいねー！」

兵士たちの間から、氷川丸も声を張り上げる。そんな彼らの見送りに応えるように、「赤城」の汽笛が一つ鳴った。

機動部隊はやがて、水平線にその姿を霞ませ、見えなくなった。

それから暫くの間、「氷川丸」はトラックに停泊していた。熱帯特有の蒸し暑さはあるが、のんびりとした平和な日々が続く、乗組員は南国の陽気を楽しんでいた。

しかし、当然だがその様な平穏な日々はいつまでも続かない。二月一日早朝、第四艦隊長官から「氷川丸」へ『マーシャル方面に急航準備をなせ』との命令が下された。命令を受け、出港準備を進め

る「氷川丸」は続けて『クエゼリンへ急行せよ』との命令を受領した。急ピッチで作業を行った「氷川丸」は、十時五五分、トラックを出港。一路、クエゼリンへと向かった。

「マーシャル諸島の様子は聞いた？ 氷川丸」

最大船速に近い速度で海上を往く「氷川丸」の船上で雄人が聞く。氷川丸は頷いて、

「はい。アメリカの機動部隊がマーシャル諸島に襲来し、かなりの被害が出ているらしい、と……」

沈んだ声で言った。

「被害は、どのくらいなんでしょうか……」

「分からない。とにかく、今は急いでクエゼリンに行くしかない」

雄人の言葉に、氷川丸は頷いた。道中、新たな患者の収容に備えて船内の消毒を行い、クエゼリンに着いたのは三日後の二月四日だった。

クエゼリンに着くや否や、即座に患者の収容を開始する。ルオットで行ったのと同じように、担架を使って船内に患者を運ぶ。かつては荷役に使用されていたクレーンも、今は患者の収容に使われている。無闇に動かせない重傷者は、この方法で船内に下ろしていく。患者の所属は基地航空隊や巡洋艦、徴用商船など、多岐に渡っていた。

その後、「氷川丸」はマーシャル諸島の島々を巡り各地の負傷者

を収容。九日の朝、再びクエゼリンに戻って来た。

その時の事である。

「あつ………！」

近づく島影を眺めていた氷川丸。彼女が、突然大声を出した。隣にいた雄人はいきなりの事に面食らった。

「な、なに？ どうしたの、氷川丸？」

「雄人さん、ちょっと失礼します！」

雄人の問いにも答えず、氷川丸はどこかへと転移してしまった。

残された雄人はただ呆然とする。何か彼女の興味をひく物があったのかと周囲を見るが、それらしい物は見当たらない。いつも落ち着いていた感じの氷川丸が驚き、尚且つ血相を変えるほどの物は無いように見えた。艦魂の転移能力は互いの船上に限られているから、相手は同じ艦魂のはずだ。という事は、この前の比叡みたいに誰か懐かしい顔を見つけたのかも知れない。

そう考えた雄人は、氷川丸の行き先を気にするのは止め、のんびりと彼女の帰りを待つ事にした。

雄人の推理は、おおよそ当たっていた。しかし、氷川丸が見つけたその相手は、「懐かしい顔」の一言で片付けるには深過ぎる関係にあった。何故なら彼女は、氷川丸と同じ寸法・同じ性能を持った

船——姉妹船だったからだ。

「久しぶりだね。平安丸」

血を分けた姉妹を前に、氷川丸は優しく言った。柔らかく温かい
声音は、愛情に満ちたものだった。

「おねえ・・・・・・・・ちゃん・・・・・・・・？」

信じられないといった表情の少女が、ぽつりと呟く。そして、

「おねえちゃんっ！」

目の前に立つ相手を認識すると、その胸元に飛び込んだ。

「よしよし。元気だった？ 平安丸」

両腕を回して抱きつく少女の頭を撫でながら、氷川丸は言った。
少女は小さな雫を瞳の縁に浮かべながら「うん」と頷いた。

「・・・・・・・・本当に、おねえちゃんだよね？

夢じゃ、ないよね？」

「うん。夢じゃないよ」

少女は右手で自分の頬を抓る。力いっぱい抓って手を離れた少女
は、赤くなつた頬を手で押さえながら微笑した。

「・・・・・・・・ほんとだ。夢じゃない」

少女の名前は、平安丸。日本郵船がシアトル航路に配給した三隻の一万二千トン級貨客船の一隻。氷川丸の、実の妹だった。

「平安丸」は「氷川丸」の姉妹船で、その三番船にあたる。「氷川丸」、「日枝丸」、「平安丸」の三隻からなる日本郵船の一万二千トン級貨客船は、全員が海軍の徴用を受けていた。しかし、長女の「氷川丸」が病院船へ改装されたのに対し、残りの二隻は潜水母艦に改装されていた。「平安丸」は現在、特設潜水母艦として第六艦隊第一潜水戦隊に所属していた。

潜水母艦とは、洋上で長期間活動する潜水艦の後方支援を行う軍艦である。潜水艦の艦内は窮屈で、息苦しく蒸し暑い。食事も缶詰ばかりで美味しくなく、入浴も滅多にできない。そうした過酷な環境で過ごす兵士たちに休養の場を提供するのが、潜水母艦である。潜水母艦はまた、潜水艦へ食料や弾薬の補給を行ったりもする。海軍では独自に潜水母艦を建造し保有していたが、同時に商船を徴用してその任に就かせてもいた。豪華な船内設備を持つ客船は、乗員の憩いの場としては最適であるからだ。

平安丸の外見は、幼い。まだ十代前半にみえる少女だった。性格は寂しがりやで甘えん坊。典型的な末っ子タイプだった。

「おねえちゃん。どうしてここに？」

「お仕事だよ。この前、アメリカがこの島を攻撃したでしょ？お姉ちゃんは、それで怪我した人たちを助けに来たのよ」

氷川丸と平安丸は、互いの近況を話し合った。姉妹は久方ぶりの再会を懐かしむように、よく話した。

そこへ、聞き慣れた声がかかった。

「あれ？ 氷川丸？」

「えっ………、雄人さん？」

振り向いた氷川丸は間の抜けた声を出した。雄人も雄人で、ぽかんと口を開けている。

「どうしてこんな所に………？」

「それはこっちの台詞ですよ」

雄人の質問を、氷川丸がそっくりそのまま返す。雄人は肩に担いだ箱を見せながら、

「医薬品の補給の手伝いだよ。この船………『平安丸』に医薬品を補充する事になって、それに協力してるんだ」

「そうなんですか」

「それで、その子は——」

雄人が言い終わる前に、通路を進んだ先から声が聞こえた。「平安丸」の乗員の声だった。

「日高一曹、早く来て下さい！」

「今行く！——氷川丸、また後でね」

雄人は医薬品の入った箱を担いで医務室のある方向へ進み、階段を下りていった。その背中を見送った氷川丸は、下から自分を見上げる視線に気がついた。視線を下ろすと、自分の事をじっと見詰める平安丸と目があつた。

「おねえちゃん、今の人、だれ……………」

首を傾げる平安丸に、氷川丸が答える。

「あの人は日高雄人一等看護兵曹。私の所で働いている看護兵さんよ」

「『氷川丸』に乗ってるの？」

「そうよ」

氷川丸の説明に、平安丸は納得したように頷いた。

「どんな人なの？」

興味津々といった様子で聞く平安丸に、氷川丸は少し考えてから答えた。

「優しい人よ。優しくて、私のことを大切に思ってくれている……………そんな人」

「いいなあ、おねえちゃんは。わたしなんて、まだ一回も艦魂がみえる人に会ったことないのに……………。おねえちゃんだけずるいよ」

「大丈夫。そのうち、平安丸も出会えるよ」

それから少し経って、医薬品運びの手伝いを終えた雄人が戻って来た。

「お疲れ様です、雄人さん」

氷川丸の言葉に雄人は「ありがとう」と返す。そして、彼女の隣に立つ平安丸に訊ねた。

「君は、この船の艦魂？」

「うん。そうだよ」

答えを聞いた雄人は、笑顔で自己紹介をした。

「僕は日高雄人一等看護兵曹。『氷川丸』の乗組員だよ」

「うん、知ってるよ。おねえちゃんから聞いたもん」

「お姉ちゃん………?」

疑問符を浮かべる雄人の横から、氷川丸が言う。

「平安丸は、私の妹なんです」

「えっ!？」

驚きの声を上げる雄人に、二人の姉妹が頷く。

「わたしは平安丸。氷川丸おねえちゃんの、妹だよ」

にっこりと、屈託の無い笑みを平安丸は見せた。雄人は、心底驚いた様子で並び立つ姉妹を見比べた。二人は背丈も容貌も違っているが、どこことなく似た雰囲気漂わせていた。恐らく、生まれ持った客船の艦魂としての気品だろう。清楚で大人びた印象の氷川丸はもちろん、幼い平安丸にも軍艦の艦魂とは一線を画す淑やかさが備わっていた。軍艦の艦魂を武家の娘に例えるならば、客船の艦魂は公家の娘といえた。

「まさか任務先で氷川丸の妹に会うとはね………。驚きだよ」

雄人の言葉に、氷川丸が頷く。

「私だって驚きましたよ。初めに見た時は自分の目を疑いました」

「世の中って、案外狭いのかもね」

「そうかも知れませんか」

雄人は作業の続きがあるからと、「氷川丸」に戻っていった。残った二人は、平安丸の自室へと移動して話を続けることにした。

平安丸の部屋は、氷川丸と同じく、空き部屋の一等客室だった。飲み物を取ってくると言った平安丸が部屋を出でいき、氷川丸は静かな室内でベッドに座った。

「……………」

そのまま、ベッドに倒れこむ。ぼんやりと天井を見詰めていると、部屋の扉が開き平安丸が帰ってきた。

「おねえちゃん？ どうしたの？」

ベッドに仰向けに転がっている姉を見て、平安丸が少し驚いた様子で聞く。身体を起こした氷川丸は「何でもないよ」と答えた。

「はい。お茶どうぞ」

「ありがとう。平安丸」

ベッドから腰を上げた氷川丸が椅子に座り、差し出された紅茶を受け取る。姉妹はテーブルを挟んで向かい合わせに腰を下ろした。そのまま、部屋に静寂が訪れた。紅茶を啜る音と、陶器の触れ合う音だけが響く。

その静寂を最初に破ったのは、平安丸だった。

「ねえ、おねえちゃん……………」

「なに？」

カップに口をつけながら、氷川丸は視線だけを妹に向ける。平安丸は悲しそうな口調で言った。

「どうして、こんなことになっちゃったんだろうね」

氷川丸は、答えない。平安丸も姉の答えを待たずに言葉を続けた。

「わたしたちが生まれた頃は、まだ日本もアメリカも、そんなに仲が悪くなかったのに……どうして、戦争なんて始めちゃったんだろうね」

「そうね……」

氷川丸が短く言ったきり、部屋は沈黙に支配された。お互いに何も話さない、息苦しい時が流れる。

氷川丸と平安丸は、シアトル航路の定期船として十年に渡って日本とアメリカの間を結んできた。そんな彼女たちにとって、アメリカという国はとても身近な国だった。そのアメリカと日本が戦争をしている事実は、二人にとって辛いものだった。

「どこかで、仲直りできなかったのかな……?」

平安丸の問いに答える者は、いない。潜水母艦として戦場に身を置いている現状が、彼女の問いに答えていた。

「わたし、アメリカの人たちと戦いたくないよ……」

平安丸が呟くように言う。彼女自身、言ってもどうにもならない事だとは分かっていたが、言わずにはいられなかった。

「それなら――」

その時、氷川丸が口を開いた。俯いていた平安丸の顔が上がり、丸い瞳に姉の姿が映った。

「生き残るのよ、平安丸。過ぎたことを言っても、どうにもなら

ない。だから、未来のことを考えるの。この戦争を生き延びて、またシアトル航路に帰るのよ。戦争が終わった後の世界で、私たちが日本とアメリカを結ぶ架け橋になるの。私たち姉妹が、二つの国を仲直りさせるのよ」

「おねえちゃん……」

力強く言った氷川丸の言葉に、平安丸は頷いた。その口から紡がれた言葉は、先程までの悲しそうなものではなくなっていた。

「——うん。おねえちゃん、わたし、生きるよ。この戦争を生き残って、また客船に戻る。そして、日本とアメリカの人が……・ううん、世界中のみんなが笑顔でいられるような世界を作るの」

姉の瞳をしつかりと見据えて、平安丸は決意を語った。それを聞いた氷川丸は笑顔をみせて言った。

「そうそう。その意気よ」

そして、右手の小指を差し出した。

「？」

首を傾げる平安丸に氷川丸が言う。

「指切りよ。この戦争を生き残る約束の」

頷いた平安丸は、氷川丸の小指に自分の小指を絡めた。互いの目を見詰め合って、姉妹は契りを交わす。

「いい？ 平安丸。何があっても、絶対に生きるのよ。そして、また北大西洋を駆けるの。私と、平安丸と、日枝丸とで」

「約束する。二引きの社旗に誓って」

絡め合った指に、力が入る。互いの意志を確かめ合った姉妹は、指を解いた。

「それじゃあ、私はもう行くね。また会いましょう、平安丸」

「うん。元気でね、おねえちゃん」

「平安丸こそね」

氷川丸の身体が、淡い光に包まれる。転移する直前、二人は息を揃えて言った。

『また、シアトル航路で』

言い終わると同時に、氷川丸は自船へと転移した。部屋に舞う光の残滓を、平安丸はいつまでも見続けていた。

<第十話>潜水母艦「平安丸」(後書き)

作者「前は酷い目に遭った・・・」

青葉「過ぎた事とはやかく言わない！さつさと後書き始めるよ」

作者「氷川丸はともかく、ぐうたら青葉に言われるのは気に食わないな・・・」

青葉「・・・撃つよ？二〇センチ砲」

作者「すみません」

氷川丸「二人とも、何やってるんですか。真面目に後書きやつて下さい」

青葉「はい。そういえば、今回は氷川丸の妹が登場してたね」

作者「末っ子の平安丸だね」

青葉「そうそう。ずいぶんと懐かれてるじゃん、氷川丸」

氷川丸「まあね」

青葉「おっ、まんざらでもない様子だね。まあ、私も妹がいるから気持ちは分かるよ」

氷川丸「貴女のところは、姉妹関係が逆転してそんな感じだけだね」

青葉「そんな事ないよ。私は立派にお姉ちゃんやってるよ」

氷川丸「トラックに機動部隊と一緒にやって来た時、作戦会議をさぼろうとして妹に連れ戻されたのは誰だったかしら？」

青葉「うつ・・・」

作者「まあまあ、その辺で。青葉と衣笠はあれで上手くやっているんだから」

青葉「助かった・・・」

作者「それじゃ、そろそろ締めましょうかね。まずは、この作品を読んでくれている読者の皆様に心よりの感謝を。そして」

氷川丸「ご意見・ご感想、お待ちしております」

登場人物紹介

へいあんまる

平安丸

身長：145cm

外見年齢：13歳

姉妹船：氷川丸、日枝丸

日本郵船が建造したシアトル航路用一万二千トン級貨客船の三番船。日米開戦に伴い、海軍に徴用されて潜水母艦に改装された。

甘えたがりな性格で、二人の姉によく懐いている。加えて、寂しがり屋でもある。

戦前、何度も日本とアメリカを往復してきた事からアメリカを身近に感じており、両国の間に戦争が起こった事を悲しく思っている。

<第十一話>祖国への帰路

マーシャル諸島一帯での患者収容と医薬品の補充を終えた「氷川丸」は九日の午後、クエゼリンを出航した。向かう先は横須賀。「氷川丸」は船首を西へ向け、懐かしき祖国への帰路を急いだ。

途中、日本近海にて敵潜水艦が発見されたと横須賀鎮守府より緊急の機密電が入り、航路を変更するように指示された。「氷川丸」は鎮守府の指示通りに航路を変更すると共に見張りを強化したが、幸いな事に敵潜水艦との接触は無かった。

広大な太平洋の海を、「氷川丸」はただ走り続ける。初の出勤で「氷川丸」が収容した患者は合計三百名以上。遺骨も百柱以上を預かっていた。患者の内訳では米軍のマーシャル諸島への反攻による負傷者が最も多く、二百名を数えた。入院中に息を引き取る者もあり、内地へ帰還する間も、煙突裏の火葬場からは煙が立ち上った。

祖国への帰路を辿る病院船「氷川丸」。その船内の様子は、往路とはかけ離れたものだった。

往路の「氷川丸」は改装を終えたばかりであり、真新しさが随所に見られた。船内には医薬品特有の鼻につく臭いが満ち、白い船体と相まって清潔感に溢れていた。

しかし、復路の現在。「氷川丸」の船内には凄惨な光景が広がっていた。

客室を改装した各病室には傷病者が詰め込まれ、入りきらなかつ

た患者が廊下に溢れ出ていた。当初、船内に満ちていた医薬品の臭いは負傷者を乗せる度に薄くなり、今は完全に消え失せていた。代わりに船内を満たすのは、死の臭い。思わず鼻を覆いたくなるような地獄の臭気だった。

多数の患者が詰め込まれた船内は息苦しく、蒸し暑い。そこに、消毒液や動けぬ重傷者の排泄物の臭いが加わり、むせかえるような臭気を病室に充満させている。長くいると吐き気をもよおすか、若しくは失神しそうな悪臭だ。

そうした中でも、看護兵たちは己の任務を忠実にこなしていた。

定期的な包帯の交換を行うために雄人は仲間と共に病室を回っていた。今日は、氷川丸もついてきていた。

「ねえ、氷川丸」

隣を歩く氷川丸に雄人は小声で話しかける。小声で話すのは、他人の目があるからだ。

艦魂が見える者は、ごく限られている。少なくとも、「氷川丸」の乗組員の中では雄人だけだ。艦魂と会話をしている場面を艦魂が見えない者が見たら、雄人が独り言を呟いている奇妙な光景に見えてしまうのだ。

「何ですか？」

「・・・本当に、一緒に来るの？」

「はい」

雄人の問いに、氷川丸はしっかりと頷く。

「僕としては、氷川丸にはあまり見せたくないんだけどね・・・」

「

気乗りしない調子で雄人が言う。雄人が「見せたくない」と言っているのは、病室の事である。

病室内には、大勢の患者が収容されている。病院船に入院しているから当然だが、彼らは負傷している。程度の軽い傷ならば良いが、中には四肢のいずれかを失うなどの重傷を負っている患者もいる。身体の一部を失った者たちがベッドの上に横たわっている光景は、氷川丸にとってショックが強すぎると雄人は考えたのだ。だから、これまでも雄人が病室を回る時は、氷川丸には自室で待っていてもらっていた。

しかし、今日は氷川丸の方から「一緒に連れて行ってほしい」と言い出した。

雄人としては、凄惨な病室の光景を女の子に見せたくはなかったのだが、氷川丸の意志は固かった。

「雄人さんの配慮はありがたいですが、それでは自分が納得できないんです。この船は私自身なのに、私は船の中で起きている事を知らない。雄人さんたちが一生懸命患者の方々を看病している中、自分だけ何もしていない。それは嫌なんです」

氷川丸は強い口調でそう言った。結局、雄人が折れて氷川丸を連れていく事になったのだが、やはり雄人は気が進まなかった。そのため、最後にもう一度確認したのだが、案の定、答えは同じだった。

「・・・分かったよ。でも、無理しないでね。病室の中は臭いもきついから」

「はい」

氷川丸の返事を確認すると雄人は前方を向き直って歩き続けた。

一行は、患者が大量に収容されている部屋にやって来た。ここは本来、二等食堂として使われていた場所だ。現在は食卓の代わりに患者を横たえるベッドが並べられている。

部屋に入った看護兵たちは患者に包帯を取り替えに来た事を告げ、てきぱきと作業に取りかかった。

雄人も包帯を手に患者の下に向かおうとして、足を止めた。後ろを振り返り、そこにいる少女に声をかけた。

「大丈夫？ 氷川丸」

「はい・・・」

雄人の問いかけに氷川丸は頷いた。しかし、その表情から病室の臭気を堪えているのは容易に見て取れた。

「辛くなったら、部屋に戻って良いからね」

そう言つて雄人は包帯の交換に取りかかった。看護する側もされる側も慣れたもの。看護兵が手際良く包帯を取り替えるのはもちろん、患者の方も作業をしやすい位置に手足をもつてくるなど、看護する側に配慮した行動をしていた。動ける者は、看護兵の負担を少しでも軽くするために、患者同士で包帯の交換を行い合っていた。

しかし、包帯の交換も楽々といくわけではない。乾いた包帯が肌に貼りつくのと剥がしにくく、一苦勞であつた。乾いた包帯は瘡蓋かさぶたのように肌と密着しており、無理に剥がそうとすると患者を痛がらせてしまうのだ。だから剥がす時は慎重にゆっくりと剥がすのだが、それでも痛い時には痛かつた。うっかり勢いをつけて剥がしてしまおうものなら、患者から「もう少し丁寧にやってくれ」と苦情半分、懇願半分で言われるのだつた。

「イテッ！」

雄人が包帯を剥がしていると、患者が短い声を上げた。

「あつ、すみません」

「気をつけてくれよ？」

慌てて謝る雄人に、患者は苦笑混じりに言つた。

しかし、どういう訳かこの患者の包帯は特別に剥がし難く、患者が叫び声を上げる度に雄人は恐縮して謝るしかなかった。

ちなみに、一度使つた包帯は捨てる事なく洗つて再利用する。燃料や弾薬と同じように、医薬品も重要な軍需物資なのだ。使えるものは再利用しなければならぬ。そうではないものも、無駄に使う

事はできないのである。

剥がした包帯を回収した雄人たちは次の病室へと向かう。同じ作業を行い、また次の部屋へ。その繰り返しだ。

包帯の交換を行う雄人の後ろから、氷川丸はその様子をじっと見つめていた。

病室の中には、白衣の群れ。見渡す限りの白衣の患者が病室に収まっている。自分の船体と同じ、純白の服。しかし、その清らかな色とは裏腹に、病室に流れる空気はひどく悪い。異臭が鼻につき、気分を悪くさせる。それが船内に——自分の身体に充満しているのだと気づいた氷川丸は胸焼けのような感覚を覚えた。

胸をつく不快感を抑えながら、氷川丸は雄人の作業を見守る。何か手伝いたいのが、病室の臭気のせいか身体が重い。何もする事がないまま、雄人に従って次の病室に移動した。

氷川丸が動けなかった理由は身体の不調の他にも、もう一つあった。それは、病室の光景である。

病室に収容されている患者たちの姿は、氷川丸に大きな衝撃を与えた。白衣の傷病兵たちは、身体のおちこちに包帯を巻いた痛々しい姿をしていた。銃弾に貫かれた腕を吊っている者や、足を負傷して動けない者。様々な者がいた。

しかし、負傷しながらも五体満足でいらればまだ幸運な方かも知れない。病室には、身体の一部を失った兵士も大勢いた。

氷川丸が最初に彼の姿を目にした時、彼女は小さな悲鳴を上げた。

頭部に巻かれた包帯に、まずは目がいった。だが、頭部の傷は浅く、病院船に収容される程のものではないように見えた。他に怪我をしている箇所があるのだろうか、氷川丸は視線を下に送った。胸部、腹部、と患者の身体を観察する。そして負傷箇所を見つけた時、少女は「ひっ」と短く叫んだ。

その兵士の左足は、上腿部の付け根から半分を残して、そっくり無くなっていた。円形の傷口が包帯に覆われている。片足を失った兵士は、まるで糸の切れた操り人形のように寝台に座っていた。寝台の縁から一本だけ垂れる右足が、手持ちぶさたに揺れていた。

兵士の目には、感情が宿っていなかった。何も映していない、穴のような暗い瞳。その目が不意に動き、氷川丸と視線を結んだ。氷川丸は、恐怖を感じた。とても人間を見ているようには思えなかったからだ。彼は既に廃人であった。生ける屍と化していた。得体の知れない懼れおその感情が、氷川丸の心を支配した。

身体の一部を失った兵士はそう珍しいものでもなかった。他にも、片腕を失った者や手の指を銃弾に持っていた者などがいた。爆風にやられて視力を損ねた者もいた。彼らの姿は、戦争というものがただ人の命を奪うだけでなく、生き残った者にも傷を与えるという事を示していた。死闘の果てに生還を果たしたとしても、身体の一部を失った兵士はその後の人生から可能性を奪われた。

また、雄人たちは立ち寄らなかったが、戦闘によって精神を病んだ患者を収容する部屋もあった。

戦争が人々に与える害を、氷川丸は改めて認識した。そして恐怖した。今まで船内を見て回らなかったのは、心の奥でこうした光景

を目にするのを恐れていたからかも知れなかった。一人でこの光景を見ていたら、恐怖で立ち竦むだけでは済まなかっただろう。

担当する病室を全て回り、雄人たちは仕事を完了した。回収した包帯を洗い場に集め、一息ついた雄人は氷川丸に訊いた。

「氷川丸、気分はどう？」

「・・・少し、疲れました」

力の無い微笑を添えて氷川丸は答える。その顔からは疲労の色が見てとれた。初めて目にした病室の光景と、そこに満ちる臭いに当てられたのだろう。

「少し休もうか。氷川丸」

雄人は氷川丸の手を引き、甲板へと上がった。プロムナードデッキの長椅子に空を見つけ、そこに腰を下ろす。海風が運んでくる新鮮な空気を深く吸い込み、肺に溜まった澱んだ空気を吐き出す。

「水、飲む？」

氷川丸は頷くと雄人が渡した水筒を受け取った。中身を一口飲んで、小さく息をつく。

そのまま暫くの静寂が訪れ、やがてそれを破って氷川丸が小さく呟いた。

「・・・あれが、戦争の姿なんですな」

雄人は肯定も否定もしない。氷川丸も答えは望んでいなかった。

「彼らの姿はある程度想像していましたが・・・実際にこの目で見ると、やっぱりシヨックでした・・・。彼らを介抱する立場のはずなのに、怖いとさえ感じてしまいました・・・」

心中を吐露した氷川丸は長い息を吐いた。元々、慣れない南洋での活動で貯まっていた疲れに精神的シヨックが加わり、氷川丸は疲労困憊していた。雄人は氷川丸を部屋まで連れて行くと、ベッドに寝かせた。

ほどなくして、氷川丸は整った寝息を立て始めた。これにより緊張の糸が切れて疲れが溢れ出たのだろう、氷川丸はこれから先、横須賀に到着するまで体調の優れない状態が続くことになる。

「氷川丸」が横須賀の港へ帰り着いたのは、二月の十六日。マーシャル諸島クエゼリンを出発してから一週間、昨年暮れの出航以来、約二ヶ月振りの帰国であった。

昼前に横須賀港に入港した「氷川丸」は岸壁に接岸し、傷病者の転院準備を開始した。

呉、佐世保、舞鶴と並ぶ海軍の主要軍港の一つ、横須賀には鎮守府をはじめ様々な施設が置かれている。その中の一つ、横須賀海軍病院に「氷川丸」に入院中の患者を移送するのだ。船内に収容されていた合計三三一人の患者が、横須賀海軍病院へと転院された。

遺骨の方も、横須賀の海兵団へと引き渡された。その数百十七柱。

遺骨を託す時は、託す側も託される側も沈痛な面持ちで遺骨の受け渡しを行っていた。

患者の転院と遺骨の引き渡しが終わったところで、病院線「氷川丸」の初任務はようやく終了した。初の任務達成に、乗組員たちはみな安堵の表情をみせた。

しかし、彼らの様子とは反対に、この船の艦魂である氷川丸は浮かない表情をしていた。それもそのはずで、彼女は横須賀への帰途の途中からずっと身体の調子が悪かったのだ。

原因は横須賀に帰って来てからすぐに知れた。船体各所に傷みが発生していたのである。

艦魂の身体は、本体である船と密接に関わり合っている。船体に損害が生じれば艦魂も身体に傷を負う。そこまでいなくても、船体や船内の機構に不具合が生じると艦魂自身の健康状態に影響が出るのだ。

「氷川丸」の船体は、至る所が傷んでいた。何しろ、竣工してからずっと北太平洋のシアトル航路を走ってきた船である。今まで彼女が経験してきた海といえば、アリューシャン列島近海に代表される冷たく波の強い海だった。

ところが、今回赴いた先は赤道直下の南太平洋。気候はもちろん、海水の質も北太平洋とは大きく違っていた。特に海水温には大きな隔たりがあった。例えて言うなら、今まで北海道に住んでいた人がいきなり沖縄に移り住んだようなものである。

急激な環境の変化は、人間にとって体調を崩す原因となる。それ

は船に対しても同じである。冷たい海から急に温かな南洋へと送られた「氷川丸」の船体は各所に傷みを生じていた。船の内外に発生した損傷箇所は合わせて二六ヶ所。殊に床に敷かれたリノリウム材の損傷が三ヶ所も発生したのは暑さによるものだと判断された。ラムネ製造機の故障は、使い過ぎによるものと診断された。

それら諸々の損傷箇所の修理と、乗員からの要望を受けた改造を施すため、「氷川丸」は横須賀海軍工廠で修理を受ける事になった。「氷川丸」は早速、工廠のドックへ入渠し修理を開始した。

それに伴い、乗組員たちは船を降ろされる事になった。久しぶりに祖国の土を踏んだ彼らは自分たちの船が船渠に収められている間、羽を伸ばす機会を手に入れた。

荷物を纏めて下船の準備を整えた雄人は氷川丸の所へ足を運んだ。軽くノックしてから扉を明けると、振り向いた氷川丸と目が合った。

「あ、雄人さん」

ベッドを椅子代わりにする氷川丸は雄人の姿を認めるなり立ち上がって迎えようとする。それを手で制して雄人は氷川丸の隣に腰掛けた。

「どう？ 調子は」

「悪くはありませんが、頭が少し重いです」

「そっか。でも、それももう少しの辛抱だよ。ドックに入れて傷

んだ部分を修理するっていうから」

「そうみたいです。これでようやく、止まない頭痛からも解放されます」

そう言っで氷川丸は清々した表情を浮かべる。が、すぐにそれを引っ込めて、

「……でも、雄人さんはその間船を降りてしまっんですよね」

「まあ、そうなるね。僕が船に残っていても工廠の人の邪魔になるだけだろうし」

「……少し……寂しいです」

心細そうに言う氷川丸を励ますように雄人が言う。

「大丈夫だよ。すぐに戻ってくるから。陸のお土産も買ってきてあげるし、面白い話も聞かせてあげるよ。だから、早く元気になっ
てね」

明るい口調で言う雄人に、氷川丸は頬を綻ばせて頷いた。

「ええ。楽しみにしています」

船を降りる雄人を氷川丸は甲板の上から見送った。陸に降り立った雄人が歩きだし、その姿が見えなくなると、氷川丸は改めて周りの景色に目をやった。そこには、ここを出ていった時と変わらない長閑で平和な景色が広がっていた。内地の様子を見てみると、この国が戦争をやっているなんて信じられなかった。しかし、船内に残

る血の臭いは、確かにこの国が戦争の最中にある事を教えていた。

乗員たちを降ろした「氷川丸」は翌日にもドックへ入れられた。初の大役を果たした「氷川丸」とその乗り手たちには、暫くの休息が与えられる事になった。

<第十一話>祖国への帰路（後書き）

作者「何だかんだで、この作品の連載を開始してから半年が経ちました。早いものです」

氷川丸「初投稿の日が5月の初めでしたから・・・もうすぐ七ヶ月ですね」

青葉「そういえばさ、作者はどうしてこの話を書こうとしたのさ？他の艦魂小説だと軍艦が主役の話が多いじゃん。病院船って、どっちかというと後方支援というか、地味な方じゃん？なんで？」

氷川丸「それは、私も気になりますね。どうして私のことを書くうとしたんですか？」

作者「えーっと、何でだったかなあ・・・（日記を開いて見返す）・・・ああ、そうそう、思い出した。きっかけはすごく単純だったんだよ」

氷川丸「と、言いますと？」

作者「四月のある日、『氷川丸』に立ち寄ってね。その時は特に目的も無くて、横浜に来たついでに足を向けた感じだった」

青葉「ふうん・・・で？」

作者「船内の展示を見て回るうちに段々と『氷川丸』について興味が湧いて、もっと知りたいを思うようになった。次いで、知った事を伝えたいと思った」

青葉「ほうほう」

作者「今は横浜の一角で静かに時を過ごしている客船が、かつては戦場を駆け巡り、多くの命を救ってきた。前線で戦う戦艦や空母の活躍に隠れがちだけど、その後ろで戦っていた者たちもいるんだってことを伝えたかった。その衝動に駆られて書いたってわけ」

青葉「だってさ、氷川丸。どう？」

氷川丸「どう、って・・・。面と向かって言われると、少し気恥ずかしいですね」

青葉「やーい、赤くなつてらあ」

氷川丸「うるさいっ」

青葉「あははっ」

氷川丸「まったくもう……。では作者さん、そろそろ切り上げましようか」

作者「そうするか。氷川丸、青葉、よろしく」

青葉「はいはい！毎度ながら、この作品を読んでくれる人たちに感謝の言葉を。ありがとね！」

氷川丸「ご意見・ご感想もお待ちしております」

<幕間>氷川神社参詣記

横須賀という街は今も昔も軍港の街として栄えている。今でこそ在日米軍の基地がある場所という認識のされ方をしているが、戦前は現在海上自衛隊と米軍が使用している面積よりも広い範囲が海軍の用地となっていた。

横須賀は、古くから城下町や湊町として栄えてきたわけではない。明治の開国以前は、田舎であった。それが、開国以来、急速に開発されていった。そのためか、横須賀には城下町から発展した都市に見られるような名所旧跡といったものは見られない。この街の開発は、専ら軍港としての能力の拡充に重点が置かれていた。

昭和二年、宇野浩二が『中央公論』に発表した『軍港行進曲』という小説には、次のように書かれている。

『どういう訳か、横須賀と言う町には宿屋らしい宿屋がないのだ。恐らく日本の中で、市と名のつく市で、横須賀ほど宿屋のない町は少ないだろうと思う。多分横須賀に泊まって何処へ見物に行こうという所がないのが一つだろう。汽車は大船から一本の道でそこが行き止まりになっているが、そこは唯軍港があるだけで、商業も工業もない。』

このように殺風景な街だったから、京都のような風光明媚は望むべくもない。一応、久里浜や三浦には海水浴場もあるし、衣笠にはかつて三浦氏が拠点とした衣笠城の跡もある。だが、当時はそれらの場所まで鉄道が走っておらず、足を運ぶのは少し面倒だった。ち

なみに、久里浜は黒船のペリー提督が上陸した地として歴史にその名を留めている。当地には提督の上陸記念碑も建てられている。

帝都東京と軍都横須賀を結ぶ国鉄横須賀線は、軍事上の重要路線と位置付けられ早くから整備が行われてきた。線路の複線化も積極的に進められ、当時はまだ少ない電車も導入された。後には、戦局の悪化に伴い各地の地方路線が不要不急路線として廃止される中で逆に横須賀―久里浜間を新たに開業した。尚、この区間だけは資材と工期の関係から複線とする事はできず、現在に至るまでずっと単線のままで営業している。

横須賀線が優遇されているもう一つの理由としては、沿線の住宅事情が挙げられる。逗子、鎌倉、葉山といった町には比較的裕福な家庭が暮らし、別荘地としても名が知れていた。特に、葉山には皇室の御用邸が存在し、御召し列車も運行される事から郊外路線としては高く格付けされていた。

軍都横須賀の玄関口である国鉄横須賀線横須賀駅は、逸見の波止場に近い位置にある。すぐ近くには衛兵の詰める守衛門があり、軍港都市としての雰囲気を感じさせる。

この横須賀駅は、少し珍しい構造をしている。駅舎に段差が一切存在しない、つまり階段の無い駅なのだ。改札口を通ると、目の前はまだもうホームである。この当時、駅舎を設計した人々が意識していたかどうかは知る由も無いが、今日の言葉で言えばバリアフリー構造の駅舎である。

潮の香りが漂う早朝の横須賀駅。そのホームに、大勢の男たちがいた。人数はかなり多い。二百人ほどはいようか。その誰もがきつちりと粧し込み正装をしている。鉄骨支えの屋根の下、正装の男たち

ちは整然と列車を待っている。

やがて、ファンツ、と警笛を鳴らしながら電車が駅構内へ進入してきた。ブレーキの音を軋ませて電車が停まると扉が開き、中から乗客が降りてきた。その中には海軍の軍人も混じっている。横須賀駅行だった列車は折り返し東京行となり、正装の男たちは数両の車両に分かれて乗車した。運転手と車掌の交代を済ませ、発車準備を整えた列車は警笛を一つ鳴らし横須賀駅を発車した。

国鉄横須賀線の三等車両の車内から、日高雄人は外の景色を眺めていた。といっても、流れる景色はしょっちゅう暗黒に塗り潰され、満足に楽しむ事はできない。

山がちな三浦半島の地形から、横須賀線には隧道が多い。軍歌『敷島艦行進曲』の中でも、

『隧道つきて顕わるる
横須賀港の深みどり
潮に浮かぶ城郭は
名も香しき敷島艦』

と歌われている。

何本もの隧道を抜け、ようやく横須賀の港に辿り着く。初めて横須賀へやって来る人は「いったい幾つあるんだ」と思うことだろう。

先ほど抜けた隧道は、抜けるのに一分以上もかかった。「氷川丸」
乗り組みを命ぜられて横須賀へ赴いた時も感じたが、横須賀は隧道
だらけだ。よくもまあこんな所へ線路を通したものだと思う。

驚きと感心の入り交じった表情で流れる景色を眺めていると、隣
に座っていた同僚の吾妻司^{あづまつかさ}一等看護兵曹が声をかけてきた。

「なあ、雄人よ。トランプやらねえか？」

「いいけど、何やるの？」

「ポーカ―だ。野田、高木。お前等も入れ」

吾妻は向かいに座っていた二人の看護兵、野田と高木を半ば強引
に誘い込み、ポーカ―を始めた。横須賀線に配備されているモハ3
2系列車の座席は向かい合わせのボックスシートとなっており、ゲ
ームをするには持つてこいの座席配置となっている。

「負けた奴は向こうで昼飯奢る。良いな？」

「あの、吾妻一曹。実は自分、今月は厳しくて・・・」

「問答無用！ 主計長から前借りでも何でもしとけ！」

「そ、そんな！」

「お前が勝てば良いだけの話だ。出費が怖くば勝負に勝て！」

野田の訴えを切り捨てた吾妻は強引にゲームを開始する。この吾
妻という男は賭け事をこよなく愛する人物で、稼ぎの大半はそれに

費やしているともつぱらの噂である。

配られた五枚の手札を見た吾妻はニヤリと勝ち誇ったような笑いを浮かべた。

彼の手札には初手にして強力な役、フォーカードが並んでいた。これに勝てる役はそういない。勝利を確信した吾妻はノーチェンジを宣言した。手札の交換を行う雄人たちを横目に見ながら、吾妻は内心ほくそ笑んだ。

全員がノーチェンジを宣言した所で互いの役を競い合う。既に勝利の美酒に酔っている吾妻は勇ましく手札を公開した。

「見る、フォーカード！ これで俺の勝ちだ！」

得意げな表情の吾妻に対し、雄人と高木は浮かない顔をしている。役を見ると、雄人はツーペア、高木に至っては役無しである。

「おい、お前はどうか？」

吾妻の問いに、野田は申し訳なさそうな顔をする。そして、

「・・・ロイヤルストレートフラッシュです」

「なにいつ!？」

見せられた手札に吾妻が驚く。雄人と高木も「おおっ」と声を漏らす。

「嘘だろ!？」

「すみません。何だか空気読めない手札で」

「謝るな！ 余計に俺が惨めな気持ちになる！」

「すみません・・・」

「だから謝るな！」

「静かにせんかッ！」

ゴンツと軍医士官の拳骨が炸裂し、吾妻は蛙が潰されたような声を出した。痛む頭を押さえながら、吾妻は「もう一回だ！」と言った。

リベンジを目論む吾妻の野望は、しかし・・・

「フルハウス！」

と言えば高木が、

「フォーカードです」

「ストレート！」

と叫べば雄人が、

「フラッシュ」

と、悉く敗北し、結局最下位で終わった。

「それじゃあ司。お昼、よろしくね」

「「宜しく願います！」」「」

自らが提案した賭けの条件通り、三人に対して奢る事になった吾妻は、沈鬱な溜息をつきうなだれた。

「日高一曹。大宮の名物とは何でしょうか？」

「さあ。僕も行った事は無いから分からないな。向こうで美味しそうなお店を見つけよう」

「そうですね」

雄人と二人の看護兵は遠足に行く学生のような様子で会話をする。列車は横浜を過ぎ、東京へ近づいていた。

過ぎ行く景色を眺めながら、雄人は横須賀で氷川丸に聞いた話を思い出していた。

「・・・氷川神社？」

「はい」

鸚鵡おむすひ返しに聞く雄人に氷川丸は頷く。

船渠入りの前日。氷川丸の自室で雄人は氷川丸からある話を聞いていた。

「初代の秋吉七郎船長の時代から、ドックに入渠したり船内消毒を行ったりする時に船員一同で氷川神社にお参りに行っているんで

す。今回のドック入りでも行くはずですよ」

「氷川神社って、結構有名な神社だね？ 場所は確か・・・」

「埼玉県の大宮です。私の船名は、そこから戴いたものなんですよ。船橋の船内神社にもおまつりしています」

「へえ・・・」

「私の妹の日枝丸や平安丸も、それぞれ同じように神社の名前を船名に戴いています」

氷川丸の説明に、雄人は感嘆の声を漏らした。氷川神社といえば、関東一円に分社を持つ格式高い神社である。その氷川神社から名を授かった「氷川丸」という船は、強く神仏の加護を受けているに違いない。

ちなみに、シアトル航路と並ぶ太平洋航路の主要路線であるサンフランシスコ航路の客船「浅間丸」、「龍田丸」、「秩父丸（後に「鎌倉丸」と改名）」も神社の名を船名に冠している。一万七千トンのこれら三隻の貨客船は現在、海軍に徴用され輸送船として活動している。

「『板子一枚下は地獄』。船乗りというのは、平和な時でも常に危険と隣り合わせです。船底を隔てた先は底無しの海ですから。だから船内に神様をまつって安航を祈願しているんです」

「それで、いつも護ってもらっているお礼をしに大宮の氷川神社まで御参りに行くなってわけだね」

「そういうことです」

「それって、僕たちも行くのかな？」

「もちろんです。雄人さんたちも、今はこの船のクルーなんですから。氷川神社への参詣は乗組員全員で行くのが決まりです。しっかりお参りしてきて下さいね」

「うん。分かった」

氷川丸の言葉に雄人は頷く。彼女の言った通り、上陸した雄人たちは船の入渠中に船員一同で氷川神社へ参拝する事を病院長より告げられた。

やがて、列車は東京駅に到着した。横須賀線は東京が終着駅なので、大宮へ行くには路線を乗り換える必要がある。日本全国、津々浦々まで延びる全ての鉄道の起点。帝都東京を象徴する建造物の一つである東京駅は、赤煉瓦の威容を人々に誇っている。その大きさはホームが二番までしかない横須賀駅などとは比較にならない。一人で来たら絶対迷うだろうな、と地方出身者の雄人は思った。

列車を乗り換え、一路大宮へ。横須賀から東京へ向かう時は徐々に都会に近づいていった景色が、今度は逆に段々と長閑な風景に変わっていく。県境を越えて埼玉県に入るとじきに大宮駅に着いた。

大宮駅から氷川神社までは、徒歩で二十分ほどかかる。

「氷川丸」が海軍に徴用される際、海軍は船体と共に船の乗組員

も借り上げる形をとっていた。そのため、病院船となった「氷川丸」では海軍と郵船の乗組員が一緒に働いている。両者が一体となって隊列を組んで歩いていく様子は、ちょっとしたパフォーマンスのように見えた。

石畳の参道を抜け、一行は遂に氷川神社に到着した。船長と病院長が神主の所へ挨拶に行き、持ってきた献納物を奉納する。「氷川丸」から神社へ奉納される物は、「氷川丸」自身の航空写真や日本酒など。これに加え、南方での任務中に調達した砂糖も奉納する。物資統制により国内では手に入りにくくなった砂糖の献納は、神社にとっても嬉しいものだった。

献納物の奉納を済ませると、一行は揃って船の航海の安全を神に祈った。みな、船の安航を念じると共に、自身の安全も祈願した。雄人も左右の者に倣って両手を合わせ、戦火を無事に潜り抜けられる事を祈った。

参拝を済ませた一同は社務所でもてなしを受けたあと、神社を離れた。帰り際に、御神籤おみくじを引いたり御守を買ったりする者の姿が多く見られた。殆どは身の安全を期する御守を買って求めているが、中には「恋愛成就」と書かれた御守を購入し、あとでからかわれている者もいた。雄人も御守を買った。無論、前者である。個数は二つ。余分に買った一つはもちろん、氷川丸の分である。

神社から駅までの帰り道を、土産物屋を物色しながら歩いていく。行きの電車内でのポーカーで惨敗した吾妻は約束通り雄人、野田、高木の三人に奢る羽目になった。三人が土産物を買う度に「支払いはこれで」とクレジットカードのように酷使された吾妻は財布の中身を殆どすり減らした。二月の寒空の下、体感温度も寒くなつた吾妻は、

「雄人おゝ、覚えてるよ……」

と、奥歯をガチガチ震わせながら恨めしそうに言うのだった。

再び長い列車の旅を過ごし、雄人たちは夕方頃に横須賀へ戻ってきた。就役後の船は、たとえ入渠中であつても船長はじめ主要スタッフは船に残っていないなければならない。幸運にも、雄人は船内居残り組に選ばれてはいなかったため、どこかの下宿に一時の居を構えようとしたのだが、そこへとんだ邪魔が入った。

「船内に残留する予定の吾妻一曹が急に体調を崩した。ついては、貴様に彼の代わりをやってもらふ」

左官の階級章をつけた軍医の一言で雄人の予定は瓦解した。吾妻に託されたといつて渡された手紙には一言、「ざまあ見る！」と書かれてあつた。

「……司は、吾妻一曹は何か言つてましたか？」

「ん？ 何も言っていなかったが。……そう言えば、その手紙を渡してくれと頼まれた時、妙に嬉しそうな顔をしてたよう……」

「（……司の奴、絶対仮病だな）」

首を捻る軍医の言葉を聞きながら雄人は心中で呟いた。それにしても、軍医の目を欺ける仮病なんてそうあるものではない。一体どんな手を使ったのやら、と雄人は内心で呆れた。

しかし、上官の言葉には逆らえない。雄人は巧みな仮病を使った同僚の代理として船内居残り組に名を連ねる事になった。

「あれ、雄人さん？ 戻って来てたんですか？」

入渠中、船を降りて市内に下宿を借りる事を告げられていた氷川丸は雄人の姿を見ると間の抜けた声を上げた。雄人が事情を説明すると、

「それはお気の毒でしたね。せつかく、久しぶりの陸を楽しめるはずでしたのに」

「まあ、いいよ。陸に上がっても特に何をする予定も無かったし」

「それにしても、その吾妻さんという人も災難ですね。急に身体を壊すなんて、やっぱり任務の疲れが出たんでしょうか？」

「いや。司のは多分仮病だよ」

「えっ？ 仮病、ですか？」

「うん。ほら、この手紙見て」

そう言って雄人は例の手紙を見せる。それを見た氷川丸は何とも言えない顔をした。

「ざまあ見ろ、って……。雄人さん、何かその人に恨まれるようなことをしたんですか？」

「ううん。司が自分の言い出した賭けに負けただけ」

「それって・・・逆恨みですか・・・？」

「そんな所、かな」

「・・・前言撤回です。災難なのは雄人さんの方でした」

お気の毒です、と氷川丸は本当に気の毒そうに言った。まったくね、と雄人が僅かな苦笑を含んだ声で応える。

「ところで、氷川丸。ドック入りの期間はどの位なの？」

「早ければ数日、遅くとも一週間は超えないと工廠の方が話しているのを聞きました」

「そつか。案外早いものだね」

「私の場合、船体の傷みを修繕するだけですから。大穴の空いた軍艦の修理も手掛ける工廠の方々にとっては朝飯前といったところなのでしょう」

氷川丸の言葉に、雄人は確かにそうだと頷いた。横須賀海軍工廠は、呉の海軍工廠と並んで軍艦建造のメッカである。多くの戦艦や空母を手掛けてきた横須賀海軍工廠には、「氷川丸」の船体にできた傷みなど掠り傷にも満たない。あつという間に修理を完了してしまうだろう。

「氷川丸」が工廠のドックに入渠している時、横須賀では「大和」

、「武蔵」に続く第三の巨大戦艦が建造中であつた。しかし、海軍のトップ・シークレットに属するこの戦艦の存在は徹底的に秘匿されており、雄人と氷川丸はその存在を知る由も無かつた。

やがて、修理と要望箇所の改造を終えた「氷川丸」はドックを出渠。二月二三日には再び内南洋トラック諸島へと二度目の航海へ旅立つのであつた。

<幕間>氷川神社参詣記(後書き)

作者「今回は番外編のような位置づけの話にしてみました。如何でしたか？」

青葉「横須賀ねえ。私も寄ったことあるけど、軍港以外はホントに何もないよね。別府湾に入った時なんかは、温泉とかあるのに」

作者「地元民には耳が痛いから、その位にしてくれ……。今はそれを利用して、海軍カレーとかで町興ししてるんだから」

青葉「ふうん。でもそれって、他の所でもできるんじゃない？呉とか佐世保とか」

作者「いや、横須賀には『三笠』がある！」

青葉「呉にも大和ミュージアムあるけど？」

作者「うぐつ……。くそ、ずるいぞ！同じように開国前はド田舎だったくせに横浜だけ発展して！」

氷川丸「はい？」

青葉「うわあ。完全に八つ当たりだ」

作者「こっちは波止場の守衛門が名所になる程に何も無いのに、横浜は豪華な客船たくさん呼び寄せてずるいぞ！」

氷川丸「それは単純に港の性格の違いだと思いますけど……」

横須賀は軍港、横浜は貿易港として発展したんですから、差が出るのは当然です。第一、軍港に客船が入港してきたら不都合ですよ。機密の塊の軍艦を間近で見せることになりかねませんから」

青葉「正論だね」

作者「……………」

氷川丸「氷嚢あげますから、これで少し頭冷やして下さい」

(作者、退場)

氷川丸「ふう……。さてと。そろそろ終わりにしようか、青葉」

青葉「そだね」

氷川丸「この作品を読んで下さる読者の皆さんに心よりの感謝を

申し上げます。ご意見・ご感想もお待ちしております」
青葉「またねー！」

<第十二話>二度目の航海

横須賀海軍工廠で修理を終えた「氷川丸」は二二日朝、横須賀を出港した。向かう先は日本海軍の前線基地、トラック諸島である。

朝冷えする空気の中、「氷川丸」は浦賀水道を下る。凧の海は穏やかで、船の動揺は殆ど無い。左手には房総半島の峰々が聳え、山の端を東雲色に染め上げている。

冬の遅い朝日を受けて純白の船体を彩る「氷川丸」の姿は、水道を行き交う船の中でも一際鮮やかだ。特に、彼女の責務を表す舷側の赤十字は周囲の視線を彼女に集めた。

この船の艦魂、氷川丸は、その様子を見て照れ笑いを浮かべた。

彼女は船の艦^{とも}から水道の風景を眺めていた。初めは朝焼けの房総半島の眺望を楽しんでいたのだが、その内、やけに視線を感じるようになった。見ると、行き交う船々の視線が自分に集まっていた。

見られる事は、別に嫌いじゃない。自身を眺めて「綺麗な船だ」と言ってもらえれば、それは嬉しい。けれど、こつも沢山の船から眺められては流石に少し恥ずかしい。氷川丸は視線を逃がすように三浦半島の山を見た。

「あ・・・」

その時、氷川丸は小さな声を漏らした。半島の先端に、真っ白な灯台が建っていた。観音崎灯台である。

「氷川丸」の船体と同じ純白を身に纏った灯台は、彼女に数ヶ月前の記憶を思い出させた。

病院船となった「氷川丸」が初の任務に赴いたのは今から三ヶ月ほど前の事だ。その時に見た灯台と今日の灯台は、雰囲気まるで違っていた。

三ヶ月前、遠ざかる陸地に見た観音崎の灯台は得体の知れない不安感を氷川丸に抱かせた。岬の先にぽつんと一つ建つ灯台が、大海原を一人進む自分に重ね合わされたからだ。孤独な気持ちを掻き立てられ、無性に寂しくなった。

しかし改めて見る灯台からは、そうした印象は受けなかった。寧ろ、背中を押される気分さえなる。半島の突端に聳える白い灯台に安心感と頼もしさを感じた。

この違いは如何なるものだろうか、と氷川丸は考えた。そして、心持ちの違いなのだろうと結論づけた。

初の出勤時、彼女の心を支配していたのは不安感だった。病院船という身の安全を保証された船とはいえ、戦場では何が起こるか分からない。もしかしたら沈められるかも知れない。そんな不安があった。夜間航行時は潜水艦に見つからないよう、本来点灯させるはずの赤十字灯をつけないほどだった。

しかし、今は違う。戦場への恐怖は変わらずある。けれど、それ以上に使命感のようなものが強くあった。戦いに傷ついた人々を助け、生命を救う。トラックで目の当たりにした空襲の様子、収容した患者の痛々しい姿——戦争の一部を垣間見て、現実を知った。知ったからこそ、氷川丸はその気持ちを強く思った。

浦賀水道を通り抜けた「氷川丸」は航海速力へ速度を上げた。背後に霞む陸地に別れを告げ、船は南へ舳先を向けた。

「氷川丸」が内南洋トラック諸島に到着したのは、横須賀を出港してから五日後の二七日の事だった。到着早々、「氷川丸」は司令部からの命令を受領した。

『パラオに向かい負傷者を収容の上、なるべく速やかにトラックに帰投すべし』

命令を受けた「氷川丸」は手早く補給を済ませるとパラオへ向かった。パラオはトラックの西、フィリピンの東に位置する島であり、トラックと同じく多数の小島から成り立つ。トラックと同緯度に位置し、緯度は十度もない。赤道直下、生粋の南洋の島である。島の南方にはニューギニア島、そしてオーストラリア大陸が控えている。

トラックを出た「氷川丸」は三月三日、パラオに入港した。

内地ではちょうど桃の節句が祝われている日。日本から遠く離れたパラオでも、その光景は見られた。パラオやトラックといった島々は第一次世界大戦後に日本の委任統治領となっており、大勢の人々が移住していた。日本から移り住んだ人々の中で女兒を持つ家庭では、華やかな祝儀が催されていた。

とはいえ、海上の移動病院である「氷川丸」には陸地での祭りは無縁の存在であった。もし「氷川丸」に小児科が存在し、そこに小さな女の子でも入院していたのなら話は別であっただろうが、この

船の役割から見て、それは有り得ない話だった。

負傷者の収容・治療、後方への移送、前線での防疫・医薬品補充など様々な任務をこなす病院船には、陸上の総合病院にあるような一通りの設備が備わっている。外科内科はもちろんの事、歯科に耳鼻科、薬局にレントゲン室も設けられている。しかし、小児科はなかった。理由は簡単だ。設置する必要が無いからだ。

病院船の主任務は、負傷した軍人の救命にある。収容するのは軍人のみである。当然ながら、軍隊に属する者の中で小児科にかかるような年齢の者はいない。それならば、小児科を置く理由はない。当たり前といえば当たり前前の話である。

加えて、「氷川丸」に乗っている人間は、みな男性である。病院船の中には赤十字の女性看護婦を乗せている船もあったが、「氷川丸」の場合は全員男性であった。だから、女子の節句である雛祭りには一切合切、縁が無い。

しかし、この船にも女性は一入、乗っていた。他でもない、この船の艦魂である氷川丸だ。外見は十代中頃の少女であり、大人びたしっかりした性格の彼女だが、そうしたお祭り事はやっぱり楽しめたかった。

「一度でいいから、雛人形を飾って雛祭りを祝ってみたいです」

「やっぱり、そういうのには憧れる？」

「それはまあ。私も女の子ですから」

嘆息して呟いた氷川丸は雄人の問いに頷く。パラオに到着はした

ものの、まだ患者の収容は始められていない。準備は既に済んでいるので、二人は余分の時間を港内の眺望を楽しむ事に費やしていた。

「客船だった頃は船内で雛祭りとかやらなかったの？」

「端午の節句に、マストに鯉のぼりを揚げる事はしました。ですが、雛人形は飾りませんでしたね」

「そうなんだ。でも、客船って社交室とかあるよね？　そこに雛人形を飾るスペースくらいはあるんじゃないの？」

何気ない気持ちで雄人は聞いた。しかし、それを聞いた氷川丸は目を見開いて驚いた。

「とんでもない！！」

血相を変える氷川丸に雄人は驚いたが、彼女の次の言葉にその理由を理解した。

「シアトル航路の荒れ具合は、世界でも有名なんです。特にアリユーシャン列島の鼻先を掠める辺りは特に酷いです。私なんて、左右に三十度揺れた事もあるんですよ？」

「さ、さんじゅう・・・！？」

氷川丸の示した数字に雄人は絶句する。三十度といえば、それは猛烈な揺れである。この位の傾斜になると、立っている事さえ難しい。無論、優雅な船旅など期待できよう筈もない。

「プロムナードデッキの手摺が波を受けてひしゃげたり、一等ラ

ウンジのグランドピアノがひっくり返ったりもするんですから。波が煙突の中に入った時は、さすがに肝を冷やしました」

氷川丸が語る航海の様子を聞き、雄人は言葉を失う。初任務で通った南の海しか知らない雄人には想像もできない過酷な状況だった。

「そんな感じですから、船内に雛人形を置くんなんて事はできません。置いてたとしても、ひっくり返ってしまいます」

「そうだね・・・」

自身の想像を遙かに超える話に雄人は返す言葉も無くただ頷く。そこで会話が一度途切れ、無言の時間が訪れた。景色を眺めるだけの静かな時間が流れていく。

パラオはトラックと同様、日射量に恵まれた熱帯の土地である。しかし、その景観にはどこことなく日本を思わせるものがあつた。

その一つが、松である。船から見る島々の海岸線には、どこも松の木が並んでいた。駿河の景勝、三保の松原を想起させる風景にここが内地ではないのかと思う者もいた。

逆に、この地独特の景物もある。それが、奇妙な形の岩の群れだ。

停泊中の船から周囲の島々を望むと、その周りに点在するものが見える。よくよく目を凝らすと、それらが海面から頭を出した岩だという事が分かる。荒々しい岩肌は洗練された美しい景観の中で一種のアクセントとなっている。

面白いのは、その形だ。海面から突き出た岩は、殆どがキノコの

ような、根本の括れた形をしている。元々は山なりの形をしていた岩が、波に洗われている内にキノコ形になったのだ。愛らしい見た目をした岩たちは、自然が生み出した豪快な彫刻作品なのだ。

湾内の風景はどれも特徴的でいくら見ても飽きがこない。しかし風景ばかり見ている訳にもいかない。彼らには仕事があるのだ。

入港後、患者受け入れ準備と小休止に数時間を費やしてから「氷川丸」は患者の収容を開始した。

栈橋に横付けした船へと負傷者が担ぎ込まれていく。軽傷者は舷梯から、動かせない重傷者はデリックを使って収容する。一度目の航海を経て、乗組員たちも作業に慣れてきていた。二人掛かりで担架を運ぶ際の息もぴつたりと合っている。患者は入港日から翌日にかけて全員収容された。

患者収容を終えた次の日は、全ての乗組員に外出が許可された。押し合いへし合い、乗組員たちは競って上陸していく。

日本の委任統治領となった南洋諸島の中でも、パラオには多くの人々が移住しており、その人数は二万人を超える。そして、このパラオは昔から艦隊の休養地として有名であり、島内の娯楽施設はトラックのそれを遙かに上回っていた。

栈橋に横付けした「氷川丸」から舷梯を伝って上陸した兵士たちは白浜青松を横に見ながら島の大通りへと足を向ける。きれいに舗装された道路が真っ直ぐに延びる大通りは、いわゆる商店街であった。左右の歩道に連なる建物には衣服や酒など店の売り物を見す看板が下げられている。通りは島に住む人々の活気で溢れ、よく賑わっていた。

ここで一部の兵士が店に入り、買い物に興じだす。しかし大部分の兵士は大通りでは立ち止まらずに一本路地を入った裏通りへと向かった。

裏通りはレストランやカフェが集まる歓楽街であった。どこからともなく流れてくる美味しそうな匂いが鼻をくすぐる。道の所々にアイスクリームを食べ歩く人の姿が見える。食べ物、特に甘い物に飢えていた兵士たちはカフェや茶屋に押し寄せる。たちまち人の山ができた。

甘い物をたらふく食べた兵士たちは、ここでようやく表通りに戻って店を覗く。通りに並ぶ店々では、衣類や酒、菓子など内地では既に配給制となってしまうている物品が自由に買えた。戦争が始まってからも、南洋諸島では戦前とほとんど変わらぬ生活がのんびりと続けられていた。

夕日が沈む頃、上陸と買い物を中心行くまで楽しんだ兵士たちが戻ってくる。誰も彼も、上機嫌な様子だった。

「雄人さん、上陸中に何かいい事でもありましたか？ 何だかとても幸せそうな顔をしています」

帰船後、氷川丸と話していた雄人は彼女にこう聞かれた。

「そんな顔してる？」

「ええ。とつても」

氷川丸がそう答えると雄人は苦笑した。

「それほど大きな事でも無いんだけどね。島で甘い物を沢山食べられたから」

「甘い物、と言いますと？」

「アイスクリームに蜜豆。あ、御団子や御饅頭もあったね」

「・・・他には？」

「内地で食べられるお菓子は、大体あったよ・・・って、氷川丸？」

氷川丸の質問に答えていた雄人は、ふと鋭い視線を感じて言葉を止めた。見ると、氷川丸がどこか恨めしげに雄人を見つめて・・・いや、睨んでいた。

「氷川丸？」

「・・・ずるいです」

「え？」

「ずるいです！」

がしっ、と氷川丸は雄人の両肩を掴んだ。

「どうして私にも買ってきてくれなかったんですか！ 雄人さんだけ美味しい物を食べてくるなんてずるいですっ！ 私だって甘い物は大好きなんですよ！」

「ちよっ・・・、落ち着いて！」

がくがくと自分の肩を揺らす氷川丸を雄人はどうにか宥めさせる。

「いきなりどうしたのさ。氷川丸」

猛烈に揺すられて若干くらくらする頭をいたわりながら雄人が聞く。氷川丸は詰問するような口調で言う。

「どうして雄人さんだけ甘い物をたくさん食べてきたんですか。私もアイスクリーム食べたかったです。なんで買ってきてくれなかったんですか」

「・・・と、言われてもねえ・・・」

雄人は困ったように頭を掻き、それから

「買ってきてても良かったけど、それでも多分氷川丸は食べられなかったと思うよ」

「どうしてですか」

「この暑さだもの。船に持って帰るまでに溶けちゃうと思うよ」

無言。

氷川丸は最初、「しまった」という風な表情をし、それからそんな簡単な事にも思い至らなかった事を恥じるように顔を赤くした。

「・・・雄人さん」

「なに？」

「すみません。理不尽な事を言ってしまった。少し取り乱してしまいました」

「ううん。気にしないで」

少しどころじゃないよ、という心の声は胸の内にしまっておく。

「僕の方こそ、何もお土産買ってこれなくてごめんね」

「いいえ。気になさらないで下さい。雄人さんのお話が聞けるだけで私は楽しいですから」

氷川丸が笑みを浮かべる。さっきまで物凄い剣幕で雄人を責め立てていたとは思えない変わりぶりだ。

その変貌に内心で驚き半分、恐れ半分しながら雄人は適当に返事をしておいた。

翌日の六日、「氷川丸」はパラオを出航し、トラックへの帰路についた。「なるべく速やかにトラックに帰投すべし」という司令部からの命令が、「氷川丸」に早目の出航を促した。

賑やかなパラオの街を惜しみながら「氷川丸」は島をあとにした。

<第十二話>二度目の航海（後書き）

作者「2011年最初の投稿です。皆さん、今年も宜しく願います」

青葉「あけおめ……。って言うには、もう遅いね。元旦から二週間も経っちゃってるし」

氷川丸「鏡開きも終わってしまいましたしね。むしろ、この土日はセンター試験です。作者さんも、今年の春からは受験生でしたっけ？」

作者「そうだね。あー、今から憂鬱だなあ……」

青葉「早めに決まればいいね」

作者「そうである事を祈るよ。来年の冬休みが勉強一色というのは、回避したい」

氷川丸「冬休みといえば、今年は何をして過ごしたんですか？」

作者「郵便局で年賀状配達のアルバイトをしたよ。中働きだけだね」

青葉「へえ。どんな事したの？」

作者「集められた年賀状を、家ごとに仕分けていく。それを『組立』って言うんだけど、結構大変だったよ。機械で大体は分けられているから楽ではあるんだけど、同じ苗字の家が並ぶとややこしい」

青葉「うわあ。私には無理だ」

作者「もし間違えたら、その家には元旦から他人の年賀状が届く事になるからね。下手はできないよ」

氷川丸「責任重大ですね」

青葉「大変だねえ……。さて、んじゃそろそろ終わらせようか」

作者「そうするかな。二人とも、頼むよ」

氷川丸「はい。この作品を読んでくれる全ての方に心よりの感謝を申し上げます」

青葉「意見・感想もよろしくね」

<第十三話>ラバウル入港

パラオでの患者收容任務を果たし、トラックへの道を急いでいた「氷川丸」だったが、その道中で第四艦隊司令部から彼女へ追加の命令が下された。曰く、トラックへの帰投を取り止め、ラバウルへ向かうようにとの事だ。「氷川丸」は針路を変更し、ラバウルへと触先を向けた。

ここで、これまでの戦況の流れを整理しておきたいと思う。

昭和一六年十二月八日に開戦した太平洋戦争は、日本軍の真珠湾への奇襲攻撃とマレー半島への上陸によって火蓋を切った。開戦二日後の十二月十日には、「マレー沖海戦」と呼ばれる海戦が勃発し、海軍航空隊の陸上攻撃機が英国東洋艦隊の戦艦二隻を撃沈する大勝利を収めた。

同年中に日本は香港やグアムの攻略に成功し、年が明けてからは更にマニラやシンガポールも手中に収めた。シンガポール陥落の際、陸軍司令官の山下奉文中将が「イエスカノーか」と降伏を迫ったという話は有名である。開戦から数ヶ月。かつて聖徳太子が「日出ずる処の国」と表したように、昇りゆく朝日の如き勢いで日本軍は破竹の快進撃を続けていた。

「氷川丸」がこれから向かうラバウルも、日本軍の猛烈な進撃の中で落とされた拠点の一つである。しかし、このラバウルは単なる拠点の一つではなかった。ニューギニア島の東に隣接するニューブリテン島。ソロモン海に面したこの島の北端に位置するラバウルは、戦略上極めて重要な価値を持つ、言わば扇の要のような存在であった。

ラバウルが戦略上大きな意味を持っている理由は、その地理的環境にある。ラバウルが位置するニューブリテン島は、西にニューギニア、南にオーストラリア、東にソロモン諸島を臨む環境にあり、南洋諸島の中心のような場所だ。ここを取れば、それらの地点への絶好の攻略拠点となる。日本としては、是が非でも落としたい場所であつた。

一方、米軍にとつてもラバウルは価値のある存在だつた。ラバウルの北には、日本海軍の前線基地であるトラックがある。その距離は千五百キロほど。アメリカがここを手に入れる事ができれば、敵の喉元に刃を突きつけるも同然の状態となる。

また、ラバウルには大艦隊が停泊できるほどの大きさを持つた港があり、飛行場の建設に適した平地もあつた。充実した艦隊泊地と飛行場を構築する事ができるラバウルは前線基地として大きな価値を持っていた。

つまり、ラバウルは日米両軍にとって敵拠点への攻略の足掛かりとなる、絶対に無視できない土地なのだ。日本は早期にここを攻め落とす事を考え、第一航空戦隊（空母「赤城」「加賀」）、第五航空戦隊（空母「翔鶴」「瑞鶴」）、そして護衛の第三戦隊（戦艦「比叡」「霧島」）を中核とした艦隊を派遣して攻略にあたつた。前に「氷川丸」がトラックに入港した時、出撃を見送つた艦隊はこのラバウル攻略のためのものだった。後に空母「飛龍」「蒼龍」から成る第二航空戦隊も合流し、真珠湾攻撃と同様の布陣で陸軍の上陸を援護した。投入した兵力の規模から、日本軍が如何にラバウル攻略に熱意を燃やしていたかが想像できる。

機動部隊の強力な援護の下で上陸した陸軍は現地のオーストラリ

ア軍を瞬く間に撃破。一月二三日にはラバウルの占領に至った。日本軍は直ちに基地の設営に乗り出した。この地に置かれた航空隊こそが、後に「ラバウル航空隊」としてその名を轟かせる部隊である。精強をもつてなるラバウル航空隊からは多くのエースが生まれた。「大空のサムライ」の著者、坂井三郎もその一人である。最終的に終戦の日までラバウルが連合軍の手に落ちる事はなかった。

「氷川丸」がラバウルへの行程にある最中も、ラバウル周辺では戦が起こっていた。

ラバウルを陥落させた日本軍はニューギニアへの進攻を開始。三月八日には東岸のラエやサラモアを占領した。それに対して敵も黙っている筈はなく、十日には連合国軍の爆撃機がそれらの地域への空襲を行い、輸送船四隻を喪失、軽巡「夕張」などが損傷する損害を受け、死傷者も多数出た。「氷川丸」がラバウルに到着したのは、そうした時期だった。

入港した「氷川丸」を迎えたのは、もくもくと噴煙を噴き上げる活火山だった。港からもよく見える位置に一つの山があり、盛んに煙を噴き出している。

「雄人さん、あの山、煙を出していますよ」

舷窓から火山を覗く氷川丸が言う。雄人は腰掛けていたベッドから立ち上がり、舷窓に寄った。

「本当だ。かなり高い所まで上がってるね」

濛々と立ち上る噴煙を眺めながら雄人が言う。

「・・・噴火したり・・・しないですよね？」

おずおずと氷川丸が聞く。

「怖いのか？」

「・・・はい」

「僕は自然学者じゃないから分からないけど・・・多分、平気だ
と思うよ。本当に危険な状況だったら、僕たちも入港できていない
筈だし」

「それもそうですね」

氷川丸が安堵の表情を浮かべかけた瞬間、ぶわっ、と山の頂から
煙が勢いよく噴き上がった。

「きゃっ！」

思わず氷川丸は雄人に縋り付く。その頭を撫でながら雄人は安心
させるように言う。

「大丈夫、噴煙が上がっただけだよ。噴火はしてない」

そう言つと、ようやく氷川丸は顔を上げた。そして窓の外を確認
し、火山が噴火していない事を認識すると、ほっと安堵の息を漏ら
した。

「それにしても、こうも噴煙が上がってるようだと、島の中は火山灰だらけだろうなあ。ここに配属された人たちは大変だ」

窓の外を眺めながら雄人が呟く。断続的に立ち上る噴煙を見ていれば、島内に火山灰が降り積もっているであろう事は容易に予想がついた。

その予想は見事に当たった。入港翌日に上陸の機会を得た雄人はラバウルの街を散策する事にした。しかし、パラオの賑わいとは正反対にラバウルの街には何もなく、一面灰にまみれた風景が広がるばかりだった。民家の屋根はもちろん、並木の葉の上まで灰色に覆われている。

おまけに歩いている最中でも空からは火山灰が降り注ぎ、風が吹けば地上に積もった灰が舞い上がる。とても楽しめるものではない。

さらに間の悪い事に、雄人が道を歩いている所へトラックが走ってきた。歩くだけで軽く灰が舞う状況でトラックが通るかかったら、どうなるかなど火を見るよりも明らかだ。案の定、雄人は嵐のように巻き上がった灰に襲われた。結局、見るものも無く灰を被っただけでこの日の上陸は終わった。

ラバウルの攻略は抵抗らしい抵抗を受ける事も無く済んだため、現地の病院から移送する負傷者はいなかった。代わりに、ニューギニア方面の戦闘で発生した負傷者を収容する任務が待っていた。「氷川丸」が急遽、ラバウルに回されたのも、それが主因だった。

負傷者の搬送を待つために「氷川丸」は、ラバウルに一週間ほど停泊した。その間に、敵の空襲があった。

ある日の朝の事だった。朝食を終え、一日の仕事が始まるつとずる朝八時。突然、「舷窓を閉め！」と号令がかかった。

船内に響いた号令に、しかし雄人を含めた乗組員たちはすぐには反応できなかった。皆、かかった号令の意味が理解できずに数秒の間そこに佇んだ。

だが、直後、彼らの思考を吹き飛ばすような爆音が遠雷のように轟いた。

「総員、部署前に整列！ これは訓練ではない。総員、部署前に整列！」

船内放送を通して船内に命令が伝わる。ここでようやく、乗組員たちは本当に空襲が起きた事に気づいた。全員の顔に緊張が走る。急いで身近な所にある舷窓を閉め、乗組員たちは各々の部署に集まる。

その間にも、船内の放送は外の状況と命令を伝えてくる。

「敵爆撃機が来襲。現在、基地航空隊および陸上の高角砲が応戦中」

「乗組員は船内に退避。部署前にて待機し、決して甲板に出ない事」

「不測の事態が発生した場合は患者の安全を第一に考え、行動せよ」

自身の所属部署前に到着した雄人は、それから病室へと向かった。

患者が恐慌状態に陥らないようにするためである。

しかし、それは杞憂に終わった。病室の患者たちはみんな泰然として構えており、空襲の知らせに混乱する様子もない。白衣を着ていても、彼らは日本の軍人なのだ。雄人は改めてそれを思った。

遠くから高角砲の射撃音と敵機のエンジン音、そして投下された爆弾の爆発音が聞こえる。雄人は固唾を飲んで時を過ごした。小さく丸い舷窓から見えるものは少なく、外の様子を正確には把握できない。それが余計に不安を煽る。病院船は身の安全が保証されているとはいえ、絶対のものではない。誤爆でもされた時には、防御のない病院船は大きな被害を受ける。患者の中にも、緊張の色を浮かべる者がいた。

空襲は、比較的早めに終わった。襲ってきた敵機の数が少なかったのだろう。船内放送で敵機が去った事が告げられると、船内にほっとした空気が広がった。

再び部署前に整列し、解散した雄人は真っ先に氷川丸の所へ向かった。部屋の扉を開けると、そこに彼女の姿はなかった。

「氷川丸？」

部屋に入った雄人は名前を呼んでみるが、返事は無い。氷川丸がどこへ行ったのか考えていると、突然部屋の一隅に光が生じた。光は収束し、人の形を成す。

「お帰り、氷川丸」

光が消え、現れた少女に雄人は声をかける。

「あ……ただいま、です」

呆氣にとられた様子の氷川丸が返事をする。

「雄人さんが部屋にいるとは思いませんでしたから、少し驚きました」

「氷川丸の事が心配だったから。大丈夫だった？」

雄人の問いに氷川丸は頷く。

「はい。平気です」

「どこに行ってたの？」

「船橋です。船長さんたちと一緒に、空襲の様子を見ました。味方の大砲が何機か落としていました」

「被害は大きそう？」

「ここからでは、何とも。ですが、そう大きくはないと思います」

氷川丸の言う通り、この空襲による被害は小さなものだった。「氷川丸」は数名の負傷者を受け入れ、さらにニューギニアから搬送されてくる負傷者を待った。

数日後、ようやく負傷者を乗せた輸送船がラバウルに到着した。「氷川丸」は輸送船と接舷し、直接負傷者を収容した。迅速に患者の移送を完了させ、その日のうちに「氷川丸」はラバウルを出発し

た。ラバウル在泊中に空襲を受けた事もあり、帰路の見張りは特に
嚴重なものになった。特に、潜水艦への警戒は絶対に怠らないよう
にされた。

幸い、敵の潜水艦や飛行機に接触される事も無く「氷川丸」は無
事トラックへと帰る事ができた。

<第十三話>ラバウル入港（後書き）

青葉「今回はラバウルかあ。ラバウル航空隊って歌にもなったよね。『銀翼連ねて南の前線』って」

氷川丸「私は貨客船だから軍歌にはあまり縁が無いんだけど・・・。そういえば、軍艦の艦魂はみんな軍歌を覚えていたりするの？」

青葉「うーん、人によってまちまちな。歌うのが好きな艦魂はかなり覚えてるけど」

氷川丸「青葉はどうなの？」

青葉「私は結構覚えてる方だよ。歌うの楽しいからね。氷川丸にも今度教えてあげよっか？」

氷川丸「そうね。お願いしようかしら」

青葉「何から教えようかな・・・。やっぱり最初は軍艦行進曲だね。あれは名曲だよ。次は・・・」

作者「はいはい。話の腰を折るようで悪いけど、そろそろ後書き終わらせるよ」

青葉「むう・・・いい所だったのに」

作者「そう膨れない。後書きが終わったあとで続きをやればいいだろ？」

青葉「それもそうだね。そんじゃ、ちゃちゃっと終わらせよう！」

作者「切り換わりの早い奴だなあ・・・。まあいいか。この作品を読んでくれる全ての方に心よりの感謝を申し上げます。次回もお楽しみ下さい」

青葉「意見・感想もよろしくね！」

<第十四話>青い眼の患者

ラバウルからトラックへ戻った「氷川丸」は休む間もなく次の目的地へと向かった。今度の行き先はグアムである。

グアムは、ハワイと並び今日でも観光地として有名な場所だ。マリアナ諸島に連なるグアムは日本が統治する同諸島の中で唯一の米国領であり、太平洋戦争の開戦直後に日本軍によって攻略された。

旅行のパンフレットでよく見るような、典型的な南国のリゾートの風景が広がるグアム。紺碧の海と純白の砂浜。照りつける太陽の日差しを受け、全てがきらきらと輝いて見える。砂浜には、椰子の木が整然と並んでいる。そうした色彩豊かな場所でも「氷川丸」の赤十字は目立っていた。

元が貨客船だからか、「氷川丸」の姿はこの港に入ってもよく映える。白い船体と赤い赤十字を纏っている事により、それはさらに強まる。しかし、できる事ならもっと違った立場で巡りたかったと、この船の艦魂である氷川丸は思っていた。

今の彼女は病院船。海軍の船だ。彼女が訪れる土地の多くは、日本が占領した土地。彼女は、その土地を占領した軍隊の船としてそれぞれの土地へ赴いているのだ。

氷川丸は、その事実に一抔の悲しみを覚えていた。彼女は元々、日本郵船の貨客船。お客を乗せ、国と国とを結ぶ船である。その交通は、本来、平和的で友好的なものだ。だが、戦争という非常事態はその交通を遮断し、破壊した。交通を結んでいた両者は一夜にし

て敵同士となり、憎しみ合う関係になった。

そうした事態は、氷川丸から貨客船としての使命を奪った。彼女だけではない。世界中の客船が、その使命と誇りを剥奪された。そして、彼女たちは一様に、祖国から戦火に身を置く事を要求された。

——できれば、貨客船としてここを訪れたかったな——

グアムの景色を眺めながら、氷川丸はその気持ちを強く思った。戦争中ではなく、平和な時にここを訪れる事ができたら、どんなに良かっただろうか。つい、そう考えてしまう。

「・・・いけないな、こんな調子じゃ。今はただ、自分に課せられた任務を果たすだけ。平安丸にも、そう言ったのに」

妹の前では力強く言ったものの、やはり本心は隠せない。自嘲気味な笑みと共に氷川丸は呟く。

病院線「氷川丸」に、思わぬ患者が運び込まれたのは、そんな時だった――

「おい！ 誰か手伝ってくれ！」

患者収容作業の最中。船上の一角から声が上がった。それを聞いた手空きの数人が、すぐに駆けつける。しかし、駆けつけた看護兵たちはその場所へ着くと一斉に驚きの表情を浮かべた。

「ちよっと手を貸してくれ。俺たちだけじゃ運ぶのが難しい」

そう言った看護兵長が連れていたのは、大柄な男だった。日本人ではない。金髪碧眼の、白人だった。

「か、看護兵長・・・一体、どうしたのですか？」

啞然としていた看護兵の一人が、ようやく口を開く。看護兵長は肩を貸している白人を目で指し示しながら答えた。

「こいつが海に漂ってるのを、俺が見つけたんだ。助けたは良いが、舷梯を上げるだけでも一苦労だ。ちなみに、もう一人いるぞ」

言われた看護兵たちが舷門から海面を覗くと、舷梯につけたボートの上に、もう一人大柄な男が寝かされているのが見えた。

「とにかく、まずは服を着替えさせて診察しなきゃならん。ほら、手伝え」

日本人よりもずっと大柄な欧米人の体格に苦労しながらも、看護兵はどうか二人の白人を船内に運び込んだ。ひとまず、二人は他の患者とは別の病室に入れられる事になった。

しかし、ここでも問題が生じた。ベッドのサイズが合わないのだ。日本人の身長を基にしたベッドでは、長さが明らかに足りない。寝かせると爪先がつかえてしまうのだ。そこで、ベッドを二つ縦に繋いで全長の不足を解消した。

体格の違いは、衣服の面でも不都合を生じた。ベッドのサイズと同様に、患者用の白衣も彼らの体格に合った物を用意するのに苦労した。

一通りの事が終わった所で、診察と聴取が行われた。その結果、収容された二人はアメリカ軍の航空兵である事が判明した。彼らは乗機が墜落し陸地を目指して泳いでいた所を「氷川丸」に救助されたのだという。

敵国の兵士である二人は捕虜として「氷川丸」に収容され、日本へ移送される事になった。その間、彼らは別室に隔離収容される。病院船の院長である金井軍医大佐は捕虜に対しても丁寧な扱いをするように言った。病院船は敵味方の区別なく全ての交戦国の傷病者を救助する事が義務づけられている。例え敵の兵士であろうとも、手を尽くして介抱するのが病院船の責務であった。乗組員たちも院長の言葉は初めから心得ており、二名に対し丁寧な対応をとった。

収容された当初は不安の色を隠せていなかったアメリカ兵も、次第に落ち着いてきた。二、三日経つ頃には、だいぶ平静を取り戻していた。

負傷者とはいえ、捕虜という位置付けなので、彼らの病室の前には見張りが立たされる。ローテーションを組んで、毎晩病室の前で番をするのだ。

今夜の担当は、雄人だった。消灯後の薄暗い船内でただじつと扉を背にして立ち続ける行為はなかなか疲れる。日中仮眠を取ったにも関わらず漏れ出してくる欠伸を噛み殺しつつ、立番をする。はつきり言つて、暇だ。しかし万一の事態に備えてここにいなければならぬ。

「ふわあ・・・」

堪えきれなくなった欠伸が口から零れる。深夜の病室巡回をする足音以外に人の気配が感じられない状況。こうして立っていると、この船には自分しか乗っていない錯覚にも陥る。今、雄人の耳に入るのは「氷川丸」を動かすディーゼルエンジンの駆動音だけだった。

「本当に、僕しかいなかったりして」

誰に言うともなく、雄人は一人ごちた。言うてから、本当にそうなのではないかと思った。もちろん、そんな事はある筈がない。だが、夜の静寂は雄人の冗談じみた呟きに奇妙な現実感を持たせた。

「・・・まさか、ね。そして誰もいなくなった、なんて事は無いよね」

確認するような口調で雄人が呟く。しかし、当然のように彼の呟きに答える者はいない。

「・・・・・・・・」

どこまでも続く静寂。堪えきれなくなった雄人が溜息を零そうとした時、不意に耳元に生温かい風が吹いた。

「He went out and hanged himself and then there were none. (彼が自分の首を吊り、そして誰もいなくなった)」

「うわあっ!?!」

「しーっ!」

耳元に囁かれた声に驚いた雄人が大声を上げるのを誰かが咎める。見ると、三つ編みを揺らした少女が人差し指を口の前にあてて注意を促していた。

「大声出したらダメです、雄人さん。患者さんが起きちゃいますよ」

その容姿と声にようやく相手を認識した雄人は大仰な溜息をついて言った。

「なんだ、氷川丸か。驚かせないでよ・・・」

「雄人さんが驚きすぎなんです。雄人さんがあまりに大きな声を出すので、私まで悲鳴を上げそうになりました」

「そりゃ驚くよ。深夜の、誰もいない船の通路で、いきなり耳元に囁かれたら誰だって腰を抜かすさ」

「そうですか？」

「そうだよ。立場が逆だった時の事を考えてみてよ」

氷川丸は十秒ほど想像を巡らし、それからやにわに顔を青くし、

「確かに・・・怖いです」

「でしょ？」

「すみません・・・。ほんの悪戯のつもりだったのですが・・・」

申し訳なさそうに謝る氷川丸。と、部屋の扉が出し抜けに開いて白衣を着た米兵が顔を出した。

「通路から大きな声が聞こえたが、何かあったのか？」

いきなり開いた扉に、驚きの声を上げそうになるのを懸命に堪えている二人に構わず、米兵は質問する。雄人も英語の心得はそれなりにあったが、米兵の発する英語は訛りが強く、何を言っているのかさっぱりだった。

「Well...」などと言って誤魔化す雄人の様子を見て取った氷川丸が、すかさず耳打ちする。

「この人は、通路で大声が聞こえたけれど何かあったのかと聞いています」

質問の内容を理解した雄人は、平静を取り戻して米兵に答えた。

「寝ぼけてふらついていた患者が、巡回中の乗組員とはち合わせたんです。安眠を妨げてしまい、すみません」

まさか普通の人間に対して、艦魂に驚かされて大声を出したとは言えない。雄人はとっさに思いついた答えを返した。しかし、当然というべきか米兵は雄人の返事の内容を訝しむ事もなく、言葉を返した。

「いいや、気にしないでくれ。どうせさつきから起きていたしな。陸と飛行機の上しか経験が無いからか、どうにも船の揺れつてのは慣れない。俺の相棒は、すやすや寝てやがるがな」

米兵が部屋の中を指さす。

「あの憎たらしいまでに気持ち良さそうな寝顔に、ケーキを投げつけてやりたいぜ」

「それなら、とびきり美味しいケーキを用意しましょう。この船の厨房には、日本郵船のコックがいますから」

雄人の言った「日本郵船」の言葉に米兵は耳聡く反応し、驚きとも歓喜ともつかない声を上げる。

「ほう！ NYKラインのか！ そいつはいい。最高のケーキが作れるぞ。それを独り占めできるあいつは幸せ者だな」

「ええ。羨ましい限りです」

そう言つて二人は笑う。深夜の病室に眠る患者を起こさない程度のボリウムに絞られた笑い声が、密かに船室に響く。一頻り笑い合つた後、米兵はベッドに戻つていった。

「ふう……。助かつたよ、氷川丸。ありがとう」

扉が閉まつたのを確認してから、雄人は小声で言つた。

「それにしても、よくあんなに訛りの強い英語が聞き取れたね。艦魂は世界中のどんな言語でも理解できるの？」

「まさか。艦魂同士ならば、国籍を問わずに意志の疎通ができませんが、言語は自分で学びますよ。私は貨客船ですから、主要な言語は覚える必要があつたので勉強しましたけど、あそこまで訛つた状

態では、普通は理解できません」

「じゃあ、さっきのはどうして分かったの？」

「あれはたまたま、あの人の訛り方が私のよく知っているものだったからです。アメリカ西岸、シアトル周辺のもんです」

「シアトルって、確か氷川丸の――」

「はい。私と日枝丸、そして平安丸が就航していた航路です」

雄人の言葉を肯定するように氷川丸が首肯する。

「何度も現地に行つて聞いた言葉ですから、私にとってはとても馴染み深いものです」

氷川丸の話を聞いた雄人は納得した様子で頷いた。

「ということは、彼はシアトルの出身つてわけだね。氷川丸の事も知ってるかな」

「そうかも知れませんが、でも、多分気づいていないと思いますよ。貨客船時代と違って、今の私は全身真っ白ですから」

同じく純白のナース服を翻しながら、氷川丸が言う。確かに、今の『氷川丸』の外観からは、貨客船である頃の姿を想像するのは難しい。あの米兵が『氷川丸』の存在を知っていたとしても、この船がそうである事には気がついていないだろう。

「もしもこの船が『氷川丸』だと知ったら、驚くだろうね」

「ふふっ。そうですね」

真夜中の船内に、青白く照らされた笑い声がそつと響いた。

余談だがその後、この船が「氷川丸」だと知った米兵はその変わりぶりに驚き、また故郷に縁ある船に救助された事に因縁めいたものを感じたという。

朝まで病室の番をしていた雄人は、起床ラツパの音が鳴る頃にその任務から解放された。重い瞼を擦りながら雄人は自身の寢床である船倉・・・ではなく、上層の一等客室へと向かった。

空き部屋とされている一室の扉を開けると、案の定そこには一人の少女がいた。室内に二つ置かれているベッドの片方、少女の腰掛けていない方へと雄人は迷わず歩み寄る。

「氷川丸、ベッド借りるよ・・・」

丁寧にベッドメイキングされたベッドにぼすんと倒れ込み、半ば事後報告気味に雄人が言う。そのだらしなさに怒るでもなく、氷川丸は「どうぞ」と優しく応じる。

すぐさま寝息を立て始めた雄人に、毛布をかけてやる。本来、雄人のような下士官や兵は船倉に設けられた多段ベッドが寢所である。空き部屋とはいえ、士官用である一等客室のベッドで眠っている所を見られたら、ただでは済まない。しかし、昼夜を問わず患者の相手で忙しい病院船の乗員には空き部屋ひとつに注意を向けるだけの

余裕はない。発見される可能性は低い。

一日の活動を始めた船内に様々な音が溢れ出す。しかし、部屋の中にはその喧噪も届いてこない。遠くに聞こえる音が、漣のように鳴っている。

氷川丸は椅子に座り本を読み始めた。一等の読書室から拝借してきた本だ。静かな寝息をたてる雄人の横で、氷川丸は黙々と読書をする。

一等とはいえ、限られたスペースしかない船の客室はそれほど広くない。その部屋の中で若い男女が二人きりという状況は、普通は意識せざるを得ない。だが、氷川丸がこの状況を変に意識する事は無かった。

氷川丸は本から目を離し、雄人の寝顔を見つめた。思えば、前にもこれと同じ構図が生まれた事があった。あれはまだ二人が会って間もない頃。船倉での寝心地に慣れず、重度の寝不足状態だった雄人に、氷川丸がベッドを貸してやったのだ。あの時も、その状況を変に意識しはしなかった。

もしかすると、自分は彼に対して深く信頼を寄せているのかも知れない、と氷川丸は思った。それも、かなり最初の段階から。今まで自覚はしていなかったが、不意にそう感じた。

日高雄人。最初はどこか頼りないようにも思ったが、今は違う。彼は自分の事をとて大切に思ってくれていて、自分もまた彼の事を大切に思っている。彼と一緒にいる時は心が安らぐし、また楽しくもある。父と慕う初代秋吉船長とはまた別の意味——もっと身近な存在として——で、氷川丸は彼に惹かれている。

——この人となら、この戦争も乗り越えられる——

眠る雄人の顔を眺め、氷川丸はそう確信した。

<第十四話>青い眼の患者（後書き）

作者「ふう……。それにしても、昨日は揺れたな」

氷川丸「東北地方で発生した大地震のことですね」

作者「最大震度7だなんて、尋常ではないよ。長野の方でも別の大地震が発生したそうだし」

青葉「宮城の地震は、マグニチュード8.8だったけ。関東大震災より大きいなんて冗談じゃないよ」

氷川丸「作者さんの住んでいる所は大丈夫でしたか？」

作者「幸い、震度4で済んだよ。停電と断水は起こったけど、揺れによる建物の被害は無かった。家の中も無事。水も電気も今日の朝には復活したし。ただ、震源地の被害の大きさには目を覆うばかりだよ……」

氷川丸「そうですね……。今はただ、被災者の方々の無事と早期の復興を祈るばかりです」

作者「同感だよ。さて、暗い雰囲気になってしまったけど、そろそろ締めようか。青葉、明るく頼むよ」

青葉「はいはいっ、任せといて！ この作品を読んでもくれる読者のみなさんに心よりの感謝を。ありがとう！ 次回もよろしくね！」

<第十五話> 激しさを増す戦火

グアムで二人の米軍兵士を收容した「氷川丸」は思わぬ事態に驚きつつも冷静に本来の任務を遂行。同地での患者受け入れと乗組員の休養上陸を行い、サイパンを経由して四月五日、横須賀へと帰還した。

横須賀で南方から收容した負傷兵とグアムで捕虜とした米軍兵士を海軍病院に引き渡した「氷川丸」は、整備と補修のため生まれ故郷の横浜船渠に入渠した。

南方での行動はやはり船体に幾分かの負担を強いるらしく、細かな損傷が見受けられた。それらの修理を行いつつ、「氷川丸」は暫しの休息をとっていた。

「ふう・・・」

船倉の二番ハッチの上に腰掛けながら、氷川丸は空を仰いでいた。彼女が入渠しているドックには屋根が無いため、空がよく見える。

所々に白い雲の見える青空はトラックやラバウルのものとは少し違うように見える。どこかという訳ではないのだが、何というか、日本の空の方がほっとできる感じがした。やっぱり、自分の祖国だからだろう。加えて、彼女が今いるのは生まれ故郷の横浜だ。氷川丸にとっては、これ以上なく安心できる環境だ。

一つ難点を挙げるとすれば、ここに雄人がいない事だった。船が整備中の現在、彼は船を降りている。恐らく、また乗組員総出の氷川神社参りに赴いているはずだ。前回のようにな残り役を押し付け

られなければ良いが――

ウウウウウツツ!!

「っ!!」

突如鳴り響いた甲高いサイレン音に氷川丸は飛び上がる。一瞬、何が起きたか分からなかった氷川丸だったが、すぐにその意味するものに思い当たった。

「空襲・・・警報・・・？」

信じられないといった表情で氷川丸は呟く。開戦以来、破竹の勢いで進撃を続ける日本軍は各地で敵を撃破している。今や東南アジアの大半は日本の手中に収まっている。そうした圧倒的有利な状況下で、日本本土、それも首都圏が爆撃されるなんて想像できなかった。

しかし、現実には鳴り響く空襲警報は迫る危険が現実のものである事を告げている。暫くして、東の空にごま粒のような点が現れた。

点は徐々に大きさを増し、何かの形を成していく。手摺を乗り越えんばかりにして空を覗き込んでいた氷川丸は、その形を見て驚愕の色を浮かび上がらせた。

「あれは・・・」

氷川丸が見たもの、それは低空から進入してくる爆撃機だった。編隊を組んで飛行するそれは、明らかに日本の飛行機とは違う形をしていた。その爆撃機の名は、B-25。ノースアメリカン社製の

双発爆撃機——アメリカ軍の、爆撃機である。

氷川丸がB-25の姿を確認した瞬間、バリバリバリッと空気を裂くような炸裂音が響いた。驚いた氷川丸が音のした方を見ると、オレンジ色の火線が隣のドッグから走り出ていた。

「氷川丸」の隣のドッグには帝国海軍の軽巡洋艦「五十鈴」が入渠中だった。「五十鈴」は狭い船渠の中からでも使用できる機関銃を発砲して侵攻してくる爆撃機を攻撃しようとしたのだ。

しかし、「五十鈴」の気概も空しく火線は全て爆撃機を逸れ、五機のB-25は悠々と「氷川丸」の頭上を通過。横浜の市街地上空へと進入していった。

「街が・・・っ!」

反対舷に移動した氷川丸は爆撃機の脅威に晒される街を見て悲痛な叫びを上げた。爆撃機は横浜では爆弾を落とさずに素通りし、空の彼方へと消えた。

横浜の街が襲われずに済んで、氷川丸はひとまず安堵の息を漏らす。だが、すぐにまた険しい顔つきに戻った。

「横浜が狙いじゃないなら、あの飛行機の狙いはきつともっと大きな街・・・という事は・・・!」

帝都、東京——

彼らの標的地に思い至った氷川丸は呆然としてその都市の名を呟いた。そして、その恐ろしさに震えた。

氷川丸の予想通り、この日関東上空に飛来したB-25の編隊は東京を空襲した。他にも、川崎や横須賀などの都市が空爆を受けた。その中で、本来は国際法で禁止されている民間人への機関銃による攻撃事件なども発生し、犠牲者が出た。新聞やラジオで伝えられる戦勝報道に酔いしれていた国民は、この突然の本土空襲に大きな衝撃を受けた。

政府は事実を隠蔽し、「敵爆撃機九機撃墜、損害軽微」という報道をした。しかし、実際は撃墜できた機体は一機も無かった。市民の中にもこの発表を疑問視する声上がり、民衆の間に不安が広がった。

昭和十七年四月十八日に起こったこの出来事こそ、後にドーリットル空襲と呼ばれる事件である。本来は陸上機であるB-25を空母から発進させるというこの作戦は、日本軍の意表を突いた完全な奇襲となった。

そしてこの空襲が、その後、日本全土を焦土とする米軍の本土空襲の第一発目であった。

ドーリットル爆撃隊の本土空襲から一週間後の四月二十五日、整備の終わった「氷川丸」は再び日本を離れた。今回の目的地はラバウルである。四月三十日、まずはトラックに到着した。

トラックで補給を済ませた「氷川丸」は五月五日、同地を出発。ちょうど、その日は端午の節句であったため、同じくトラックに入港していた「鎌倉丸」がマストに鯉のぼりを流していた。「鎌倉丸」

は「氷川丸」と同じ日本郵船の貨客船で、排水量は一万七千トンと「氷川丸」の一万二千トンより一回りほど大きい。戦前は、最高速力二十ノットを誇る豪華客船としてサンフランシスコ航路に君臨していた。開戦後はその輸送力を買われて輸送船として使用されている。彼女もまた、戦争によって本来の使命を失った一人である。

三日ほどの航海を経て到着したラバウルは、前回来た時とは大きく様変わりしていた。前回の寄港時には濛々と噴煙を上げていた火山は落ち着きを取り戻し、「花吹山」という名前までつけられていた。島内に降り積もっていた火山灰も片付けられ、綺麗な景色を取り戻している。

「これはまた・・・随分と変わったね」

「ええ・・・」

ラバウルのあまりの変わりぶりに雄人と氷川丸も驚きを隠せない。特に、雄人は前回の上陸時に灰まみれになった経験があるため余計に驚いた。

しかし、綺麗な風景とは裏腹に、この海域の状況は血生臭いものだった。

ソロモン諸島の攻略を進める日本軍とそれを阻止する米軍との戦鬪が連日起こり、負傷者が続出していた。「氷川丸」が来る直前にもソロモン海域で戦鬪が発生し、多くの負傷者が出ていた。到着した「氷川丸」は早速彼らを収容し、必要な場合には手術を行った。

また、「氷川丸」がラバウルに到着した日にはオーストラリア北東の珊瑚海で日米の機動部隊が激突。「珊瑚海海戦」と呼ばれる、

史上初の空母同士の海戦が生じた。この戦闘で日本は米空母「レキシントン」を撃沈、「ヨークタウン」を大破させたが、軽空母「祥鳳^{しょうほう}」、を喪失、大型空母「翔鶴^{しょうかく}」が大破の損害を負うと共に多数の搭乗員を失った。

「氷川丸」はこの海戦による負傷者も収容するため数日間ラバウルに停泊。合計三百人を超す負傷者を収容した。これにより「氷川丸」の入院患者数は一気に増え、廊下などにも畳を敷いて患者が寝かされた。

なお、トラック停泊中に「氷川丸」は所属を第四艦隊から連合艦隊直属へと改められた。これは、彼女の活動範囲が第四艦隊の担当する南方方面だけでなく、日本海軍が展開する全海域に拡大される事を意味している。戦闘が激しさを増し、病院船の必要性が増している事の表れだった。

そして、それを裏付ける出来事がすぐに「氷川丸」の身に降り懸かる事となる。

珊瑚海海戦の負傷者を収容した「氷川丸」は予定通りトラックへの帰還準備に入った。しかし、そこへ司令部から緊急の通信が入った。火急の任務である。

その内容は、敷設艦「沖島^{おきのしま}」が敵潜水艦の攻撃を受けたというものだった。「氷川丸」には直ちに当該海域に向かい、「沖島」の乗員を救助するよう命令が下された。

日が少し西に傾き始める頃、「氷川丸」はラバウルを出港。「沖

島」が雷撃を受けたとされる地点へと急行した。付近にはまだ敵の潜水艦が潜伏している可能性があるため、「津軽」が護衛として同伴する事になった。この「津軽」は「沖島」の準同型艦であり、いわば義理の姉妹といえた。

ソロモン海を航行中の「氷川丸」甲板。ここで、氷川丸が緊張した面持ちで波を見つめていた。

「・・・・・・・・」

氷川丸の表情は、険しい。彼女の顔には緊張の他にも恐怖を押し殺しているような色があった。

氷川丸は、海面から目を離し、自信の後部デッキにある巨大な赤十字灯へと視線を向ける。日没を迎え、本来点灯しているはずのそれは、明かりを灯していなかった。

「・・・・やっぱり、不安？」

隣から聞こえた声に氷川丸は振り向く。作業服を着た雄人が、同じように消灯したままの赤十字灯を見つめていた。

「全然平気です・・・なんて言っても、ばれますよね」

「顔が強ばってる」

「ですよね」

氷川丸が苦笑するが、それはすぐに消え入る。重い沈黙が二人の間に降りた。

薄闇のソロモン海を「氷川丸」は十五ノットを超える速度で進む。その船内は息苦しい空気に満たされていた。

病院船は、夜間航行時に赤十字灯を点灯する事が義務付けられている。しかし、今回「氷川丸」はそれを行っていなかった。目立つ赤十字灯をつけていると、一緒にいる「津軽」までが敵の目に触れ攻撃を受けてしまう恐れがあるからだ。

だが、赤十字灯を点灯しないという選択は「氷川丸」に一定のリスクをもたらした。病院船は、昼間は純白の船体に描かれた赤十字によって自身の立場を示し、夜間は赤十字灯によってそれを行う。赤十字灯に明かりを灯さないという事は、自分が病院船である事を示す手段を放棄した事になる。

それはつまり、「氷川丸」の身に危険が及ぶ確率の増大を意味している。赤十字灯を点灯していない「氷川丸」は、遠目には普通の商船と同じに見える。潜水艦からは、ただの輸送船にしか見えないだろう。赤十字灯を灯していれば避けられたかも知れない攻撃を受ける可能性もあるのだ。

それだけに、今夜の航海は非常に緊迫したものとなった。船内には厳重な灯火管制が敷かれ、船内の明かりが外に漏れないように舷窓という舷窓はすべて閉め切られた。見張りの数も通常の倍に増やされ、潜水艦に対する警戒がなされた。また、患者にはライフジャケットが配られ、万が一の事態に備えて万全が期された。

「大丈夫だよ。『津軽』が護衛についてくれるんだから」

安心させるように雄人が言うが、効果は薄い。

「僕がついてるから、ね？」

雄人が優しく肩を抱いてやると、氷川丸はようやく表情を和らげて頷いた。

弓のように張り詰めた緊張が支配する一夜を、「氷川丸」は無事に乗り切った。そして、日の出が近づく頃に「沖島」が襲撃された海域へと到着した。

「司令部からの情報によると、この辺りの筈だが・・・」

船橋に上がっている「氷川丸」院長、金井泉軍医大佐が双眼鏡を手にはく。船橋には、金井院長の他にも船長や航海士などが配置に就いている。

「船長、『沖島』はまだ見つかりませんか？」

「はい。もう少しお待ち下さい」

金井院長の問いに、「氷川丸」船長、石田忠吉が答える。

「まさか、もう沈んでしまっているのではないだろうな・・・？」

航行中に傍受した無線により、「沖島」が沈没しかけている状態だという事は分かっていた。それだけに、金井院長の気持ちもはやつていた。

その時、金井院長が待ち望んでいた報告が船橋に届けられた。

「船長、二時の方向に黒煙です！ 船が煙を出して傾いています！」

見張り台から駆け込んできた航海士の報告に、全員が弾かれたように反応する。金井院長はすぐに、「沖島」だと思った。

「船長」

「分かっています。その船に接近、漂流者を救助せよ」

「了解！」

操舵手が舵を回すと、少しの間を置いて船が針路を変える。船は黒煙を上げている漂流船へとまっすぐに進む格好をとった。

煙を出している船は、やはり「沖島」であつた。傍らには、先に駆けつけていた駆逐艦の姿もある。「沖島」は前のめりになり、艦首の甲板は波に洗われている。マストの軍艦旗は、既に降ろされていた。

「駆逐艦より発光信号です。『我、救助作業を完了せり。後刻受け取られたし』以上です」

「了解と返信しろ」

「はっ」

「・・・彼らが先に到着していて、助かりましたね」

「ええ、まったくです。彼らが来ていなければ、我々が着くまで

に命を落とした人がいたかも知れませんかね」

石田船長の言葉に金井院長が同意する。二人が話している間にも「沖島」の傾斜は刻一刻と増していく。もはや、沈没は時間の問題とみられた。

総員退艦が発令され、すべての乗組員が去った。「沖島」艦上。人っ子一人いない筈のそこに、一人の少女が横たわっていた。

この船の艦魂である少女の姿は、見るも無惨なものだった。全身は血に染まり、元は紺色だった筈の彼女の軍服を深紅に変えていた。深く裂けた右の脇腹からは、今も夥しい量の血が流れ出ている。

死を目前にし、虫の息になりながらも、沖島は意識を手放さずにいた。そんな彼女の耳に、艦橋へと続くラッタルを上る足音が聞こえた。

仰向けに倒れたまま視線だけを動かして艦橋の入口を見ると、真っ白な衣服が目に入った。純白の白衣を着込んだ少女は沖島の姿を見てたじろぐのも一瞬、すぐに彼女の身体を抱き起こした。

「大丈夫ですか？」

白衣が血で汚れるのも構わず、少女が聞く。しかし、沖島の傷が手に負えないものである事は少女も沖島自身も分かっていた。

「今、手当します」

白衣の少女は包帯を取り出すと傷口に巻き付ける。だが、溢れ出す血は見る間にそれを真っ赤に染めた。

「——こんな事しても、意味……ないよ。私は……もう、だめだから……」

消え入りそうな声で沖島が言う。少女は答えず注射器を手にし、鎮痛剤を打った。

「知ってるでしょ？ 艦魂の傷を塞いでも、船の傷は塞がらない……。包帯を巻いても、浸水は止まらないよ……。？ 私に……かまわないで……」

「それでも——」

言って、少女は一拍間を置いた。そして、自身の決意を述べるように答えた。

「それでも、私は見捨てたくないんです。……私は、病院船だから」

「……そっか」

沖島は納得したように頷くと、微かに微笑んだ。

「ありがとう」

「え？」

「さっきはあんなこと言っただけ、本当は死ぬのが怖かった……」

。一人で死ぬのが、怖かった……。でも、こうして誰かに看取ってもらえれば、怖くない……」

沖島の告白を、少女は静かに聞いていた。沖島は最後にもう一度、少女に向かって言った。

「だから……ありがとう」

その言葉を言い終えた瞬間、沖島の身体は光の粒子となって四散した。光の粒は数秒の間、朝日を浴びて輝いていたが、それもすぐに消滅した。

少女は沖島を抱いた姿勢のまま、光の粒が消えるのを眺めていたが、やがて立ち上がると淡い光を残して姿を消した。

氷川丸が「沖島」から自船に戻ってきた時、「氷川丸」の甲板は「沖島」の最期を見守る人々で埋まっていた。

氷川丸は人混みの中から雄人の姿を見つけると、その隣に入り込んだ。

「氷川丸……その格好は……」

血の付いた白衣を見た雄人は目を丸くして聞いた。氷川丸は「沖島」の艦魂に会ってきた事を告げた。

「海ゆかば水漬く屍、ですか……」

沈みゆく「沖島」を見つめながら氷川丸が言う。

「・・・雄人さんは、死ぬのは怖いですか？」

「どうしたの、急に？」

唐突に訊ねられた問いに、雄人は面食らったように聞き返す。雄人は少し考えたあと、答えた。

「そりゃあ、死ぬのは嫌だね。怖くもある」

「雄人さんも、そう思いますか？」

「もちろん。死ぬのが怖くない人なんて、そういないよ。ただ――

「ただ・・・？」

「死を恐れるからこそ、人は生きていたいと思える。死があるからこそ、生を実感できる・・・僕はそう思う」

水平線を見つめながら雄人は言った。彼の見つめる先では、朝日が半分ほど顔を出していた。

「・・・そうですね」

氷川丸は静かに頷くと、雄人と同じように水平線へと視線をやった。朝日が眩しかった。

朝日がその全貌を現す頃、入れ換わるように「沖島」は海中へ没

していった。薄れゆく黒煙が、墓標のように天に向かって伸びていった。

「氷川丸」は駆逐艦から負傷した「沖島」の乗員数十名を受け入れ、五月十五日、トラックへと帰還した。その後、「氷川丸」は二十二日に横須賀に帰港。収容した患者は、四百名を超えていた。

<第十五話> 激しさを増す戦火（後書き）

青葉「ねえ作者。ひとつ質問」

作者「ん？」

青葉「本文で『院長』と『船長』って出てきたけどさ、どうして分かれてるの？ 一人が両方やればよくない？」

作者「そうなんだけど、そうできない理由があるんだよ」

青葉「どういうこと？」

作者「それは本人に説明してもらおう。氷川丸、説明よろしく」

氷川丸「…作者さん、面倒だからって、説明投げましたね？」

作者「さあ、何のことやら…」

氷川丸「（溜息をつきつつ）…仕方ないですね。私が説明します。私が海軍に徴用された時、船だけでなく、乗組員ごと海軍に編入されたの。だから、病院船となった私には海軍の人と郵船の人が一緒に乗っているのよ。基本的には海軍側が決定権を持っているけど、航海に関する事柄だけは郵船側に決定権があるわ」

青葉「…つまり、海軍は船をレンタルして、そこで病院をやっているってこと？」

氷川丸「まあ、そんな感じね」

青葉「なるほど…。海軍としても、いちいち徴用した船に水兵を配置するだけの余裕ないしね。合理的かも」

氷川丸「そういう理由で、『氷川丸』には院長と船長の二人がいるの。金井院長は海軍の軍医さんで、石田船長は郵船時代からの私の船長さんよ。ちなみに、郵船の乗組員の身分は軍属になってるわ。…分かった？」

青葉「うん。説明ありがと、氷川丸」

氷川丸「どういたしまして」

作者「青葉の疑問を解決したところで、今回のあとがきは終わりにしよう」

氷川丸「はい。この作品を読んでいる読者の方々に、心からの感謝を申し上げます。ありがとうございます」

青葉「意見・感想あったら、遠慮なく書いてね！」

<第十六話>ミッドウェー海戦

一九四二年六月五日。その日は、日米双方にとって忘れられない日となった。ハワイ諸島の北西に位置するミッドウェー諸島。その沖合で日本とアメリカの機動部隊がぶつかり合った日である。

後にミッドウェー海戦と呼ばれるこの戦闘は、太平洋戦争のターニングポイントとなった。日本はこの戦いで四隻もの正規空母を失い、以後の戦局に甚大な影響を被った。対するアメリカは一隻の空母を失うに留まり、これを期に日米の攻守どころが逆転するようになる。

日本政府はこの惨敗を国民に伝えようとはせず、虚偽の発表を行い欺いた。大本営は、ミッドウェー海戦の戦果を敵空母二隻撃沈、味方の損害は空母一隻沈没、空母・巡洋艦一隻ずつが大破と報道した。しかし、実際の結果は前述の通りであった。

「氷川丸」は、偽りの海戦結果を横浜で聞いた。海戦から約一週間後のことだった。

ラジオから威勢の良い軍艦マーチが流れ、特徴あるアナウンサーの声が響く。そして、ミッドウェー沖での海戦と、同時に行われたアリューシャン列島への攻撃が伝えられた。

真珠湾攻撃、マレー沖海戦、珊瑚海海戦に続く海軍の勝報に「氷川丸」の船内は一挙に沸き上がる。男たちの歓声が、薬品のおいが染みつく空気を震わせる。厨房では早速赤飯が炊かれ、夕食の食卓に上った。

しかし、「氷川丸」の乗組員たちは意外なほど早く、この海戦の真相を知る事になるのだった。

「今回の任務では、患者に対して一切の質問をしてはならない。また、その場で見たものを、一切口外してはならない」

最初に違和感を感じたのは、この時だった。横須賀を出港する時、院長は訓示の中でこのように言った。

今まではこのような事は無かった。これまで、「氷川丸」の乗組員たちは患者と接する中で多かれ少なかれ、前線の様子を話に聞いていた。それは看護兵から質問する事もあれば、患者の側から語りだす事もあった。だが、今回はそれが一切禁止されるという。何かがある、と誰もが直感的に感じた。

もやもやとした思いを胸に抱きつつ、「氷川丸」は指定された目的地である柱島へと向かった。柱島は、呉にほど近い瀬戸内海に位置する島で、連合艦隊の本拠地でもある。戦艦「長門」以下、日本が誇る連合艦隊の艦艇が集う場所だ。

「氷川丸」は六月一四日の夕刻、柱島に到着した。泊地には、別の病院船が一隻停泊していた。彼女も「氷川丸」と同じように海戦の負傷者を収容するために呼ばれたのだ。

柱島にはまだ連合艦隊の船はいなかった。今日はまだ来ないか・
・そう思った時、低い汽笛の音が夕焼けの柱島に鳴り響いた。

夕日を背に島影から姿を現したのは、巨大な黒い山だった。いや、

山ではない。それは、天高く聳える檣楼を備えた戦艦だった。

その威容に、誰もが息をのんだ。「長門」が、「陸奥」が、鈍色の船体を黒光りさせながら悠然と入港してくる。曳船を従えるその姿は、王者の貫禄を放っていた。

たちまち、柱島の泊地は艦隊で埋め尽くされる。戦艦、巡洋艦、駆逐艦・・・あらゆる種類の艦艇がここに集結する。

その光景を見ながら、雄人はちよつとした違和感に駆られた。確かに、目の前に揃う艦隊は圧倒的な存在感を放っている。でも、何かが足りないような――

横を見ると、氷川丸と目が合った。彼女も、どこか引つかかる所があるような顔をしていた。

一体何が足りないのか。答えを求めてもう一度艦隊へと視線を戻した雄人は、そこに本来あるべきものが存在しない事に気がついた。

――航空母艦――

戦艦と並び日本海軍の中核を成す、洋上航空戦力。平たい甲板に小さな艦橋を載せただけの特異な外観を持つ船。多くの艦艇の中でも目立つはずのその姿が、どこにも見当たらないのだ。

日本海軍が保有する空母は大小合わせて十隻ほど。大型空母は六隻いる。そのうち二隻は先の珊瑚海海戦での消耗が激しいから今回の作戦には出ていない。とすると、今回の作戦には四隻の空母が出撃している計算になる。だが、泊地には一隻の空母も見えない。これは一体どういう事か・・・

考えられる理由は、二つあった。ひとつは、別の港へ入っているというもの。そして、もうひとつは――

出かかった考えを、雄人は無理矢理押し戻した。例え推測だとしてもそんな不吉な事は考えたくない。

その日はもう日没が近かったため、患者の収容は翌日に持ち越された。船内では薬の準備などをして明日に備えた。

そして翌日。朝から患者の受け入れが始まった。

各艦に分散収容されていた患者たちが艦載艇で「氷川丸」ともう一隻の病院船に運ばれてくる。自分たちに向かって押し寄せてくる艦載艇の群れは見慣れた光景になっていたはずだが、今日のそれは一段と数が多かった。そして、それに乗せられてやって来る兵士たちの姿もまた、これまでにないほど痛々しかった。

運ばれてくる患者は、ほとんどが担架に担がれた重傷者だった。一応、応急手当はされているが、明らかにそれでは足りない。早急に本格的な処置を施す必要があった。

しかし、処置をしようにも患者の収容で手一杯の状況では成す術がない。そうする間にも、患者は次から次へと途切れる事なく担ぎ込まれ、病室は瞬く間に満室となってしまうた。

普段の航海で収容する人数を一度にまとめたような状態に、看護兵たちはてんやわんやの騒ぎとなる。患者を運んできた他艦の乗員にも手を貸してもらい、昼頃にようやく全員の収容を完了した。

交代で昼食と休憩をとり、息つく間もなく、看護兵たちは次の作業へと移る。通路にまで溢れ出す患者の手当を行つのは、乗員総出でも簡単にはいかなかった。

「包帯持つてこーい！」

「おい、消毒液が足りないぞ！」

「くそつ、包帯が乾いて皮膚に貼り付いてやがる！ これじゃ剥がせないぞ！」

所狭しと寝かされた患者の間を、看護兵たちが手当しながら歩く。各病室は腐臭と手当に苦戦する看護兵の声とでいっぱいになり、それはたちまち船全体を覆った。

搬送されてきた患者の姿は、それまで大勢の負傷者の姿を目にした看護兵たちも色を失うものだった。患者の多くは全身に酷い火傷を負い、ミイラのように身体中に包帯を巻かれていた。燃え盛る艦内で火に襲われたのである。事は容易に想像できた。よくここまで生きてこれたと驚くくらいだ。

包帯を剥がすのも、一筋縄ではいかなかった。乾いた包帯は皮膚に貼り付き、容易には剥がせない。ゆっくりと剥がしても、皮膚や肉と一緒に剥ける。そのたびに上がる患者の悲鳴は、耳を痛く突いた。

三等食堂を改造した大病室で手当にあたる雄人も、あまりの惨状に目を覆いたくなる気持ちを必死に抑えていた。既に十人の包帯を取り替え、手当を施していたが、正直言って、包帯を取り替えて消毒する程度ではどうにもならない傷だった。

「うう・・・くそ、グラマンめ・・・来る・・・な・・・」

苦しげに讒言を言う患者は、左半身に重い火傷を負っている。左腕に巻かれた包帯は、血を吸って一分の隙も無く色を変え、赤黒く染まっていた。

雄人は結び目を解き、乾いた包帯を剥がし始めた。直後、患者が悲鳴を上げた。

「ぐあっ！」

慎重にやっつけていてもなお、皮膚が包帯にくっついて剥がれてしまう。包帯を濡らしてから剥がせば良いのだが、無数の患者を前にそれを行うだけの余裕はなく、雄人はただ謝りながら包帯を替える事しかできなかった。

丸一日にも及ぶ作業が終了した時、雄人を含めた看護兵たちは疲労困憊の状態だった。しかし、まだ彼らの任務は終わってはいない。負傷者を収容した「氷川丸」は息つく暇もなく柱島を発ち、横須賀を目指した。

数日前に通った道を、「氷川丸」は逆方向に辿っていく。船は豊後水道を抜け、現在は土佐湾沖を航行している。

鯉の漁場で知られる豊かな海を、純白の船が横切る。「氷川丸」からも、数隻の漁船が操業しているのが見えた。

患者への昼食の配膳を終えた雄人は、船尾甲板に上がった。甲板へ続く扉を開くと、潮香の混じった風が吹き込んできた。

雄人は舷側の手摺に歩み寄り、そこにもたれかかった。三々五々に散らばる漁船を、ぼんやりと眺める。

そうして幾らかの時間が過ぎ去った時、耳馴染みの声が彼を呼んだ。

「雄人さん。こんな所にいたんですか」

白衣の裾を海風に靡かせながら氷川丸が近寄ってくる。

「もうお昼ご飯の時間ですよ。どうしたんですか？」

氷川丸が言うように、今は昼食の時間であった。しかし、雄人は食堂に向かう事なく甲板でぼんやりと時を過ごしていた。

「どうにも食欲が湧かなくてね」

疲れた笑みを浮かべながら雄人は答える。その表情から、氷川丸は大体の理由を察した。

彼の食欲がない原因は、恐らく、病室の凄惨な光景にある。全身に火傷を負った大勢の患者たちが呻き苦しむ姿と常に対峙していれば、食事が喉を通らなくなるのも無理はない。

「でも、何も食べないのは良くないです。看護する人が倒れたら、どうしようもありません」

そう言つて、氷川丸は肩に掛けた鞆から包みを取り出した。それを開いて中身を雄人に差し出す。

「一緒に食べましょう。司厨室から持ってきました」

彼女が差し出したのは、おにぎりだった。丁寧に海苔を巻かれたおにぎりが解かれた包みの上に整然と並んでいる。

「これ、氷川丸が作ったの？」

「はい。炊飯器に残っていたお米を頂いてきました。お塩もちやんとふつてありますよ」

「はい、どうぞ」と氷川丸はおにぎりを一つ手渡す。食欲の湧かない雄人は最初、この申し出を断ろうかとも思ったが、人間の身体とは正直なもので、白い艶を光らせる白米を見るや腹の虫が盛大に鳴った。

「・・・それじゃあ、ありがたく頂こうかな」

照れ笑いを浮かべながら雄人はおにぎりを頬張る。無言で一個目を食べ終えた雄人は大きく頷き、舌鼓を打った。

「美味しいよ、これ」

「本当ですか？」

「うん。もう一つ貰ってもいい？」

「もちろんです」

二人は船倉のハッチに腰掛け、並んでおにぎりを食べ始めた。

「このおにぎりの作り方も、秋吉船長に教わったんです。『お客様にお出しする機会は無くとも、覚えておいて損は無い』って。他にも、幾つか料理を教わりました」

「例えば？」

「そんなに豪華なものではないですよ。余った材料を使って練習できる簡単なものです。もっぱら、三等のメニューに載るような料理です」

「えっと・・・その三等のメニューっていうのが分からないんだけど」

さらりと言った氷川丸に、雄人がおずおずと聞く。

「あつ、すみません」

氷川丸は顎に人差し指をあてながら、

「鮭の塩焼きに、胡瓜の酢の物に、他には・・・」

何品か例を挙げた料理は、どれも一般家庭の食卓に上りそうなものばかりだった。洋風料理の名前ばかりが出てくるかと思っていた雄人は、肩すかしをくらったような感じになった。

「三等の食事って、案外、庶民的なんだね」

「ええ。もしかして、客船の食事は三等までコース料理だと思つてましたか？」

氷川丸の問いに、雄人は自分の無知を恥じるように頷いた。

「てつきり、三等まで洋食づくしなのかと・・・」

「まさか！」

氷川丸は大きく手を振り否定の意を露にした。

「一等から三等まで全室コース料理にしたら、すぐに破産しちゃいますよ！確かに一等の料理は豪華ですけど、一等客の運賃だけでは収支が合いません。一等だけに限って言えば、運行するたびに赤字なんです。船全体で見て、ようやく黒字になるんです」

「そ、そうなんだ・・・」

人が変わったように力説する氷川丸に、雄人は思わず気圧される。氷川丸は更に続ける。

「一等は客船の顔。一等船室の評価が、そのままその船の評価に繋がると言っても過言ではありません。だから、一等は赤字覚悟でも豪華にします。そして、その分の埋め合わせを三等でするんです。一等と三等には、客室や料理にも大きな差があります。客船の運行を支えているのは、華やかな一等ではなく、三等なんです」

いつになく饒舌だった氷川丸は、言い終えた後で「すみません。少し話しすぎました」と恥ずかしそうに言った。

「ううん。そんな事ないよ」

雄人がフォローの言葉を入れる横で、氷川丸は気持ちを落ち着けるように深呼吸をする。二人は再び、おにぎりを食べ始めた。

「それにしても、一等と三等でそんなに差があるなんて、初めて知ったよ。てつきり、みんな美味しい料理を食べてるのかと思ってた」

「『美味しい』のは変わりません。一等は『豪華な』料理が出るだけです」

まるで三等の食事は美味しくないと言われているような気がして、氷川丸は口を尖らせる。これが穿った見方であり、雄人に悪気が無い事はもちろん彼女も分かっている。しかし、帝国ホテルと並び賞される料理の味を誇る日本郵船の客船としてのプライドが、彼女に一言いわずにはいらなかった。

彼女の口調から機嫌を損ねてしまった事を察した雄人は素直に謝る。それを聞いた氷川丸は、つまらない意地を張って彼に謝らせてしまった事を悪く思った。

「いえ。私の方こそ大人げない事を言つてしまい、すみません」

拗ねた表情から一転、青菜に塩を振ったようになる氷川丸。そんな彼女に、雄人は優しく言葉をかけてやる。

おにぎりを食べ終えた雄人は、仕事に戻るべく、腰を上げた。

「ごちそうさま。おにぎり、美味しかったよ」

「そう言ってもらえると、嬉しいです」

「それじゃ、僕は仕事に戻るとするよ。また後でね」

「はい。頑張ってくださいね」

甲板をこつこつと歩き、雄人は船内に繋がる扉へ向かう。取っ手に手をかけたところで、雄人が振り返った。

「氷川丸」

「はい」

「また作ってきてもらっても、いいかな？」

「・・・はい！」

雄人が船内に消えてからも、氷川丸はしばらくハッチの上に腰掛けていた。僅かに綻んだ口元から、呟きがこぼれる。

「覚えておいて損はない、か・・・」

かつて聞いた言葉を思い返ししながら氷川丸は一人こちる。

「船長の言ってたこと、本当だったみたい」

氷川丸はくすりと笑うと、自室へと瞬間移動した。

余談だが、その後、「氷川丸」では炊飯器に残された米がなくな

るという珍事が時折発生するようになったという。

<第十六話>ミッドウェー海戦（後書き）

作者「突然ですが質問です。明日、四月の二五日は何の日でしょうか？」

青葉「二五日？ えっと、昭和の日……は二九日だった。祝日でもないし……いったい何の日なの？」

作者「ある人の誕生日です。ヒントは、我々二人にとって身近な人、といえば分かるかな？」

青葉「えっ……それって……」

作者「そう。四月二五日は貨客船『氷川丸』が完成した日なのです！ つまり氷川丸の誕生日！」

青葉「おおっ！ おめでとう、氷川丸！」

氷川丸「ありがと、青葉」

青葉「何かプレゼントあげないとね。日高一曹も、何かお祝いしてくれるんでしょ？」

氷川丸「（少し頬を赤らめながら）うん……」

青葉「いいなあ。私も、誕生日とかお祝いしてくれる人がいたらなあ……うう……」

作者「えーと、青葉の愚痴が長くなる前に終わらせましょう。氷川丸、いいかい？」

氷川丸「あ、はい」

作者「この作品を読んでくれる読者の皆さんに心よりの御礼を。ありがとうございます」

氷川丸「ご意見・ご感想もお待ちしております」

<第十七話>戦火を忘れて

甘く香しい香りが、そこら中に満ちている。燦々^{さんさん}と照りつける太陽の下、南国の蒸し暑さと合わさって、身体にまとわりつくような甘ったるい匂いが漂う。その場にただ胸焼けを起こしそうな空気だ。

「・・・何ですか、これは・・・」

目の前にうず高く積まれた「それ」を見て、氷川丸は呻きにも似た呟きを発する。夏用の半袖のナース服に身を包む彼女は、頼に一筋の汗を走らせながら眉を寄せた。

「何って、バナナだけど」

よく熟れたバナナを頬張りながら、事も無げに雄人が答える。

「それくらい、見れば分かります。あと、物を食べながら話すのはみつともないです。やめて下さい」

氷川丸は自分の視線の先にある黄色い山を眺め、重ねて問いかけた。

「私が聞きたいのは、どうしてこんな所にバナナの山があるのかという事です」

氷川丸の言う事も、もつともだった。二人がいるのは「氷川丸」のオープンデッキ。最上層の甲板だ。そこに、どこから仕入れたのか、房に実ったバナナが大量に積まれている。その量は、バナナ問

屋でも開けそうなほどだ。

「……私、病院船からバナナ売りに転職した覚えはないのですが」

自分の船上が尋常ならざる状態になっている事に対し、氷川丸は戸惑いを隠せない。そんな彼女を知ってか知らずか、雄人は暢気に答える。

「いやあ、安かったからね。ついついみんなで沢山買っちゃったよ」

ははは、と雄人が笑う。しかし、氷川丸は笑ってられなかった。

「ははは、じゃないですよ！ 一体どうするんですか、こんなにたくさん！」

氷川丸が叫んでいる間にも、舷側からバナナの載った籠が引き揚げられてくる。また一房、バナナの山に加わった。

「まあ、まあ。そんなに怒らないで。ほら、氷川丸も食べてみなよ。美味しいから」

山から新たに取った房から一本をもぎ取り、氷川丸に手渡す。三日月形をした南国の果物は、真夏の太陽のような鮮やかな黄色をしている。その甘い芳香に、氷川丸は思わず生唾を飲み込んだ。

一口食べるなり、氷川丸は言った。

「甘い……甘くて、美味しいです」

「でしょ？」

「文句なしで美味しいです。あれだけの量を買い込む価値はありますね！」

「このバナナ、値段はどのくらいなんですか？」控えめな一口を頬張りつつ、氷川丸が聞く。

「ほとんどタダ同然だよ。二、三十本で、煙草一箱分くらい」

「日本では考えられませんか・・・」

「本当だよ。内地でバナナなんて言ったら、高級品の代名詞みたいな物だからね」

うず高く積みまれたバナナを見やりながら、二人は言う。

「氷川丸」は現在、インドネシアのセレベス島（現在のスラウェシ島）に停泊していた。ミッドウェー海戦の負傷者を横須賀に搬送した「氷川丸」は再び南方での任務に出発し、七月一日、フィリピンのダバオに到着した。

セレベス海を挟んで向かい側にあるセレベス島のメナドに寄港したのは七月の四日。錨を下ろした瞬間に、「氷川丸」は無数の小舟に取り囲まれた。

何事かと慌てた船員や海軍士官が甲板に飛び出して見下ろすと、それは島民のカヌーであった。彼らはやって来た「氷川丸」に、島で取れたバナナを売りに来たのだった。

一瞬、万一の事態を想定した船長だったが、島民がバナナを売りに来たただだと分かると、作業が完了次第、休憩にするよう命じた。停泊作業を終えた船員たちは早速、島民からバナナを買い始めた。乗組員たちは破格の安さにつられてバナナを買い込んだ。船上はたちまち果物で溢れ、冒頭の状況に至る。

「それにしても、本当に賑やかですね」

自身の周りに群がる木船を眺めながら氷川丸が言う。

「トラックやラバウルでは、こうはいきませんからね。『都巡り』の名は、伊達じゃありません」

片言の日本語を話しながら商売に勤しむ島民の姿を見て、氷川丸は楽しそうに笑った。

海軍病院船が辿る航路には、主に二つのコースがある。一つはトラックやラバウルを中心とする南洋諸島コース。そしてもう一つは、フィリピンを中心とする西南諸島コースだ。地図上でいうと、フィリピンを基準として東側が南洋諸島コース、西側が西南諸島コースになる。

西南諸島コースは、別名「都巡り」とも呼ばれている。そして、二つの航路を比べるなら、この「都巡り」コースの方が断然人気であった。理由はごく簡単だ。そちらの方が、街が華やかなのだ。

トラック起点の南洋諸島コースは、その寄港地のほとんどが海軍

の拠点だ。軍事的な性格の方が強いから、そこにある街も総じて規模が小さく、上陸して見かける顔も同じ海軍軍人が多い。

それに対して、都巡りでは、フィリピンやインドネシアの港を回る。海軍の船だから、寄るのは海軍が展開している場所である事に変わりはない。しかし、そこにある街は、トラック・ラバウル航路のそれと比べ、遙かに発展していた。

イギリス・フランスをはじめ、西洋列強の植民地である東南アジアの島々は街がよく整備されている。住民も多く、賑やかだ。これでは、都コースが人気になるのも当然である。

実を言うと、「氷川丸」はこれまで一度も都巡りを経験した事が無い。海軍は「氷川丸」の他にもう一隻、「高砂丸」という船を病院船として徴用していた。「高砂丸」はよく都巡りに行っているのに、「氷川丸」はいまだに行かせてもらえていなかった。乗組員の多くと同様に、氷川丸も都巡りに憧れていた。

そんな所に、今回の任務の命令が下った。待ち望んでいた都巡りとあつて、乗組員たちの士気は大いに上がった。シンガポール方面は日本軍の支配が決定的となっていた折でもあり、都巡りにはうってつけであつた。

そんなわけで、「氷川丸」は最前線のソロモン方面からしばし遠ざかり、華やかな都コースへと旅立ったのだ。

都巡りとはいっても、決して遊びではない。道中の寄港地の賑わい方が違うだけで、任務の重さは等しく変わらない。もちろん、そ

れを忘れる「氷川丸」乗組員ではない。そして、任務の方も「氷川丸」にのんびりと都巡りを満喫させてはくれなかった。

メナドに停泊中の「氷川丸」に、医薬品の補充を求める信号が届いた。発信者は、陸軍病院船の「松江丸」であつた。

「クレゾール石鹼液を五ガロン供給されたし・・・氷川丸、どうする？」

旗旒信号きりゆうを読んだ雄人が聞く。氷川丸は一瞬、どうしようかと悩む表情を見せたが、

「供給はできませんね。陸軍兵士の衛生管理は、陸軍病院船が責任を持つ事になっていますから」

と答えた。

陸軍と海軍は、それぞれ独自に病院船を徴用している。理由は、両者の病院船に対する認識が違うからだ。

陸軍は病院船を後方の野戦病院に移送するための手段として位置づけていた。そのため、船の設備は搬送中の応急処置が行える程度に留められており、本格的な手当はあくまで野戦病院で行うことになつていた。

海軍は、病院船を単なる患者輸送の手段とは考えていなかった。海軍は病院船を移動式の野戦病院と捉え、充実した機能を持たせた。各地を回って負傷者を収容する間にも患者の治療を行い、できるだけその場で完治させる事を目的とした。内地にまで送り返して治療するより、病院船の中で回復させた方が戦場にも早く復帰させられ

るからだ。この、一般の病院と同等の医療設備を備えている点が、海軍病院船の特徴である。

艦魂である氷川丸の意志を反映するように、「氷川丸」のマストに「供給不可」を伝える信号が揚がる。すると、「松江丸」から一隻の内火艇が下ろされ、「氷川丸」へと向かってきた。

と同時に、二人のすぐ近くの空間に光が生まれ、一人の少女が現れた。

「陸軍病院船『松江丸』艦魂の松江丸です！ お忙しい中すみません。でも、どうしても頼みたい事があるんです！」

甲板に足をつけるなり、少女は早口でまくし立てた。氷川丸は少女に落ち着くように言ってから、用件を聞いた。

「先ほど、こちらから石鹼液の供給をお願いしたのは、ご存知ですよね」

少女は頭を下げると、懇願するように言った。

「お願いです！ もう一度考えてもらえませんか？ どうしても必要なんです！」

「そう言われても・・・」

弱ったという表情で氷川丸が言い淀む。

氷川丸がこれ程までに医薬品の供給を渋るのには、理由がある。氷川丸も、できる事なら松江丸の要求に答えてあげたい。しかし、

海軍の病院船である彼女には、海軍に供給する分の医薬品しか積んでないため、できないのだ。

松江丸もこの事情は心得ているが、彼女の方も簡単には引き下がれない理由があった。

「私には、患者と船員を合わせて千人の人たちが乗っています。でも、この暑さで細菌が繁殖しやすく、お腹を壊す患者さんが多くて困っているんです。倉庫の薬品も底を尽きそうで・・・どうか、少しでもいいので分けてもらえないでしょうか？」

ちょうどその時、「氷川丸」の舷門に「松江丸」から下ろされた内火艇が接舷した。陸軍の士官服を着た人物が一人、舷梯を上ってくる。彼も、松江丸と同じことを頼みに来たのだった。

松江丸の話を聞いた氷川丸は、そういう事ならと松江丸の要望を聞き入れた。

「分かりました。薬品を供給しましょう」

「本当ですか？」

「ええ。金井院長も、その話を聞けば薬品を譲ってくれるはずですよ」

返事を聞いた松江丸は顔を綻ばせ、「ありがとうございます！」ともう一度頭を下げた。

程なくして、先ほど「氷川丸」を訪ねてきた陸軍士官が薬品箱を抱えて下船する姿が見えた。内火艇が「松江丸」に帰ったのを見届

けた松江丸は、お礼の言葉を口にとすると自分の船に戻った。

「氷川丸」の乗組員はここで上陸を許された。メナドは風光明媚な美しい場所だった。海岸には椰子の木が並び、砂浜に心地良い日陰を作っている。街の近くには標高二千メートルほどの山があり、「メナド富士」と呼ばれて親しまれている。

街自体も、きれいだった。オランダ人によって開拓された街には赤い屋根の建物が並び、南国の明るい日差しを受けて鮮やかに輝いている。街は活気に溢れ、物も豊かだった。

上陸した兵士たちは、メナドに到着した時の「氷川丸」と同じようににたちまち島民に囲まれた。様々な物を手にした島の人々は、いかにも商売慣れした風情で、覚えたての日本語を使いながら商品を売り込んでくる。それらの品物も船上から買ったバナナと同様に、信じられないくらいに安かった。

トラックやパラオで買い物した時も、日本より物価が安かったが、メナドのそれは別格だった。洋服、酒、腕時計・・・すべてが安く、夕方になって帰船する乗組員たちの手には買い物袋が幾つも提げられていた。

メナドを出航した「氷川丸」は、インドネシアの島々を巡り、患者の収容を行った。西に進むにつれて、街はどんどん華やかになっていった。

七月十九日、「氷川丸」はジャワ島のスラバヤに着いた。都巡りの寄港地の中でも、スラバヤは特に有名だった。

西の海が茜色に染まる頃、「氷川丸」は港に錨を打ち下ろした。来航した「氷川丸」を、現地の海軍病院の士官たちが出迎えた。

彼らの案内で「氷川丸」の士官は一足早くスラバヤの街に繰り出していった。ついて行けない下士官や兵は、揚々と船を降りていく背中を眺めて羨ましそうに見送った。ちなみに雄人は、後者である。

次の二日間は、半数ずつの乗員に外出が許された。スラバヤの市街地はメナドにも増して美しく、賑やかであった。馬車や三輪自動車が行き交う大通りにはたくさんの店が軒を連ね、客を呼び込んでいる。これらの商店は、午後になると午睡のために店を閉じた。

街にはまた、煉瓦造りの高層建築も建っていた。街の中心にある高級百貨店は、銀座のそれにも劣らぬ店構えだ。店内は明るく、案内嬢も愛想が良かった。

どの乗組員も華やかな街を日が暮れるまで満喫した。棧橋と「氷川丸」を結ぶ内火艇の最終便は、会社員の帰宅ラッシュのように混みあった。

「お帰りなさい、雄人さん」

舷門を上がってきた雄人を、氷川丸が出迎えた。

「荷物、持ちましようか？」

慣れた手つきで氷川丸は雄人が持つ手提げ袋を受け取る。無駄のない動作は、流石は日本郵船の客船といったところか。艦魂が見えない者がこの光景を見たら、荷物が独りでに宙に浮いていると大騒

ぎになる。しかし、黄昏時の船上はぼんやりと薄暗く、加えて甲板にいる兵士たちも互いの会話に興じているために、氷川丸が荷物を持っていても人の目につく事はなかった。

「スラバヤの街はどうでしたか？」

プロムナードデッキに置かれた長椅子に腰を下ろした氷川丸が雄人に尋ねる。いつからか、雄人が上陸する度にその話を聞くのが氷川丸の楽しみになっていた。

「今日は司と一緒に街を回ったけど、噂通りだったよ。お店はたくさん並んでいるし、立派な建物もある。とても賑やかだった」

「司さんというと・・・以前、氷川神社のお参りに行った時に話していた、吾妻一曹ですか？」

「うん。司のやつ、もの凄くはしゃいでね。主計長に給料を前借りしてまで買い込んでたよ。来月の手当は、一円あれば良い方じゃないかな」

「どれだけ買ったんですか、吾妻一曹は・・・」

「途中で持ち切れなくなったから、近くの水兵に小銭を握らせて船まで届けさせていたよ。あの荷物、ちゃんと届いたのかな？」

「そういえば、昼過ぎに他の船の水兵が、届け物があると言って訪ねてきたような・・・。軍事郵便でもないのです、詳細が分かるまで院長が管理しておくと言っていました」

「じゃあ、今頃は・・・」

雄人が言いかけた時、遠くから「他の船の乗員に迷惑をかけるな、馬鹿者！」という怒号が聞こえ、拳骨の音が響いた。

「やっぱり……」

「ところで、雄人さんは何を買ったんですか？」と氷川丸が聞く。

「丁寧に梱包されているようですが……割れ物ですか？」

「うん。綺麗な置物があったから、家族へのお土産にしようかと思つて」

手のひら大の小袋を取り出して雄人は言った。「氷川丸の分もあるよ」

「本当ですか？」

喜色を滲ませる氷川丸に雄人は買ってきた物を手渡した。

「きれい……。これは——桜貝、ですか？」

雄人が氷川丸に渡したのは、貝を細工した手芸品だった。薄い桃色をした貝殻を五枚、星形に繋ぎ合わせたキーホルダー。自然の素材をそのまま使った品だ。

「海辺の民芸品店で買ったんだ。船乗りのお守りらしいよ。なんでも、これを持っていれば絶対に遭難しないとか」

雄人が店員から聞いた話を伝える。

「きれいで、素敵なお守りです。雄人さん、ありがとうございます」

嬉しそうな氷川丸の笑顔を見て、雄人も頬を緩める。その後も二人は夕食の時間になるまで会話に花を咲かせた。

「ん、もうこんな時間か」

夕餉の時刻を告げるラッパを聞き、雄人が腰を上げる。

「氷川丸、話の続きは食後でいいかな？」

「はい。構いませんよ。部屋で待っていますね」

「分かった。それじゃあ、また後で」

そろそろと食堂に向かう人の列に混ざり、雄人も船の中に入る。氷川丸も、自分の部屋へ転移する。

彼女が消えたあとの甲板で、淡い光の粒が夕陽を受け、きらきらと輝いた。

<第十七話>戦火を忘れて（後書き）

作者「実は、昨日でこの作品を書き始めて一年になりました。いやはや、早いものです」

氷川丸「一周年ですか。おめでとうございます」

作者「月一回のゆつくりとしたペースですが、こうして一年間続けてこられたのも読者の皆さんのお蔭です。ありがとうございます」

青葉「物語を最後に完成させるのは、読み手である……ってね」

氷川丸「青葉、良いこと言うじゃない」

青葉「でしょ？　どっかで読んだ本の受け売りだけど」

氷川丸「やっぱり……そんな事だろうと思ったわ」

作者「では、今回のあとがきはこの辺で。いつも通り締めるよ」

氷川丸「分かりました。この作品を読んでくれている読者の皆さんに、心からの感謝を申し上げます。これからも、よろしく願います」

青葉「意見・感想も募集中だよ！」

<第十八話>ガダルカナル争奪戦勃発

「氷川丸」が都巡りを楽しんでいる最中の一九四二年八月八日。この日、太平洋では日米の戦争が新たな局面に突入していた。

ソロモン諸島の一つ、ガダルカナル島。房総半島の二倍ほどの大きさの密林の孤島に、夜闇に紛れて近づく影があった。

漆黒の海を、それよりもなお黒い影が進む。一隻、二隻、三隻・
・列を成して進む船の舳先には、月光を受けて金色に輝く紋章がある。彼女たちの誇りであり、自己を示すもの。皇軍艦艇の証である菊花紋章だ。

第六戦隊旗艦、重巡洋艦「青葉」の艦魂、青葉は、艦前部にある第二主砲塔の上から暗い海面を眺めていた。

「巡洋艦戦隊だけで敵泊地に突っ込むなんて、三川って司令官さんもなかなか剛胆だねえ」

先頭を進む巡洋艦「鳥海」に座上する司令官の事を考えながら、青葉が呟く。青葉は艦隊全体の二番艦として、第八艦隊旗艦「鳥海」の後に続いて航行していた。後方には姉妹艦の「衣笠」や準同型艦の「古鷹」型重巡が続く。

艦隊は二六ノットの高速でソロモン水道をガダルカナル島に向け航行していた。陣形は「鳥海」を先頭にした単縦陣。七隻の巡洋艦、それに一隻の駆逐艦が整然と並んで進軍する。

艦内には、既に戦闘用意が下命されている。主砲、魚雷ともにい

つでも撃てる状態だ。あとは、敵が現れるのを待つばかり・・・

サボ島を掠めるように通過した艦隊は、いよいよガダルカナル島泊地に突入する。旗艦「鳥海」から、「全軍突撃せよ」の命令が下る。

「さあて、始めますか」

不敵な笑みを口元に刷き、青葉が言う。同時に、艦橋の見張り員が敵艦発見の報告を叫んだ。

直後、周囲を包んでいた夜の闇が強烈な光に引き裂かれる。上空で待機していた偵察機が照明弾を投下したのだ。

暗闇の中、無骨な敵艦のシルエットが浮かび上がる。露あになった影に向けて、青葉は軍刀を抜き放った。鋭い切っ先が敵艦に突きつけられる。その動作に合わせて、「青葉」に搭載された連装三基六門の二〇・三センチ砲が敵艦をピタリと照準する。

先頭を進む「鳥海」の主砲が、火を放つ。それに続くように、青葉も叫んだ。

「夜戦と雷撃は帝国海軍ウチラの十八番おはこ！ 帝国海軍の実力、見せてあげるよ！」

青葉が軍刀を振り下ろすと同時に、「青葉」の主砲が火焰を噴き上げる。轟音と爆風が艦上を包み込み、静かな夜の海を一瞬のうちに戦場に変えた。

「――で、それからどうなったの？」

話の先を促すように氷川丸が聞いた。聞かれた青葉は、待つてましたとばかりに口を開いた。

「いや、もう、そこから先は切った張ったの大立ち回り！ 飛び交う砲弾、疾走する魚雷！ あっという間に敵重巡四隻を撃沈！ 帝国海軍の大勝利だよ！」

大仰な身振り手振りを交えて答える青葉は、非常に興奮した様子でいる。口調も、少しばかり芝居がかっている。

それもそのはず。青葉は今、第一次ソロモン海戦の話をしているのだ。こうして氷川丸に海戦の様子を語り聞かせている間にも、その時の事を思い出し、自然と言葉に力がこもる。

第一次ソロモン海戦とは、一九四二年八月八日に日米海軍の間に起こった戦闘である。

ラバウルを手中に収めた日本軍は、ソロモン諸島への足掛かりとするため、三月下旬にブーゲンビル島やショートランド諸島に前線基地を設立。七月には、ガダルカナル島に飛行場の建設を開始した。

ところが、飛行場の完成が目前に迫った八月七日、ミッドウェー海戦を制した米機動部隊が来襲。上陸してきた二万の米海兵隊に対し、飛行場を守る日本軍は三千名ほど。しかもその大半は飛行場建設のための部隊であり、実際に戦える兵力は三百程度であった。圧倒的な兵力差に日本軍は為す術もなく、飛行場は米軍の手に落ちた。

この知らせを受けた第八艦隊司令官、三川軍一中将は旗艦「鳥海」以下、巡洋艦六隻、駆逐艦一隻を率いラバウルを出撃。夜陰に乗じてガダルカナル島に忍び寄り、敵艦隊に夜襲を敢行。巡洋艦四隻撃沈の大戦果をあげた。

自慢げに語られる青葉の武勇伝を、氷川丸はアイスティーを片手にのんびりと聞いている。時々、適当な所で相槌を入れてやる。雄人の方は、男児の性^{さが}が、少々興奮した様子で話に耳を傾けている。

残暑の厳しい九月の初旬。都巡りから帰った「氷川丸」は、再びラバウル航路行きを命じられた。米軍のガダルカナル島上陸をきっかけに急増する負傷者を収容するためである。ラバウルに入港した「氷川丸」は、そこで懐かしい顔と出会った。「青葉」である。

巡洋艦「青葉」は第一次ソロモン海戦の後、姉妹艦たちと共にソロモン海の哨戒任務に当たっていた。ラバウルには、補給のために停泊していた。

船橋から入港作業を見守っていた氷川丸が「青葉」の姿を見つけるのとほぼ同時に、青葉も「氷川丸」の船影を認めた。青葉はすぐさま、「氷川丸」へと瞬間移動した。

およそ半年ぶりの再会を、二人は喜び合った。そして、青葉の提案により雄人も呼んで三人で話をする事になったのだ。

青葉の話を聞きながら、氷川丸は内心、少しほっとしていた。というのも、彼女は青葉のことを心配していたからだ。

第一次ソロモン海戦で、日本海軍は敵艦隊に対して圧倒的な勝利

を収めた。しかし、こちらは無傷とはいかなかった。作戦の帰途、重巡「加古」が敵潜水艦の雷撃を受けて撃沈されたのだ。「加古」は古鷹型重巡の二番艦であり、「青葉」とは準同型艦の関係にあたる。青葉にとつては、いわば義理の姉妹といえた。事実、青葉は彼女のことを「義姉さん^{ねえ}」と呼んで親しんでいた。

ラジオのニュースで第一次ソロモン海戦の内容を耳にしていた氷川丸は、青葉が義姉を失った悲しみに打ちひしがれていないか気にかけていた。

だが、それは杞憂に終わった。調子よく語る青葉の様子は、常と変わる事のない陽気で明るいものだ。それを確認した氷川丸の口から、小さく安堵の息が漏れる。

「ん？ どしたの、氷川丸？」

氷川丸の表情の変化に気づいた青葉が聞く。

「ううん。何でもない」

「そう？」

首を横に振った氷川丸に対し、青葉はそれ以上は追及しなかったが、少し間を置いてから言った。

「・・・まあ、もう一ヶ月経ったからね。私もある程度、心の整理はついてるよ」

自分の心の内を読まれたような言葉に、氷川丸は驚きの表情を浮かべる。青葉は目を丸くする親友の顔を見つめながら言う。

「氷川丸のことだから、きっと私が落ち込んでないか心配してくれてたんでしょ？ そりゃ、私も最初の一週間はへこんだけど、いつまでもそんな事してる場合じゃないからさ」

「それに・・・」と青葉が続ける。

「私がへこんでる時も、古鷹義姉さんは涙を見せなかった。それどころか、私を慰めてくれた。私なんかよりも、義姉さんの方がよっぽど悲しいはずなのに。一番辛い義姉さんが涙を堪えている時に、私が泣いてなんかいられないよ」

青葉の答えを聞いた氷川丸は、一言いった。

「・・・強いね、青葉は」

「そうかな？ そんな事ないと思うけど」

「ううん。そうよ。私だったら、そんなに強くはいられない。もし、姉妹を失うような事があつたら、きっと取り乱して立ち直れなくなる」

「大丈夫だよ」

力強く、青葉が言う。

「何のために海軍わたしたちがいると思う？ 氷川丸の妹は、絶対に米軍に襲わせたりしないよ。それが、海軍の役目なんだから」

口元に微笑を湛え、青葉は優しく言う。それにつられて、氷川丸

も口元を緩めた。

「うん。ありがと、青葉」

「どういたしまして。そんじゃ、話を戻そつか。久しぶりに会ったのに、しみりした話じゃつまらないからね。明るく楽しく、おしゃべりしよう！」

そう言つて、青葉は中断していた海戦の話を再開する。三人の楽しい話は、その後、日が暮れるまで続いた。

「青葉、元気そうで良かったです」

復路の洋上。朝の甲板を雄人と散歩しながら氷川丸が言った。

ガダルカナル島方面の負傷者を収容した「氷川丸」は、トラック経由で帰国の途に就いた。好天に恵まれた航海は順調に進み、明後日には横須賀に到着できそうだった。

横須賀到着を前に、今日は船内の患者を海軍病院に転院させる準備などをする予定だが、昨日深夜の当直だった雄人は少し遅れてその作業に参加する事になっている。そのため、こうしてのんびり氷川丸と甲板を歩いていられるのだ。

「氷川丸、青葉の事かなり気に掛けてたからね。安心したでしょ」

「はい」

とりとめもない話をしながら、二人は船首からプロムナードデッキを通り船尾甲板へと歩く。二人は楽しげに言葉を交わしていたが、船体中央部——ちょうど、煙突のあるあたり——を通った時だけ会話が途切れた。煙突脇に設けられた、火葬場の悪臭が流れてきたためだ。プロムナードデッキは火葬場がある最上層の甲板よりも一つ下に位置するが、独特の饅えたような臭いはそこにまで漂ってきていた。

全長一六〇メートルほどの「氷川丸」の船体は、話しながら歩いていると意外とすぐに端まで辿り着いてしまう。船尾までやって来た二人は、休憩がてら、海を眺めた。

船尾には、日の丸の旗が翻り、風を受けてはためいている。その向こうでは、白い航跡が尾を引いてのび、青い波に溶けていく様子が見える。

「今日は波も高くなって、良い天気だね」

穏やかな海面を眺めながら雄人が言った。

「そうですね。日差しもそれほど強くありませんし、患者さんたちにとっても過ごしやすい日です」

ちょうど朝食の時間と重なっているからか、甲板上に人影はほとんど無い。そのため、二人は気兼ねなく話す事ができた。

話題に尽きる事なく二人は会話をする。だが、その時間を壊すように見張り員の絶叫が船上に響いた。

「左舷後方！ 潜水艦！」

「っ！？」

二人の顔に、同時に驚きの表情が浮かぶ。弾かれたように海を見ると、遠く離れた水平線の上に不気味な黒い影が見えた。

双眼鏡を持たない雄人には、遠く水平線上にある影の細部までは分らない。だが、雄人が目を凝らしている間にも影はぐんぐんと大きくなり、程なくしてその全貌が明らかになった。

ナイフのような鋭い艦影。水中走行を考えて上部構造物をできるだけ廃したその姿は、紛れもなく潜水艦のものだった。潜水艦は、艦首に据えた一門の砲を不気味に光らせながら「氷川丸」との距離を詰めてくる。

「雄人さん・・・」

不安げな眼差しで氷川丸は雄人を見つめる。伸ばした手が、無意識のうちに雄人の袖口を掴む。

敵か味方か。発見した直後は判断がつかなかったが、最早その正体は明らかだった。肉眼でも艦上の構造がはっきり見て取れるほどの距離にまで近付いた潜水艦。その艦橋側面には、日本の潜水艦には必ず書かれている日の丸の旗印と「イー○○」といった艦番号が書かれていなかった。敵の潜水艦——恐らく、アメリカの潜水艦——である事は間違いなかった。

「・・・っ！」

謎の艦影の正体が敵の潜水艦であると分かった瞬間、氷川丸の身体は硬直した。背筋が凍り、背中に刃物を突き付けられたような恐怖感が湧き上がった。

敵潜水艦は影のようにぴったりと「氷川丸」の後ろについて航行する。距離は千メートルもない。砲撃だろうと雷撃だろうと、撃てば確実に当たる距離だ。

もしも、攻撃されたら——氷川丸の脳裏に、沈みゆく「沖島」の姿と、炎の残る艦上で最期を看取った少女の姿がよぎる。

氷川丸は、今すぐにでもこの場から逃げ出したかった。しかし、それをする事は逆に自身の身を危険に晒すことになるため、できなかった。

病院船はジュネーブ条約によって国際的にその安全が保証されているが、同時に守るべき掟も定められていた。その最たるものが、「病院船は如何なる理由があっても軍事目的に使用する事はできない」というものである。

軍事目的での使用を禁じられている病院船は、軍需物資を積んだり兵士を運んだりする事はできない。そのような行為を行えば、即刻、病院船としての権利を失う。その場合は、敵の攻撃を受ける事もある。そして、違反行為を疑われるような行動も慎まなければならないかった。

つまり、ここで敵潜水艦を振り切ろうとするような真似をすれば、何か後ろめたい物を積んでいるのではないかと疑われてしまう。そうなれば、敵対行為をとったとして撃沈されてしまう恐れもあるのだ。「氷川丸」は、自身の船体に描かれた赤十字の加護を信じて、

ただ直進し続けるしかなかった。

そんな「氷川丸」を、敵潜水艦は執拗に追い続ける。時折、艦首に据えられた砲を動かしては「氷川丸」に照準をつけるふりをする。絶え間なく与えられるプレッシャーに、氷川丸は耐え切れなくなりそうになっていた。

息の詰まるような重圧の中、氷川丸がどうにか立っていられるのは雄人のおかげだった。雄人は彼女を庇うように抱き、その華奢な身体を支えていた。桜貝で作られたお守りを胸に握り締めて身体を固くする少女に、雄人は「大丈夫だよ」と優しく言葉をかけ続けた。

一秒が一時間にも感じられるような緊張した時間が暫くの間流れた。やがて、敵潜水艦は諦めたように反転し、現れた時と同じように水平線の彼方へと消えていった。

「助かった……のか？」

「そう……みたいです」

小さくなっていく影を見送りながら雄人が呟く。危機が去った事を認識した氷川丸は、大きく安堵の息をついた。

「はぁ……。よかった……です」

言うなり、へなへなと氷川丸はその場に座り込む。その身体を、雄人が慌てて支えた。

「大丈夫、氷川丸？」

「はい……。安心したので、腰が抜けてしまったようです。しばらく、立てないかもです……」

安心感から微笑を浮かべた氷川丸が答える。氷川丸が無事である事を確かめた雄人はようやく緊張の糸を解いた。

「ふう……。一時はどうなる事かと思ったよ」

氷川丸の隣に腰を下ろした雄人が言う。腕時計で確認したところ、敵潜水艦との接触時間はおよそ一時間ほどだった。

「一時間ですか……。もっと長かった気がしました」

「僕もだよ。さっきは本当に生きた心地がしなかった」

そう言う雄人の顔は、まだ少し蒼い。彼も先程の状況下で、ぎりぎりまで精神を擦り減らしていた。

「何はともあれ、無事に済んでよかったです。雄人さんが買ってくれた、このお守りのおかげです」

言って、氷川丸は手に握っていたお守りを見せる。雄人がスラバヤで土産に買った、桜貝のお守りだ。

「氷川丸」が攻撃を免れたのは無論、病院船であるからだ。しかし、病院船であっても攻撃を受ける事例が存在する中、氷川丸の言葉もあながち嘘ではないようにも思えた。

このように肝を冷やす一幕もあったものの、「氷川丸」は二日後

の九月二十日に無事、横須賀に到着。患者を降ろし、整備のために入渠した。なお、今回の潜水艦接触を経験してから、乗組員の氷川神社への参詣が前にも増して熱心に行われるようになったという。

<第十八話>ガダルカナル争奪戦勃発（後書き）

作者「高校の中間試験が間にあつたために、少し間が空いてしまいました」

青葉「そんなこと言つて、試験が無かつたとしても遅れてたんじやないの？」

作者「うぐ……」

青葉「まあ、それは置いて。ところで氷川丸、昨日は何の日だつたか知つてる？」

氷川丸「昨日？ 五月二七日……えっと……」

青葉「海軍記念日だよ、氷川丸」

氷川丸「あつ……！」

青葉「一九〇五年五月二七日。日露戦争でロシアのバルチック艦隊をボツコボコにした日本海海戦の勝利を祝う日だよ。今年は二〇一一年だから、えっと……何周年？」

作者「一〇六周年だよ。もっとも、今では普通の平日だけだね。

海軍記念日は戦後に廃止された」

青葉「そーなのか！。そういえば、この作品で『三笠』は出さないの？」

作者「可能ではあるね。『三笠』は横須賀で保存されてるし、『氷川丸』は横須賀を母港みたいにして活動しているし。でも果たして、登場させる場面があるかどうか……」

氷川丸「作者さん、そろそろ終わりにした方が良いんじゃないですか？」

作者「おつといけない。だらだらと長引かせてしまうところだった。氷川丸、終わりの挨拶を頼むよ」

氷川丸「分かりました。この作品を読んでくださる読者の皆さんに心より御礼申し上げます。ご意見・ご感想もお待ちしております」

<第十九話>再会、そして今生の別れ

ガダルカナルの攻防戦が始まってから、「氷川丸」は定期便のように南洋諸島と日本本土を往復するようになった。横須賀からトラック、ラバウルまでの所要日数は約一週間。かつて就航していたシートル航路より遙かに短いその航路を、遙かに忙しく「氷川丸」は行き来する。彼女が頻繁に両地を往復する光景は、それだけガダルカナル島の戦いが厳しさを増している事を意味していた。

度重なる援軍にも関わらず、日本軍はガダルカナル島を奪還できずにいた。逐次送られてくる兵力で突撃を繰り返しては返り討ちに遭う。その繰り返しであった。そうして手を拱いている内に米軍は飛行場の整備を急ピッチで進め、制空権を確立していく。島の奪取は、日を追うことに難しくなった。

島での戦闘が過酷を極めていくのに比例して、海での戦いも激化の一途を辿った。米軍の上陸直後に発生した第一次ソロモン海戦を皮切りに、ガダルカナル島周辺では幾度も両軍の艦艇がぶつかり合った。

最初にかつたのは、八月二四日から翌日にかけて行われた「第二次ソロモン海戦」である。陸軍輸送船団の脅威となる敵機動部隊を撃破する事を目的としたこの海戦で、日本海軍は米空母「エンタープライズ」に損害を与えた。しかし、味方も軽空母の「龍驤」を失い、陸軍部隊の揚陸にも失敗した。

日本海軍はラバウルの陸上航空部隊なども用いてガダルカナル島の制圧を試みたが、ラバウルからガダルカナルまでは片道千キロもあり、長大な航続距離を誇る零戦でもギリギリの距離であった。こ

の長距離行は操縦士にも負担を強いるものであり、被害に比して戦果は少ないものだった。陸上基地からの航空攻撃での飛行場制圧が困難だと知った連合艦隊司令部は、水上艦艇による飛行場の砲撃を計画。夜陰に乗じて島に近づき砲撃を加えるというこの作戦には、第一次ソロモン海戦で大戦果を挙げた第六戦隊が選ばれた。

ところが、出撃した第六戦隊は警戒にあたっていた米艦隊と遭遇、「サボ島沖海戦」が発生した。重巡「古鷹」沈没、「青葉」大破などの被害を受けた第六戦隊は飛行場砲撃を断念。しかし、その二日後に今度は戦艦「金剛」「榛名」から成る部隊がガダルカナル島に殴り込みをかけ、飛行場に砲弾の雨を降らせた。これにより、ガダルカナルの飛行場は一時的に使用不能に陥る。

それから二週間ほど後の十月二十六日。陸軍の総攻撃と呼応する形で「南太平洋海戦」が勃発。空母「翔鶴」^{しやうかく}、「瑞鶴」^{ずいかく}を中核とする機動部隊と米海軍機動部隊が矛を交えた。日本軍は空母「ホーネット」を撃沈、「エンタープライズ」（突貫工事により第二次ソロモン海戦の損傷から復帰）を損傷させたが、正規空母「翔鶴」、軽空母「瑞鳳」^{ずいほう}が被弾した。連合艦隊はミッドウェー海戦での雪辱を晴らす事に成功したが搭乗員の消耗は大きく、同時に行われた陸軍の総攻撃も失敗に終わった。

米軍がガダルカナルに上陸した際、軍上層部はこれを単なる威力偵察だと判断し、すぐに撃退できるものと考えた。しかし、その予想は外れ、戦況は消耗戦の様相を呈してきた。海戦の結果だけを見れば、彼我の損害の程度はほぼ同じように思える。しかし、国力に劣る日本は一度失った戦力を回復するのに時間がかかる。戦いの長期化は、そのまま日本の不利につながる。

にも関わらず、戦闘は一向に終わる気配を見せない。互いに決定

打を与える事ができないまま、日米の戦争は泥沼の戦いへもつれ込んでいった――。

十一月初旬。「氷川丸」はトラックにその船体を浮かべていた。内地では紅葉が見頃を迎え、日光などの景勝地に多くの観光客が訪れる季節だが、常夏のトラックでは今日も椰子の木が青々とした葉を風に揺らしている。

すっかり馴染みのものとなったその景色を、氷川丸は船橋の見張り台から眺めていた。船橋の脇からはみ出すようにして設けられているこの見張り台は、後付けではなく、「氷川丸」に元からある物だ。見張り台であるため、当然の如く眺めは良い。貨客船時代から船の目として運航を支えてきたこの場所は、氷川丸のお気に入りの一つだった。

この場に雄人の姿はない。彼は現在、島の海軍部隊に医薬品を届けに行っている。氷川丸がここで景色を見ているのは、雄人が帰って来た時にすぐ出迎えられるようにという意味もあった。

南洋の風に三つ編みを揺らしながら、氷川丸は雄人が帰って来るまでの時間を過ごす。と、氷川丸は自分の船体に別の船の艦魂が降り立つ気配を感じた。

気配を頼りに氷川丸は来訪者の姿を探す。船首に目をやると、一番ハッチの所に長身の女性が立っていた。

「比叡さん！」

氷川丸の呼びかけに相手は軽く手を挙げて応える。相手の反応を見るより早く、氷川丸は船首部分に転移した。

「お久しぶりです。年明け以来ですね」

久方ぶりの再会に、氷川丸の声に喜色が混じる。対する妙齡の女性――比叡も、口元を緩めて答える。

「一別以来だな。達者であつたか？」

「はい」

互いに挨拶を済ませたところで、比叡が尋ねる。

「今日はあの青年はおらぬのか？」

「雄人さんの事ですか？」

氷川丸の問いに、比叡は頷く。

「雄人さんなら、今は陸に上がってます。島の部隊から医薬品の補充要請があつたので、届けに行つてるところです」

「それならば、先方から出向いてくるのが道理ではないのか？
よもや、全員が病で伏せついている訳ではあるまい」

「ええ。でも、部隊から島民の検疫も一緒に頼むと言われて・・・
それで、医薬品を届けた足で住民の健康診断も行ふことになったんです」

「ふむ、成程な。彼の顔も見ておきたかったのだが、残念だ」

「でしたら、雄人さんが帰ってくるまで待っていてはどうですか？ 部屋の中なら空調も効いていますし」

「そうか。では、世話になるとしよう」

比叡が頷くのを見ると、氷川丸は彼女の手をとった。

「それでは、いきますね」

「ああ、待て」

転移しようとする氷川丸を比叡が制止する。

「転移はしなくていい。それよりも、船の中を案内してもらえな
いか？ お主の働きぶりを、この目で見てみたい」

「分かりました。まだ患者さんはいないので病室は空ですけど、
いいですか？」

「ああ、構わぬ」

比叡の同意を受けて、氷川丸は歩き出す。扉を開けて船内に入ると、薬品の臭いが鼻をついた。今回の航海ではまだ患者の収容を行っていないため、内部には船内消毒に使用した薬品の臭いが強く残っている。

露天甲板と同じ段に位置するここはBデッキと呼ばれ、貨客船時

代は一等の客室と食堂が置かれていた場所だ。今は、士官用病室や病院船の士官の居室として使用されている。

「ここは元々、一等客室だった部屋で、今は士官用の病室として使われています」

舷側に沿って並ぶ部屋の一つの扉を開け、氷川丸が説明する。一部屋につき二つのベッドが置かれている室内は、病院船に改造される前とほとんど変わっていない。ゆったりとくつろげる一等の個室は、士官用の部屋としては最適であつたため、手を加える必要が無かつたのだ。

「いい部屋だな」

室内を眺める比叡が感想を述べる。

「うちの水兵たちが見たら、涙を流すぞ」

「そんな大げさな・・・」

苦笑する氷川丸に比叡が言う。

「過言ではない。奴等は普段、兎小屋のような部屋の中で、吊り床に揺られて寝ているのだからな。柔らかな寝床で眠るなど夢のまた夢だ」

「水兵さんの生活って、大変なんですね・・・」

「ああ。だが、姉上や山城に比べれば私などまだ優しい方だ。何せ、あの二人は『鬼の金剛、地獄の山城』と呼ばれ、東西で恐怖の

代名詞となっているほどだ。新兵にとっては、最も乗りたくない艦だろうよ」

「なんだか、聞いただけで背筋が凍る気がします・・・」

顔を青くする氷川丸を見て、比叡が快活な笑い声を上げる。

「ハ、ハ。そうだろうな。なに、心配するな。姉上も山城も普段は温厚な人柄だ。そう恐がる必要はない」

「そう、ですか・・・」

まだ少し恐怖を拭えていない氷川丸に比叡が言う。

「姉上に会う機会があつたら茶を淹れてもらうといい。姉上は英国の生まれだからな、紅茶に対する造詣は帝国海軍一だ。私は茶に無学ゆえ分からぬが、お主ならば話も弾もつ」

「あつ、いいですね。金剛さんの淹れる紅茶、私も飲んでみたいです。比叡さんと妹さんたちも一緒に、今度みんなでお茶会しましょうよ。一等ラウンジを空けておきますから」

わくわくした様子で氷川丸が提案する。氷川丸は比叡も二言返事で賛同してくれると思つたが、比叡からは返答の代わりに小さな咳きが返ってきた。

「みんな、か・・・」

氷川丸の言葉の一部を繰り返すと、比叡はそのまま物思いに耽るように黙ってしまった。奇妙な沈黙に、氷川丸は訝しげな表情を浮

かべる。

「比叡さん……？」

氷川丸が声をかけると、比叡は我に返った様子で言った。

「……ん、ああ。そうだな。皆で集まるもの良いかも知れぬ。
あの青年も呼んで一緒にやろう」

そして、「他の部屋も見せてくれないか？」と氷川丸に船内案内の続きを促した。比叡の言動に氷川丸は違和感を覚えたが、聞いても答えてくれないだろうと思い、追及する事はやめた。

「それでは、次は一つ下のCデッキを案内しますね。ここの階段を降りるとCデッキで、すぐそこにあるのが配膳室です。それから

――」

氷川丸は機関室や貨物室として使われている船倉などを除く主要な区画をすべて比叡に紹介した。何層にも重ねられた甲板を上下し、広大な船内を見て回るのは容易ではなく、氷川丸の自室に戻ってきた頃には日が西の海に接し始めていた。

「これで、全部です」

「手間をかけたな。礼を言うぞ」

案内を終えた氷川丸に比叡が礼を述べる。と、そこへ折よく島での仕事を終えた雄人が帰ってきた。

「ただいま、氷川丸」

「あ、雄人さん。お帰りなさい」

「暫くぶりだな、青年」

「お久しぶりです。比叡さんも来ていたんですね」

部屋の扉の前で三人は立ち話を交わす。

「ちょうど雄人さんも帰ってきた事ですし、三人でお話ししませんか？ 私はお茶の用意をしますから、お二人はくつろいでいて下さい」

二人を部屋に誘導し、氷川丸は司厨室に向かう。数分後、トレイを手にした氷川丸が戻ってきた。

「お待たせしました」

「ありがとう、氷川丸」

氷川丸も席についたところで、雄人が話を始める。

「この間は、南太平洋海戦の参加、お疲れ様です。ホーネットを撃沈したそうですね」

「ああ。とはいえ、やったのは空母の連中だがな。翔鶴と瑞鶴・・開戦時はヒヨ子だったが、奴等も今や一人前の戦士だ。ミッドウェー以来、機動部隊の中核としてよく頑張っている」

「これで、ガダルカナルの戦いも変わるでしょうか？」

氷川丸の問いに、比叡は首を左右に振る。

「分らん。だからこそ、私が駄目押しに行く」

「えっ・・・？」

予期せぬ比叡の言葉に氷川丸が驚きの声を上げる。

「それって、どういう事ですか？」

「ガダルカナルの米軍飛行場に、艦砲射撃を行う。前に姉上と榛名がやった事の再演だ」

「前は確か、敵飛行場かなりの打撃を与えましたよね」

雄人の確認に比叡は首肯する。

「でも、米軍も馬鹿ではないはず。同じことを二度やるのは危険では？」

「無論だ。上層部の方では樂觀視しているようだが、恐らく、今回は米軍も何かしらの手は打ってくる。この前の様に無傷の勝利とはいかぬだろう」

「大丈夫・・・なんですか？」

瞳に不安の色を湛える氷川丸が聞く。比叡は微笑し、氷川丸の頭に手を置く。

「案ずるな。斯様な所でくたばるつもりなど、毛頭無い。情報に

よると、周辺海域に展開する敵艦艇は巡洋艦程度だという。巡洋艦相手に不覚は取らぬ。それに、そもそも我ら姉妹は巡洋戦艦。味方の先頭に立ち突撃をかけるのが使命だ。今回の様な任務は、むしろ本分だ」

「そうですか・・・でも、くれぐれも気をつけて下さいね？」

「ああ。心得た」

「それで、出撃はいつですか？」

雄人が聞くと、比叡は即答した。

「明日だ。今日ここを訪ねたのも、お主らに出陣前の挨拶をしておこうと思ったのだ」

「僚艦は誰が？」

「霧島、それに四戦隊の高雄と愛宕だ。霧島は末の妹ではあるが、なかなか剛の者だ。仮に敵の戦艦が現れても遅れは取るまい」

一頻り話し込んだ後、比叡は席を立った。

「さて、私はそろそろ戻るとしよう。二人とも、世話になったな」

別れの挨拶を済ませた後、淡い光と共に比叡は自艦に転移した。部屋に舞う光の粒を眺めていると、夕食の時間を知らせるラッパが鳴り響いた。

「おっと、もうそんな時間か。氷川丸、また後でね」

「あつ、待って下さい、雄人さん！」

部屋を出ていこうとする雄人を、氷川丸が呼び止める。

「なに、氷川丸？」

ドアノブに手をかけた状態の雄人が顧みると、氷川丸は机の引き出しから一枚の布を取り出して言った。

「雄人さんに、ひとつお願いがあります——」

翌日、十一月九日。南太平洋最大の日本海軍の根拠地であるトラックは高揚した気分に含まれていた。

戦艦「比叡」を旗艦とし、姉妹艦「霧島」、重巡洋艦「高雄」「愛宕」などから成る挺身攻撃隊がトラック環礁を今まさに出撃せんとする。夜陰に乗じてガダルカナル島に殴り込みを敢行する艦隊は、挺身の文字通り、捨て身の覚悟で作戦に臨む。彼らを送り出す港内の艦艇には帽振れをする兵士が山鳴りになり、白い帽子が波のようにうねっている。

勇壮な軍艦マーチが島々に木霊する中、見送る艦艇に向けて比叡は主砲塔の天蓋から敬礼を返す。その時、「比叡」の艦橋の根本で光が生まれた。瞬時に別の船の艦魂が転移してきた事を悟った比叡はその場所へと移動した。

「氷川丸、どうしたのだ？」

目の前に立つ三つ編みの少女を見て、比叡が問う。氷川丸は両手で大切そうに抱えた白い布を比叡に手渡した。

「これは・・・？」

「千人針です」

尋ねる比叡に氷川丸が答える。

「・・・といっても、千人には程遠いんですけどね」

そう言つて、氷川丸は恥ずかしそうに苦笑する。縫い目の細かさに大きなばらつきのある布を眺めながら、比叡は尋ねる。

「確かに、一針ずつ別の人間が通しているようだが・・・如何にして、これを作ったのだ？ お主が頼んで回ろつにも艦魂が見える人間は限られているだろうに」

「はい。だから、雄人さんに協力してもらいました」

隣に立つ青年を見上げながら氷川丸が答える。

「雄人さんに、乗組員の方々に千人針を通してくれるように頼んでもらったんです。全部で二三九針。全員から貰いました」

「そうなのか？」

「ええ。どうしてこんな娘みたいな事を、と変な目で見られもし

ましたが。何とか集められました」

比叡の問いかけを受けた雄人が肯定の返事を返す。因みに、三人がいるのは「比叡」の第二主砲塔と艦橋基部の間の狭い空間である。そのため、「比叡」の乗員でない雄人が立っていても目立つ事はなかった。

「そうか……。二人とも、礼を言うぞ。感謝する」

「「どういたしまして」」

期せずして息が合い、雄人と氷川丸は心なしか気恥ずかしそうにする。そんな二人の様子を比叡は微笑ましそうに眺める。と、在泊艦艇に別れを告げる「比叡」の汽笛が大きく響いた。

「おっと、もう戻った方が良さうだな。これ以上離れると自分の船に転移できなくなるぞ」

「そうですね。雄人さん、戻りましょう」

「うん。分かった」

氷川丸の手をとる雄人に、比叡が呼びかける。

「暫し待て、青年」

振り返る雄人へ、比叡は懷から金時計を取り出した。

「千人針の駄賃だ。受け取れ」

雄人は一度氷川丸と手を離し、比叡の傍へ向かう。雄人が金時計を受け取る瞬間、比叡は彼にしか聞こえない声で低く言った。

「これから戦いはますます辛く、厳しくなる。その中で氷川丸を支えてやれるのはお前だけだ。頼むぞ」

「えっ？」

雄人は聞き返すが、比叡は何事も無かったような顔をする。そして、「ほら、早く戻れ」と彼の背中を押す。

「達者でな、氷川丸。貴船の航海に幸多からん事を」

「はい。比叡さんも、御武運の長久をお祈りします」

直後、氷川丸の身体から淡い蛍光が生まれ、それはたちまち彼女と雄人の姿を覆い隠す。そして二人の人影が完全に見えなくなった瞬間、光は弾けて消滅した。

人のいた気配の残らない空間を見詰めながら、比叡は独り呟く。

「悪いな、氷川丸。お主との茶会の約束は、果たせそうにない――」

そして、狭い主砲塔と艦橋の谷間から第二主砲塔の上に転移する。

「かくなる上は、せめて存分に勇を奮い、後生に名を残そうぞ」

軍刀の柄を握り締め、比叡は決意を固めた。

「比叡」以下の挺身攻撃隊が出撃した後、「氷川丸」も患者収容のためにトラックを出港した。ラバウルとガダルカナル島の間地点にあるブーゲンビル島の対岸に位置するショートランドまで赴き、負傷者を入院させた。収容した患者は、戦闘による負傷者よりもマラリアをはじめとする疫病患者の方が多かった。

ラバウルに戻った「氷川丸」は現地部隊にマラリア用の薬を提供し、十一月十三日に同地を出港した。

薄い煙を噴き上げる花吹山を右手に眺め、「氷川丸」はゆっくりとラバウルを離れる。プロムナードデッキから景色を楽しむ雄人の手には、比叡から渡された金時計が握られていた。

「花吹山は今日も綺麗だなあ。故郷の山を思い出すぜ」

雄人が付き添いをしている患者が郷愁を滲ませた声で言う。

「そうですね。でも、三月に来たときは火山灰が酷くて楽しめたものではありませんでしたよ」

「そうなのか？ 俺は最近来たばかりだから知らなかったぜ。
・お、あんた、いい時計持ってるな」

「これですか？ 知人に貰ったんです」

患者の言葉に、雄人はあながち嘘でもない返答をする。

「一兵卒の俺じゃあ、こんなの買うのは夢のまた夢だぜ……。
なあ、ちよつとでいいから見せてもらえないか？」

「ええ。いいですよ」

雄人が金時計を手渡すと、患者は「おおっ」と歓声を上げる。だが、彼が蓋を開けた瞬間、文字盤を覆っていたガラスがピシッと音を立てて碎けた。

「おわっ！」

「大丈夫ですか!？」

怪我の有無を尋ねる雄人に、患者は無傷である事を伝える。彼は時計を雄人に返すと申し訳無さそうに言った。

「悪い、大事な時計に傷つけちゃって。すまねえ……」

「いえ、気にしないで下さい。それよりも、怪我が無くて良かったです」

答えつつも、雄人は胸に不吉なものを感じていた。時計を渡した時に比叡が言っていた言葉が、雄人の脳裏をよぎる。

——氷川丸を支えてやれるのはお前だけだ。頼むぞ——

雄人は急に、その言葉が遺言めいて感じられた。覆いが割れ、動きを止めてしまった時計の針が、その思いに拍車をかける。

「まさか……」

そう口にするも、心の内に生まれた不安はどんどん濃さを増していく。やがてそれは、確信ともいえる強さとなった。

そして、雄人が胸騒ぎを覚えていた頃、一隻の軍艦がソロモン海の水底へ沈んでいった。その艦の名は、「比叡」。ガダルカナル島砲撃のため出撃した本艦は途中、米巡洋艦部隊と遭遇。「比叡」は探照灯を照射して敵艦に巨砲の釣瓶撃ちを浴びせかけた。しかし、探照灯を使用した「比叡」は格好の標的となり敵艦の攻撃が集中。八十発にも及ぶ砲弾を受け、操舵不能に陥った「比叡」はその後、米軍機の雷撃を受けて被害が拡大、航行不能となり自沈した。時に昭和十七年十一月十三日。日露戦争での「八島」「初瀬」以来三十八年ぶりの、そして太平洋戦争初の戦艦喪失であった。

その二日後、再度の突入を敢行した「霧島」も米海軍の最新鋭戦艦「ワシントン」、「サウスダコタ」との砲撃戦の末に沈没。のちに「第三次ソロモン海戦」と呼ばれるこの戦いで、日本は貴重な高速戦艦二隻を失い、これ以後ガダルカナル島への戦艦投入を断念する事となった。

<第十九話>再会、そして今生の別れ（後書き）

作者「更新頻度の目安の一月を超えて更新が遅れてしまいました。すみません」

氷川丸「……とりあえず、理由を聞きましょうか」

作者「期末試験と検定試験が重なって、時間が取れませんでした。中間試験から一か月後に期末試験があつて、その間に検定試験も入ってきたんです」

氷川丸「そうですね……。そういう理由でしたら、仕方ありませんね」

作者「その埋め合わせという訳ではありませんが、短編を一作投稿しました。ドイツ海軍の『プリンツ・オイゲン』という巡洋艦を主人公とした小説です。良かったら、こちらもご覧下さい」

青葉「宣伝乙ー」

氷川丸「こらっ、青葉。そういうこと言わない！」

作者「それともう一つ、重要なお知らせがあります。実は私、受験生でして……夏以降、受験が本格的になるため、夏からは受験が落ち着くまで更新頻度が不安定になるかと思われます。読者の皆様には申し訳ありませんが、ご承知下さるようお願いします」

氷川丸「最初に更新遅延を謝って、次は更新の不定期化を予告して……何だか、今回はあまり良いことがありませんね」

青葉「確かに……。まあ、それを言っても仕方ないし、作者に受験を頑張ってもらって、早く落ち着いてもらうしかないね」

氷川丸「青葉の言う通りね。作者さん、私たちのためにも受験、頑張ってください」

作者「うん、分かったよ」

氷川丸「では、今回はこの辺で終わりにしましょう。青葉？」

青葉「はいはい！ この作品を読んでくれる読者のみんなに感謝の言葉を。ありがとう！」

氷川丸「ご意見・ご感想もお待ちしております」

＜第二十話＞「ガ島」から「餓島」へ

ラバウルから帰ってきた「氷川丸」は手早く整備と消毒を行うと、再びラバウル方面への航海に就いた。今回の出発港は、横浜である。

軍港であるため民間人の立ち入りが禁止される横須賀と違い、横浜港では大勢の市民が見送りに訪れる。棧橋の突端で、若い女性が頬を湿らせながら手巾ハンカチを振っている。乗組員の中に恋人がいるらしかった。

横浜を出た「氷川丸」は、一路トラックへと向かう。外洋に出てからも波は穏やかで、天気も良い。航海日和の天気の中を、「氷川丸」は進んでいった。

横浜出港から一週間後、「氷川丸」はトラックに到着。錨を下ろして船が完全に停泊状態に入ると、氷川丸は周囲の艦艇を眺め始めた。

周囲を環礁に囲まれた中にあるトラックの泊地は、常に波の無い穏やかな海面を湛えている。そこに浮かぶ艦影を見渡す氷川丸は、探し求めている艦の姿を認められず、小さく首を傾げた。

「あれ？」

見落としてしまったのかと思い、もう一度停泊している艦船を見回すが、結果は同じだ。

彼女が探しているのは、「比叡」の姿だった。先日、今と同じ場所から出港を見送った相手を、氷川丸は探していた。「比叡」は金

剛型戦艦の二番艦であるが、戦前の改装時に大和型戦艦で使用する設備のテストケースにされたため、艦橋の形が他の姉妹艦と若干異なっている。それゆえ、「比叡」の艦影は見分けやすい筈なのだが、見つけ出す事はできなかった。それもその筈である。「比叡」は過日に行われた第三次ソロモン海戦で、激闘の末に沈没しているのだから。しかし、「氷川丸」にはその情報はまだ届いていなかった。

氷川丸がそうしている間にも、船からは舷梯が下ろされ、船倉のハッチが開かれて患者の受け入れ態勢が整えられていく。すると、待つてましたと言うように、各艦や島の棧橋から内火艇がわらわらと寄ってくる。患者がいない往路の航海中にのんびりとしていた看護科は、今は逆に総動員体制である。

一瞬のうちに、船の内外は喧噪に包まれる。とはいえ、内火艇の相手はまだ序の口だ。内火艇でやって来る人の用件は、大概是医薬品の補充である。各艦の状況を聞き、それに応じて適当な薬を適量割り当ててやれば、それで完了する。最重要任務である傷病者の収容は、これからだ。

内火艇が風のように去って行った後、転院者を乗せた輸送船が「氷川丸」に接舷する。幾つもの担架が運び込まれる甲板は、先ほど以上に慌ただしくなった。島の海軍病院からの転院であるため、至急の手術を要する患者がいない事がせめてもの救いだった。

そのような形で忙しく午前が過ぎたあと。午後の休憩時間となった「氷川丸」では、乗組員たちが午前中の労働で疲れた身体を休めていた。

「うおー、疲れたぜー」

デッキに置かれた長椅子の上で行儀悪く寝転がるのは、雄人の同僚である吾妻司一等看護兵曹。彼の品性に欠ける振る舞いに、当然の如く雄人から注意が飛ぶ。

「司。それ、見ててすつごくだらしないよ」

「うるせえ。俺の疲労度からすれば、この位は許されていい。雄人、お前も次から次へと殺到する医薬品の補充要請を捌き続ける地獄をやってみろ。そうすれば俺の気持ち分かる——あでっ!？」

図々しく横になっている吾妻の頭に、突如として金ダライが落下する。直撃を受けた吾妻は跳ね上がり、その拍子に椅子から転げ落ちた。

「まったく・・・何なんですか、この人は」

突然の出来事に唖然とする雄人の耳に、少女の嘆息が届く。その声を聞き、雄人は事の次第を理解した。

「氷川丸・・・いくら司の態度が悪かったとはいえ、いきなりタライをぶつけるのは酷いと思うよ？」

「この人のお行儀は悪すぎます。この椅子は、患者さんがくつろげるように置かれている物なんですよ？ それを寝転がって占拠するなんて、許せません」

「いてて・・・一体何が起こったんだ？ 急に、頭にタライが落ちたような痛みに襲われたんだが」

雄人と氷川丸が話していると、倒れていた吾妻が起き上がって言

った。

「雄人。お前、何かやったか？」

「いいや。何もしてないけど」

「じゃあ、一体何だったんだ？」

「さあ……。もしかして、本当にタライが降ってきたんじゃない？」

吾妻の足下に転がる金ダライを見やりながら、雄人は答える。しかし、このタライは氷川丸が艦魂の能力を使って出現させた物であるため、普通の人間には見えない。一人事態を理解できずにいる吾妻を前に、雄人はおかしくなって口元を緩めた。

「ま、いつか。また寝直せば良いだけの話だ」

「ちよつ、司！ やめた方が良いつて！」

雄人の制止も聞かず、吾妻は再び長椅子を占拠する。それを見た氷川丸は、堪忍袋の緒が切れたように顔を真っ赤にした。

「いい加減にしなさいっ！！」

「どわあっ！？」

氷川丸が光を纏った手を振ると、大量のタライが吾妻の頭上に降り注ぐ。文字通り、山のようなタライに吾妻を埋めた氷川丸は、溜飲を下げた様子で雄人に言った。

「さ、行きましょう。雄人さん」

「えっ、あ、うん・・・」

氷川丸に引つ張られる形で雄人はその場をあとにする。そのまま少し歩いたところで、氷川丸が雄人に話しかけた。

「ところで、雄人さん」

「なに？」

「比叡さんがどこにいるか、知りませんか？ 何度か港内を探したんですけど、見つからなくて。何か聞いていませんか？」

「あ——」

氷川丸の質問に、雄人は言葉を詰まらせる。黙りこくる雄人を、氷川丸は怪訝そうに見上げた。

「雄人さん・・・？」

氷川丸が呼びかけても、返事はない。雄人が意図的に答えないでいるのを感じた氷川丸は、その瞳に不安の色を宿した。

「まさか・・・比叡さんに、何かあったんですか？」

「・・・・・・・・」

「雄人さん！」

氷川丸に迫られて、雄人はようやく重い口を開いた。

「・・・戦艦『比叡』は、十一月十三日、サボ島の沖合で、沈没したよ」

「え——・・・」

氷川丸は一瞬、雄人が言った言葉の意味が分からなかった。いや、分かりたくなかったのかも知れない。しかし、耳に入る言葉は、否応無しに彼女に現実を認識させた。

「今朝収容した患者の中に、『比叡』の乗組員がいたんだ。その人から話を聞いた。ガダルカナル島に向かう途中で、『比叡』は米艦隊と遭遇。砲撃戦の末、航行不能に陥って自沈したそうだよ」

「そん・・・な・・・」

一步、二歩と、氷川丸は後退りをする。非情な現実から逃げるように——

「・・・もしかしたら、比叡さんは自分の運命を知っていたのかもしれない」

「どういう・・・ことですか？」

雄人は懷から、金色に光る懷中時計を取り出した。

「それは、出撃前に比叡さんから貰った——」

氷川丸の言葉に、雄人が頷く。

「これを手渡された時に、比叡さんにこう言われたんだ——『氷川丸を支えてやれるのはお前だけだ。頼むぞ』って。今になって思えば、あの時すでに、比叡さんは自分が帰ることは無いと分かっていたのかも知れない」

話を聞き終えた氷川丸は、さらに数歩後退ると、力無くその場に膝をついた。

氷川丸にとって、身近な者の死は初めての経験だった。これまで、彼女は何人も患者の最期を看取ってきた。「沖島」の艦魂の死を眼前で見届けたこともある。しかし、自分と深い関係にある相手を失うことは初めてだった。

うな垂れ、涙を零す氷川丸。そんな彼女を、雄人は優しく抱き寄せた。

「氷川丸。今は思い切り泣いていいよ。僕が傍にいるから。思う存分、泣けばいい」

雄人の言葉によって感情の箍たがが外れたのか、氷川丸は堰を切ったように泣き出す。彼女が泣き止み落ち着くまで、雄人は彼女のことを抱き続けていた。

トラックに停泊中、「氷川丸」は開戦一周年の日を迎えた。ラジオからは開戦一周年を祝う言葉が流れ、陸では賑やかな催しがなされる。しかし、艦艇の数が少なくなつたトラックの風景は、ガダル

カナル島を巡る戦いの激しさと逼迫しつつある戦況を物語っていた。

十二月十一日、「氷川丸」はトラックを出港。ブーゲンビル島南端のブインに寄港し、十五日にラバウルに入港した。

第三次ソロモン海戦が実質的な敗北に終わった後、いよいよ形勢は日本にとって不利なものとなっていた。それに伴い、「氷川丸」が収容する負傷者の数も増加の一途を辿った。

ラバウルでも、到着すると同時に現地に展開する第八根拠地隊や海軍病院から医薬品の補充を求める依頼が殺到する。受け取りに来た看護兵の話では、入院患者のほとんどがマラリアだという。薬がいくらあっても足りないという求めに応じ、キニーネなどの治療薬を合わせて十万錠単位で供給した。

医薬品が収められた木箱を抱えて船を離れる彼らと入れかわるようにして、今度は入院する傷病兵がやってくる。左右の舷梯をすべて下ろし、受け入れ態勢を整える「氷川丸」に、ガダルカナル方面の患者を乗せた内火艇が接舷する。舷門で患者の出迎えに当たっていた雄人は、彼らの姿を見て一瞬、驚愕のあまり息を呑んだ。

舷梯を上がってくる患者たちは、皆が皆、例外無くやつれ果てていた。戦友に肩を支えられてなお、舷梯の一段を上るのも難しいほどに力の失せた彼らの姿は、とても健全な人間ものではなかった。

早速、軍医による診察が行われ、診断書が書かれる。そのほとんどが熱帯性のマラリアである。伝染病患者を収容する第五病室（六番船倉を改造）はすぐに一杯となり、他の病室も患者の姿で埋まった。

「氷川丸」が患者の収容に従事している間にも、島からは飛行艇が白波を蹴立てて飛び立っていく。広大な太平洋では、敵味方ともに長大な航続距離を持つ飛行艇が偵察の主役を担っていた。

十七日に「氷川丸」はラバウルを出港。船内の病室が満室になったため、これ以上の患者収容は行わず横須賀に帰還する事にした。

復路の船旅は、地獄絵図だった。船内の至る所で、マラリアに苦しむ患者の呻き声が聞こえた。マラリアは、ハマダラカが媒介となつて感染する病気であり、激しい高熱と関節痛を伴う。これらの症状は周期的に現れ、熱が下がっている時は甲板を散歩するなどできるが、一度発熱すれば猛烈な熱と痛みに襲われる。熱にうなされる患者の中には関節の痛みに堪えかね、「足を切り落としてくれ！」と叫ぶ者もあった。

マラリアに苦しむ患者の多くは、栄養失調にも陥っていた。建設中の飛行場を米軍に追われて以来、幾度となく飛行場の奪還を企てた日本軍であったが、作戦は悉く失敗した。補給もままならず、ジャングルの奥地に撤退した兵士たちは食糧不足に直面した。加えて、密林に跋扈する蚊から疫病を移され、飢えと熱病の二重苦を味わうことになった。

肋骨が浮き上がるほどに痩せこけた患者が病室に鯨詰めになる光景は、見るに堪えないものだった。落ち窪んだ頬に、伸びるがままに放置された髭。やつれた顔面の中で、二つの眼球だけが鋭く光を放っていた。

このような患者が、「氷川丸」には何百人も乗っていた。彼らに処方する薬の調剤で、薬剤科は休む間も無い状態だった。例えば、五百人の患者がいるとして、彼らに一日三回の薬を三日分処方する

場合は、合計で四千五百袋の薬を包む計算になる。しかも、船は波によって絶えず動揺している。左右に揺れる船内で天秤を使い、正確に薬を量る作業は高い集中力と技量を必要とした。

悲惨な光景を船内に抱えながら「氷川丸」は日本を目指す。その最中、事件が発生した。

深夜。消灯時間を過ぎ、そろそろ日付が変わろうかという頃。月夜に赤い赤十字灯を照らす「氷川丸」の船体が、突如として震えた。ズシン、という重い衝撃音と共に、船体を大きな揺れが襲う。全身を身じろぎさせた船は、前につんのめり、がくんと行き足を遅らせた。たちまち、船内に混乱が起こる。

「何事だ！」

操舵室の階下にある船長室で仮眠をとっていた石田船長が船橋に飛び込む。船長に代わり、舵を任されていた航海士が答える。

「船体後部で衝撃が発生！ 原因は不明です！」

「どうしました！？」

二人が言葉を交わしているところへ、今次の航海から病院船の院長となった本間正人軍医大佐が現れた。初の任務で異変に見舞われた本間院長の表情には、少なからぬ動揺が見て取れた。

しかし、これまで一年に渡って任務をこなし、敵潜水艦との遭遇も経験してきた石田船長は冷静に答えた。

「船の後部で衝撃が発生しました。原因は不明ですが、敵潜水艦による雷撃の可能性もあります。万が一の事態に備えた対応を乗組員に取らせて下さい」

続けて、石田船長は船橋のクルーに各部署の状況を調べさせると同時に自身は機関室に繋がる電話を取った。

「こちら船橋。機関室、状況を知らせろ！」

先方が電話口に出るや否や、石田船長は言った。

「こちら機関室。左舷ピストンロッドが破損、現在、応急修理を実施中です」

「その他に異常、船体への被害は？」

「今のところ、確認できません」

機関長の応答に耳を傾ける船長へ、伝声管で通話をしていた船員が船体各所に異常の無いことを告げる。衝撃の原因は、ピストンロッドの損傷であるようだった。

「機関長、日本本土までの航行は可能か？」

「問題ありません。方舷航行をしながら、応急修理を行います。明日のうちには、全速発揮できるようにしてみせますよ！」

「了解した。頼んだぞ」

受話器を置いた石田船長は、船内放送のスイッチを入れて詳細を

報告した。

「こちら、『氷川丸』船長の石田だ。先程の衝撃は機関室のピストンロッドの破損が原因である事が判明した。本船に沈没の危険はない。乗員および患者の諸君は、慌てる事なく冷静に行動してほしい。繰り返し――」

「氷川丸！」

船長の言葉により船内の騒ぎが鎮静化した後、雄人は氷川丸の部屋に駆け込んだ。

「氷川丸、大丈夫!？」

息急き切って扉を開けた雄人に、氷川丸は若干面食らいながらも答えを返す。

「はい、平気です」

「機関室で事故があつたって聞いたけど・・・怪我は無い？」

雄人の問いに、氷川丸は自身の左足を指して答える。

「ちょっと足を捻ってしまいましたけど、大丈夫です。痛みも軽いですし、普通に歩くこともできますよ」

言つて、氷川丸は椅子から立ち上がり一、二歩その場で歩いてみせる。しかし、続けて一回転しようとした氷川丸はバランスを崩して倒れかける。

「きゃっ」

「危ない！」

体勢を崩した氷川丸の肩を、雄人が抱える。氷川丸をベッドに座らせながら、雄人が言う。

「駄目だよ、無理しちゃ。幸い、程度は軽いようだけど捻挫した事には変わりはないんだから」

「すみません」

「・・・でも、氷川丸が無事で良かった」

安堵の息を漏らし、雄人が言った。

「いきなり大きな音がして、船が揺れたから。魚雷が当たったんじゃないかと心配したよ」

そう言う雄人は、氷川丸の無事を心から喜んでいようだった。艦魂は、船体が損傷すれば自分も傷を負う。その事を知っていた雄人は、氷川丸に万が一の事があつたらと、ここに来るまでの間、気がでなかったのだ。

雄人は氷川丸の隣に腰を下ろすと、彼女の頭を軽く撫でた。

「本当はもう少し早く来てあげたかったんだけど、病室の患者の対応をしないといけなかったから。ごめんね」

「いいえ。私の方こそ、心配をおかけしました」

「機関室の事故は、どうにかなりそうなの？ 船長は問題ないって言っていたけど」

「はい。明日には応急修理も完了しそうです」

「そっか。良かった」

雄人はもう一度氷川丸のことを撫でると、寢床に戻るべく立ち上がった。

「おやすみ、氷川丸。お大事にね」

「ありがとうございます。お休みなさい、雄人さん」

翌日、機関長が宣言した通り正午には破損したピストンロッドの修理も完了し、「氷川丸」は元の速度を取り戻した。その後は事故も無く快調に航海を続け、十二月二五日、粉雪の舞う横須賀港に無事帰着した。

<第二十話>「ガ島」から「餓島」へ（後書き）

作者「この間、横浜に行ったら色んな所にジブリの新作映画の宣伝が出ていたよ」

氷川丸「ああ、横浜が舞台になっているあれですか？」

作者「そうそう。スタンプリーもやってて、結構盛り上がった」

青葉「へえー。横浜が舞台ってことは、氷川丸とも関係あるわけ？」

作者「ご名答。劇中に『氷川丸』が登場するシーンがあるらしいよ。ほら、ここ」

青葉「あ、ほんとだ。……ん？ でも色が違うよ」

作者「劇中の年代が1963年だからね。その時は、船体が緑色に塗装されていたんだよ。今は現役時代の黒い船体に戻されてるけどね」

氷川丸「私としては、やっぱり今の方が落ち着きますね。煙突の二引きの旗とも合いますし」

青葉「氷川丸、銀幕デビューってやつだね。やったじゃん！」

作者「実はそうでもないんだなあ」

青葉「えっ、どういうこと？」

作者「それは本人に聞いてみよう」

氷川丸「なっ……ここで振るんですか！？」

青葉「氷川丸、教えて教えて！」

氷川丸「うう……恥ずかしいから、あまり言いたくなかったんだけど……。戦時中に『海軍病院船』っていう映画が撮影された事があったの。そこに登場する病院船が私なのよ」

青葉「おおっ、戦前から映画スターだったんだね！」

氷川丸「茶化さないでよ、もうっ。……これだから、言いたくなかったのに」

作者「実際、映画が公開されてから『氷川丸』への慰問品が増えたっていうし、あながち間違いじゃないかもね」

氷川丸「作者さんまで！」

作者「ははっ。んじゃ、そろそろ締めましょうか」

氷川丸「はい。この作品を読んでくださる読者の皆さんに心からの感謝を。ありがとうございます」

青葉「また次回〜！」

<第二十一話>すれ違い

年が明け、昭和十八年になった。

戦局が大きく揺れ動いた昭和十七年が終わり、戦争は二年目に突入する。しかし、先の展望は良いとは言えなかった。

年明けに先立つこと一日。新年を待つ人々が寺社に集まる頃、大本営は御前会議でガダルカナル島の放棄を決定した。昨年八月七日の米軍上陸以来、幾多の将兵と艦船を失った果ての、敗北だった。

生き残った兵士を同島から撤退させるため、大本営は撤収作戦「ケ号作戦」を計画した。作戦名の「ケ」は「捲土重来」の頭文字から取られている。いずれ再起を図り、戦局を挽回する・・・そのような意志を感じ取れる作戦名である。陸海軍の首脳が参加した参謀会議の結果、作戦発動は二月とされた。

過酷な環境の中、必死の抵抗を続ける友軍を救うため、陸海軍は強力な連携をもって作戦に臨んだ。日頃はいがみ合い、同口径の機関銃ですら弾丸の規格が違う両者だったが、戦友の窮地を前にして互いの気持ちは一つだった。

二月からの撤収作戦を迅速かつ安全に行えるよう、また米軍に撤退の企画を悟られないよう、陸海軍の航空部隊は果敢な攻撃を行った。同時に、撤退までの戦力維持のために駆逐艦を使用したガダルカナル島への物資輸送も続行された。この時の海軍の防諜態勢は真珠湾攻撃時のそれに匹敵し、米軍は最後まで撤退が実施されている事を知らなかった。

撤収作戦は三回に分けて実施され、それぞれ二十隻の駆逐艦が参加した。連合艦隊司令部はこの作戦で駆逐艦の四分の一を失うと予想していたが、幸いにも味方の戦没艦は一隻にとどまり、合計一万三千人の陸海軍将兵を救出することができた。

「氷川丸」は、ケ号作戦の終了から十日ほど経った二月十七日にラバウルへやって来た。これに先立ち、「氷川丸」は船内の改造を行い、九百名以上の患者を収容可能としていた。このときの改造はかなり大掛かりなもので、士官室、兵員室はもとよりプロムナードデッキにまでも手を加えて病室を増やした。

このようにして患者数増加への対策を施してきた「氷川丸」であったが、戦況の厳しさは予想を上回るものだった。ラバウルに着くや否やガダルカナル島から撤退してきた将兵が各艦から一斉に搬送され、船内は一気に患者で埋め尽くされる。収容人数は定員一杯に迫る八八二人を数えた。改造を施していなければ、とても受け入れられる数ではなかっただろう。

しかし、患者が増えても乗組員の数は以前と変わらなかったため、彼らの業務は多忙を極める事となった。どの部署も総動員で働き、目を回す者が続出した。

「氷川丸」はその日のうちにラバウルを発ち、二月二十日トラック諸島に入港した。トラックには、連合艦隊旗艦「武蔵」の姿があった。

港内の旗艦専用浮標フイに繋がれる「武蔵」は、澄んだ青空に大将旗をへんぽんと翻している。そのすぐ横に、姉妹艦である「大和」が仲良く並んでいる。二隻の巨艦は、手前に見える小島よりも大きかった。

両艦は、トラックの人々の注目の的だった。酋長を中心とした血縁社会を形成するトラックでは、長年に渡り漁労や採取を中心とする生活を送ってきた。彼らの知る船は、漁業用のカヌーや、コブラなどの特産品を仕入れに訪れる商船くらいであった。

そこへ、いきなり七万トンの排水量を持つ世界最大の戦艦が二隻も現れたのだ。その驚きは計り知れない。各島の浜辺には、世界最大の戦艦を一目見ようとする子供たちの姿が絶えなかった。

しかし、「氷川丸」から見た二隻の印象は少し異なるものだった。

甲板から望む「大和」と「武蔵」は、確かに他の全ての艦艇を圧倒する威容を誇っている。連合艦隊旗艦の在任歴でいえば彼女らより遙かに長い「長門」でさえも二隻の前では霞んで見える。生まれながらに最強を宿命づけられた、王者としての風格だった。

だが、今はその王者としての風格が彼女たちの姿をどこか浮世離れたものに見せていた。紺碧の海に悠然と佇む艦影は、それを見る者に底知れぬ畏怖と頼もしさを抱かせる。この二艦がいれば、米軍には決して負けぬという気持ちを湧き上がらせる。しかし、その超然とした態度こそが氷川丸には不自然に感じられた。

「氷川丸」には、ガダルカナル島の戦いで傷ついた将兵が数多く乗っている。瘦せ果てた彼らの姿と、その苦吟の声とに間近で接している彼女には、彼方に停泊する「大和」がどこか別世界の存在のように思われた。

戦艦「大和」は、ガダルカナル島の争奪戦が始まった当初からトラックに進出している。だが、現在に至るまで同艦が動きを見せた

事は無かった。ソロモン海で両軍が鎬しのぎを削り、「鉄底海峡」と渾名あだなされるほど多くの艦船が沈む中にあっても、「大和」は決して出撃しなかった。

聞けば、「大和」——現在は「武蔵」だが——にある連合艦隊の司令部では、毎日豪華な料理が食卓に供されるそうだ。貨客船時代の「氷川丸」の一等メニューに勝るとも劣らない食事に加え、昼食時には決まって軍楽隊の演奏が行われるという。熱帯の山中で多くの将兵が米さえ口にできずに苦しんでいる最中に、トラックの旗艦では夢のように豪華な料理が食器の上で湯気を立てている。前線の兵から「大和ホテル」「武蔵御殿」と揶揄されるのも、無理からぬ事だった。

——と、氷川丸が物思いに沈んでいると遠くから汽笛の音が聞こえた。船が入港してくるらしい。「氷川丸」からも答礼の汽笛が送られる。

環礁の出入口である北東水道へ目をやると、小さな艦影を確認できた。船の舳先は、主要艦艇が泊まる夏島泊地に向けられている。開戦以来、トラックを訪れる民間船は減少し、今では皆無に近くなっている。あの船も、軍艦に違い無かった。

氷川丸の予想を裏付けるように、艦の輪郭がはっきりしてくるにつれ、砲や煙突の姿が浮かび上がる。艦首に二基、艦尾に一基の砲塔を備えた艦影。二本ある煙突のうち、前方の一本が太くなっている。日本の重巡特有の結合煙突だ。

船橋の艦影識別表を繰って身に付けた知識を基に、氷川丸は入港船を分析する。そして、思い当たる艦の名を口にした。

「もしかして・・・青葉？」

呟き、氷川丸は相手の艦へと転移する。甲板に降り立った氷川丸はしばらく艦上を探し歩き、やがて舷側の手摺にもたれ掛かる少女を見つけた。

「青葉！」

氷川丸は相手の名前を呼ぶと、少女の隣に歩み寄った。

「久しぶり。元気にしてた？」

氷川丸の問いに、しかし、少女は酷く緩慢とした動作で顔を上げると、ようやく相手を認識したような表情を作った。

「ああ・・・氷川丸か」

「何よ、御挨拶ね。会いに来たのが私で、がっかりしてるみたい」
軽口を叩くつもりで氷川丸が言うと、青葉はクスリと笑って首を振った。

「そんな事ないよ。まあ、他に会いたい相手がいるのは事実だけど・・・」

思わせぶりな言葉を口にする青葉に、氷川丸が訝しげな視線を送る。

「どうしたの、青葉？ 元氣ないわよ？」

「・・・元気？ 元気なら、あるよ。今すぐにも敵艦を血祭りにあげたいくらいにはね」

引き攣った笑みを浮かべ、青葉が答える。ここで、氷川丸はようやく青葉の様子が常と異なる事に気がついた。

「ねえ・・・本当にどうしたの？ 青葉、何だか様子が変わだよ？」

心配そうな表情で氷川丸が尋ねる。それに対し、青葉は虚ろな瞳を氷川丸に向けると、口元を皮肉げにゆがめて答えを吐いた。

「変・・・か。そりゃあ、変にもなるだろうね。義姉^{あね}も、実の妹も、すべてを一気に失ったんだからさ」

「え・・・？」

青葉の衝撃的な告白を聞き、氷川丸の思考は一瞬停止する。呆然としたまま、再起動した思考を回転させて氷川丸は問いを絞り出す。

「どういう・・・こと・・・？」

「どういう事が、って？」

嘲笑にも似た響きで鼻を鳴らし、青葉が答える。

「そのままの意味だよ。義姉^{ねえ}さんたちも、衣笠も・・・みんな、いなくなっただよ」

「・・・！」

出かかった悲鳴を、氷川丸は口元に手をあてて抑える。そんな彼女をよそに、青葉は淡々と言葉を続ける。

「第一次ソロモン海戦で加古義姉さんが。サボ島沖海戦で古鷹義姉さんが。そして、第三次ソロモン海戦で衣笠が……。去年一年の間で、私は姉妹を全員、失ったんだよ――」

その瞬間、氷川丸は腹部に重い一撃を受けたかのような感覚を覚えた。それほどに青葉の話は衝撃的だった。だが、氷川丸が何よりも驚愕したのは、血の通った姉妹を失いながら、その事実を他人事のように語る青葉の姿だった。

「そう……。だったの……」

青葉のあまりの変わりように衝撃を受けつつ、氷川丸は言葉を継ぐ。

「残念だったわね……。でも、そんなに気を落とさないで」

姉妹を失った親友に向けて、氷川丸は慰めの言葉をかける。だが、氷川丸の意図とは裏腹に、その言葉は青葉の神経を逆撫でした。

「気を落とすな、か……。軽々しく言ってくれるね、氷川丸」

身に纏う雰囲気を一変させ、青葉が陰のある視線を氷川丸に差し向ける。予想外の反応に戸惑いを隠せない氷川丸に詰め寄り、青葉は言葉を続ける。

「たった三ヶ月の間に三人の姉妹を立て続けに失って、気を保てるわけないでしょ？ それとも、氷川丸は私と同じ立場になっても

平然としていられるの？」

「それは――」

もちろん、平然としてなどいられない。だが、青葉は氷川丸の答えを待つことなく畳み掛ける。

「氷川丸も知ってるよね。私は、第六戦隊の旗艦だった。古鷹型と青葉型から成る姉妹艦戦隊の、旗艦。それなのに・・・それなのに・・・僚艦が次々に沈んでいく中、旗艦の私だけ生き残る。サボ島沖夜戦の時なんか、私はボロボロだったけど、衣笠は無傷だったんだよ？　それが、無傷だったせいで、第三次ソロモン海戦に駆り出されて・・・」

氷川丸にこの気持ちが分かる？　旗艦でありながら姉妹を守れず、独り生き長らえるこの気持ちが。分かるわけないよね。氷川丸は旗艦任務に就いたことも無いし、ましてや、まだ姉妹を失った事もないんだからさ！！」

荒々しく、憎しみさえ感じられる調子で、青葉は吐き捨てた。親友から突き付けられた、刃のような剥き出しの敵意に、氷川丸は途轍もないシヨックを受けた。

言い終えた青葉は、すぐにはっと気付いた表情をし、気まずそうに顔を俯かせた。

「・・・ごめん。言い過ぎた」

青葉は軍帽を目深にかぶって目元を隠すと、踵きびすを返して氷川丸に背を向けた。

「・・・『鳥海』に、着任の挨拶に行かないといけないから」

そう言っ、青葉は浮標^{フイ}を四つほど隔てた場所にいる「鳥海」へと転移した。残された氷川丸は、放心状態でその場に立ち尽くした。

この数分の間に、一体何が起こったのか。氷川丸は理解できなかった。しかし、氷川丸は決して頭の回転が悪い少女ではない。彼女が、自分のかけた言葉によって青葉を傷付けたのだと気づくまでに、そう時間はかからなかった。

「私の・・・せいだ・・・」

悄然として氷川丸は呟く。首^{くび}を垂れる彼女の横顔には、深い悔恨の念が浮かんでいた。

<第二十一話>すれ違い（後書き）

氷川丸「……………」

作者「青葉のやつ、後書きにも来ないか……。氷川丸も黙り込んでやってるし、気まずいなあ」

氷川丸「青葉……。作者さん、私、青葉と仲直りできるんですよ？」

作者「えっ？ それは、えーと……………」

氷川丸「そんな……………」

作者「ああっ、泣くな！ 大丈夫、仲直りできる！」

氷川丸「（瞳を潤ませながら）……………本当ですか？」

作者「うん。本当、本当」

氷川丸「……………分かりました。信じます」

作者「ふう……。一先ず、泣かれずに済んだか。氷川丸もこんな調子だし、今回はこれで締めるとしよう。

この作品を読んでくれる読者の皆様に心よりの感謝を申し上げます。相変わらずの遅筆ですが、次回もご期待下さい。ご意見・ご感想もお待ちしております」

<第二十二話>長官の背中

ケ号作戦によってガダルカナル島から脱出した傷病兵をサイパン島に移送した「氷川丸」は、再びラバウルへの海路に就いた。ラバウルへの航海は、これで八度目である。

三月十二日に横浜を出港。トラックを経由し、ラバウルに到着したのは二七日のことだった。ガダルカナルの戦いが終わった後も、傷病兵の数が減ることは一向に無かった。むしろ、ガダルカナルの陥落によって前線がまた一步ラバウルに近付いたため、負傷者の数は増加してさえた。

ラバウルに入港した「氷川丸」を待っていたのは、定員上限一杯の九百名の患者だった。前回同様の大人数に、乗組員は猫の手も借りたいほどの忙しさに追われた。

収容した患者の中には、八十一号作戦の生存者が多くいた。八十一号作戦とは、ニューギニア島へ陸軍の援軍を送るための輸送作戦である。

ダガルカナル島からの撤退後、日本軍は主戦場をニューギニアと定め、戦力の増強を画策した。その一環として、第十八軍司令官の安達^{あた}二十三^{はたそ}中将率いる陸軍第五師団をニューギニア島に派遣する事が決定された。六九〇〇名の兵士と二五〇〇トンの食糧弾薬を七隻の貨物船に分け、船団はラバウルを出港した。

しかし、この作戦には実行前から危険が認識されていた。ラバウルがあるニューブリテン島とニューギニア島は目と鼻の先であるが、そのニューギニア島には米豪軍の航空兵力が多数展開している。船

団を出した場合、それらの迎撃を受ける事は必至であつた。実施部隊の第三水雷戦隊は成功率の低さを危惧したが、上層部により作戦は強行された。

二月二八日にラバウルを出港した船団は、翌日には敵の哨戒機に発見される。船団の航路上にはニューブリテン島とニューギニア島に挟まれたダンピール海峡があつた。この狭い海域に差し掛かった時、百三十機もの敵機が輸送船団に襲いかかった。敵の主力は米軍のP-38戦闘機やB-25爆撃機であつた。

上空では零戦が直衛任務に当たっていたが、多数の敵機を相手に焼け石に水であつた。海上では九隻の駆逐艦が輸送船を取り囲んで砲火を噴き上げているが、こちらも同じである。逆に、敵戦闘機の機銃掃射によつて機銃座の兵員が薙ぎ倒される。護衛の駆逐艦も、自分の身を守ることと精一杯だつた。

この時、連合軍の爆撃機は新しい爆撃方法を使用した。スキッピング・ボム——反跳爆撃と呼ばれる攻撃法である。これは、川原で投げた石を跳ねさせるように、海面に落とした爆弾をバウンドさせ敵艦に当てるというものだ。急降下爆撃のように高い技量が必要としないため、熟練搭乗員でなくとも戦果を得やすいのが特徴だ。

この新戦術により、輸送船団は参加した七隻すべてが沈没。護衛の駆逐艦も四隻を失い、作戦は大失敗に終わった。因みに、この海戦には幸運艦として名高い駆逐艦「雪風」も参加しているが彼女は無事に生き残り、強運の片鱗を見せている。

傷を負いながらも、厳しい戦いから生還した兵士たちを「氷川丸」の乗員一同は温かく迎える。しかし、白衣に着替えた三水戦の将兵は、護衛の任を果たせず、戦う前にむざむざと友軍の命を失わせて

しまった事を、深く悔いている様子だった。

その日の夕刻、患者を鮪詰めにした「氷川丸」はラバウルを出港した。西の海に日が沈み、東の空が青から藍に変わる頃。黄昏時の空を背に、黄金色の斜光を浴びる花吹山がだんだんと遠ざかっていく様は、思わず溜息を漏らしてしまうほど美しい眺めだった。

船内満室の「氷川丸」は三月三十日、トラックに到着した。そんな彼女に、思いもよらぬ来客があった。

四月一日。この日は、朝から晴れだった。日本よりも濃く鮮やかな青空に、澄んだエメラルドグリーンの海。その中に、「氷川丸」は眩しい純白の船体を輝かせる。

朝直を終えた雄人は、少し遅い朝食を摂った後、食後の運動も兼ねて甲板を散歩していた。隣には、肩に下がる三つ編みを揺らす氷川丸の姿がある。

青葉との一件の後、氷川丸はしばらくの間塞ぎ込んでいた。その気は無かったとはいえ、自分の不用意な言葉で青葉を傷つけてしまった事を氷川丸は深く悔やみ、責任を感じていた。

自責の念に囚われる氷川丸に、雄人は下手な言葉はかけなかった。彼女が心情を吐露するのを聴き続け、受け止める。余計な言葉は差し挟まない。相手の心をありのままに受け入れる。それは、簡単なようで非常に難しい。しかし、雄人はそれをやり遂げた。

常に傍に寄り添い、話を聴いてくれる雄人の存在は、氷川丸の心を楽にした。雄人に話をするなかで心の整理がついた氷川丸は、今では大分落ち着いていた。

「いい天気ですね」

身体を伸ばし、氷川丸が言う。

「こういう日は、デッキチェアでお昼寝するのが一番です」

氷川丸は、手近な所に置いてある椅子に腰を下ろす。

「雄人さんもどうですか？」

「うん。……でも、デッキの椅子は患者用だって、前に言っ
てなかった？」

以前、甲板の椅子に寝転がっていた司に氷川丸がタライの山を降
らせたのを思い出しながら、雄人が聞く。

「基本的にはそうですけど、そこは臨機応変に、です。今は甲板
に出ている患者さんも少ないから問題ありません。それに――」

「それに？」

「雄人さんは、特別です」

言って、氷川丸は小さく笑みを浮かべる。茶目っ気のあるその仕
草に、雄人も思わず頬を緩める。

「ありがとう」

隣に腰掛けた雄人に、氷川丸は艦魂の能力を使って取り出した飲

物を手渡す。まだ日は昇りきっていないが、流石は赤道直下、早くも降り注ぐ日差しは強い。今日は暑くなりそうだな、と雄人が思っている、氷川丸がくすりと笑った。

「すっかり日焼けしましたね」

言われて、雄人は自分の腕を見る。半袖の防暑服からのびる彼の腕は、銅色あかがねいろに焼けている。トラックの島民ほどではないが、内地にいた頃と比べると明らかに日焼けしていた。

「初めて出会った時よりも、ずっと船乗りらしいです」

「それって、最初はそう見えなかったってこと？」

「ふふつ。さあ、どうでしょう」

椰子の葉を茂らす夏島の景色を眺めながら二人は雑談を交わす。と、ブザーの音と共に別の声が二人の会話に割って入った。

『総員上甲板！ 山本長官ご乗船なり！ 繰り返す、総員上甲板！ 山本長官ご乗船なり！』

スピーカーを通じ、病院長の号令が船内に響く。そこに登場する名前を聞いた雄人と氷川丸は、弾かれたように立ち上がった。

「山本長官っ！？」

スピーカーから流れる声は、紛れもなく連合艦隊司令長官、山本やまもと五十六海軍大将の訪問を告げるものだった。当初の第四艦隊から連合艦隊付属に編入されている「氷川丸」にとっては、連合艦隊司令

長官である彼は直属にして最上位の上司にあたる。そんな人物の来船は、乗組員を驚かせるには十分過ぎる効果を持っていた。

長官が乗船する左舷側に、本間病院長以下、全乗組員が整列する。彼らが一様に緊張した面持ちで敬礼を捧げる中、山本長官を乗せた内火艇が到着した。

器用な操縦で舷門に横付けした内火艇から、一人の人物が降り立つ。その瞬間、氷川丸は息が詰まるほどの緊張を覚えた。

カツ、カツ、カツ、と舷梯を踏む音が登ってくる。一同が固唾を飲んで待つなか、遂にその人物が「氷川丸」の甲板を踏んだ。

「お待ちしておりました、山本長官。わざわざお越し頂き、有り難うございます」

敬礼を捧げたまま、本間病院長が謝辞を述べる。山本五十六連合艦隊司令長官は、小さく頷き、答礼を返した。

整列する乗組員に答礼を返しながら、山本長官は堂々とした足取りで歩を進める。長官の後ろには、宇垣纏うがきまこと参謀長や黒島亀人くろしまかめと先任参謀らが続く。いずれも連合艦隊司令部の中枢に位置する人物である。

軍刀を左手に携えた山本長官の姿は、威風堂々としていて、まさに連合艦隊司令長官に相応しいものだった。一挙手一投足、眼光の一つに至るまで司令長官の貫禄が滲み出ているようにさえ思える。それだけ、山本長官の姿は力強かった。

長官の足音が近づく中、列の中程にいる雄人は固い表情で敬礼の姿勢を保っていた。彼の隣では、別の乗組員との間にどうにか入り

込んだ氷川丸が窮屈そうに敬礼をしている。他の乗組員は艦魂が見えないため、本来、氷川丸が無理をして列に収まる必要は無い。列から食み出ても問題は無いのだが、彼女自身が雄人の隣がいいと言って譲らなかつた経緯がある。

そんな二人の所へ、山本長官が差し掛かる。その時、驚くべき事が起こった。

無言で答礼を返していた山本長官は、雄人の前を過ぎ去る時、ふと視線を動かした。その焦点は、雄人と、彼の隣に立つ別の乗組員との間に合わされていた。

「！」

長官と目が合い、氷川丸は思わず身体を強ばらせる。そんな彼女の反応を楽しむように、山本長官は日焼けした顔に小さく笑みを浮かべた。

「・・・っ！」

二重の驚きに言葉も出ない氷川丸を尻目に、山本長官はそのまま歩み去る。氷川丸は、その背中を驚愕の表情で見送った。

「それにしても、驚きました・・・」

昼食後。舷側の手摺に身体を預けながら氷川丸は胸をなで下ろした。

「僕もだよ」

雄人が相槌を打つ。

「まるで氷川丸のことが見えてるみたいに、しっかりと目を合わせて・・・・山本長官は、艦魂が見えるのかな？」

「有り得ない話では、ないと思います。艦魂が見える人は限られてますけど、皆無ではないですから。山本長官ほどの人物なら、艦魂を見ることができても不思議ではありません」

先ほどの情景を思い返し、二人は話す。そこへ、甲板を打つ靴音が聞こえてきた。

「ここにいたか」

「・・・っ!!」

驚いた二人が振り返ると、微笑を浮かべた山本長官の姿があった。

反射的に敬礼をする二人に「楽しんでいい」と言うと、山本長官は氷川丸に視線を向けて尋ねた。

「君が、この船の艦魂かな？」

「は、はい。海軍特設病院船『氷川丸』艦魂の、氷川丸です」

緊張を多分に滲ませた声音で氷川丸が答える。両者のやり取りを目にした雄人が、横から問いかける。

「やはり、山本長官も艦魂が見えるのですか？」

「ああ。そういう君も、見えるんだろ」

「はい」

肯定して、雄人はまだ自分が官姓名を名乗っていない事に思い至り、慌てて姿勢を正した。

「申し遅れました！ 自分は、日高雄人一等看護兵曹です」

「日高一曹だな。覚えておこう」

長官は一つ首肯し、直立姿勢をとる雄人に再び楽にするように言う。

「今日は傷病兵の見舞いに来たんだが、連合艦隊司令長官として、君たちにも感謝の言葉を伝えようと思つてな。

俺も、味方が極力被害を受けないよう作戦指導に努めている。だが、どんな作戦でも必ず被害は出てしまう。そんな時、傷ついた将兵を救ってくれる君たちの存在は何よりも重要なものだ。

確かに、看護科は直接敵と大砲を打ち合うような真似はしない。だが、その任務には前線部隊と同等・・・いや、ともすればそれ以上の重みがある。君たちが治療に全力を尽くしてくれるから、俺は部隊を指揮し、兵たちは安心して戦えるんだ。ありがとう」

「もつたいないお言葉です」

真つ直ぐ雄人の眼を見据え、山本長官は感謝の言葉を語る。雲上

人に等しい相手による直々の労いに、雄人は恐縮すると同時に感激する。

次に、長官は視線を氷川丸に転じると同様に労いの言葉をかけた。

「君にも迷惑をかけて悪いな。本当は客船として平和な海を走っていただろうに、こんな事に巻き込んでしまつて」

「いいえ。私も日本郵船の艦魂です。日の丸商船隊の一員として、一朝有事の際には、国に尽くす覚悟はできています」

「そうか。そう言ってもらえると助かる。二人とも、辛いことも多々あるだろうが、どうか職務に励んでくれ」

「「はい！」」

声ばかりか、敬礼の動作までぴつたりと揃えて答える二人に、山本長官は温かい笑みを向ける。

「ハ、ハ。二人とも、息がぴつたりだな」

言われて気がつき、雄人と氷川丸は僅かに顔を赤くする。

「ハハハ。息が合うのはいい事だ。これから、お互い心を通わせて、仲良くやれよ」

二人の肩を叩き、長官はその場をあとにする。その背中を見送った後、氷川丸が雄人に話しかける。

「長官って、思っていたより気さくな方ですね」

「そうだね」

「雄人さん」

「なに、氷川丸？」

「これから、よろしく願いしますね」

雄人の手を取り、微笑む氷川丸。その手を握り返し、雄人は頷く。

「こちらこそ、よろしくね」

手を握り合い、二人はにっこりと笑い合った。

昼食を挟み、午後病室の訪問を行った山本長官は、ほぼ一日をかけて「氷川丸」の患者を見舞った。長官は病室を一部屋ずつ訪ね、患者一人ずつの顔を見て回った。

夕刻、山本長官は自らが将旗を掲げる「武蔵」へと戻るべく「氷川丸」をあとにした。乗船時と同様、プロムナードデッキに整列する乗組員の前を横切り、長官は舷門に向かう。

ところが、長官が船を降りる少し前から急に雲行きが怪しくなりだした。そして、病院長と敬礼を交わし、舷梯に足をかける頃、空は完全な雨模様となっていた。

「雨、か・・・」

天を仰ぎながら長官が呟く。土砂降りではないが、風もあり、結構な雨勢である。熱帯特有のスコールでもなく、本降りのようだ。隣に立つ宇垣参謀長が不思議そうに唸る。

「昼間は晴れておりましてのに・・・どうした事でしょうな。少し待ちますか？」

「いや。その必要はない」

宇垣参謀長の提案に首を振ると、山本長官はそのまま舷梯を下り始める。幕僚を後ろに従え下船するその様子を、「氷川丸」の乗組員が敬礼と共に見送る。

雨が降りしきる中、舷梯を下りる長官の肩に雨粒が叩きつける。その後ろ姿を見つめる氷川丸は、ふと不吉な思いに駆られた。

水煙に霞む長官の後ろ姿。その背中が、そのまま霞の中に消えてしまいそうな気がしたのだ。どうしてそんな気がしたのかは分からない。ただ、無性に不安な気持ちになった。

思わず、雄人の服の裾をぎゅっと掴む。それに気づいた雄人が一瞬、怪訝な視線を向けるも、すぐに前を向く。

やがて、長官を乗せた内火艇が舷梯を離れると整列した乗組員も解散となる。各々が各自の仕事に戻る中、氷川丸も仕事の残る雄人と別れ自室に向かう。

部屋に戻った後も、先程の不安の正体は分からなかった。もやも

やした気持ちを抱いたまま、長官が去って間もなく、船はトラックを出港した。航海中も氷川丸は得体の知れない不安感の正体について考えを巡らせたが、関心は徐々に薄れていき、四月八日、桜が満開の横須賀港に到着する頃には、気に留めなくなっていた。

そして、横須賀で整備補給を終えた「氷川丸」が再びラバウルに向け出発した四月十八日、山本長官は前線視察中に乗機を米戦闘機に襲撃され、ブーゲンビル島の上空で壮烈な戦死を遂げたのだった。

<第二十二話>長官の背中（後書き）

作者「ああ、とうとう山本長官が……」

氷川丸「この小説でも、いよいよ日本の旗色が悪くなってきましたね……。それはさておき、作者さん。山本長官のことで、読者の皆さんに補足しておく事があると思いますけど」

作者「そうだった。作中では、山本長官の来船は今回が初めてという形で書いていますが、実際は以前にも長官の訪問を受けています。例えば、ミッドウェー海戦の負傷者を柱島で収容した時などです」

氷川丸「本編では、第十六話の部分ですね。あの時は、南雲長官も山本長官と一緒に来船されました。山本長官は第二種軍装でしたが、南雲長官は黒服の第一種軍装でした。『赤城』から退艦する時に、第二種軍装をなくしてしまったそうです」

作者「他にも、トラック滞在中の山本長官は病院船が入港するたびにお見舞いに行っていたそうです。これは別に義務だったわけではなく、あくまで長官の自由意思だったことです。なお、連合艦隊司令長官の病院船訪問は、後任の古賀峯一長官も行っています」

氷川丸「補足説明は、こんなところですね。そろそろ終わりにしましょうか」

作者「うん。では、いつもの如く、この作品を読んでくれる読者の皆様に心からの感謝を申し上げます」

氷川丸「ご意見・ご感想もお待ちしております」

＜第二十三話＞星降って絆深まる

四月二四日。内地では北海道の桜が花を咲かす頃。「氷川丸」は再びトラックを訪れていた。

「もうすぐ環礁内に入るぞ。総員、入港準備！」

船橋で指揮を執る石田船長が船員たちに命令する。貨客船時代から船長と共に働いてきた郵船の船員たちは、慣れた手つきで作業に取りかかる。

北東水道から環礁の内側に入った「氷川丸」は、主要艦艇が停泊する夏島の泊地を目指す。夏島は第四艦隊の司令部が置かれている場所であり、文字通りトラックの中心地だ。

入港の様子を、氷川丸はデッキの上からのんびりと眺める。船の出入港風景の見物は、彼女の楽しみの一つだ。海軍に徴用される前は、船客と栈橋の見送り人との間に色とりどりのテープが投げられる光景をよく眺めた。今は七色のテープが乱れかう様を見ることができないが、代わりに、鮮やかな原色に溢れた南国の景色を思う存分、堪能できる。

碧^{みどり}の海。青の空。白の砂浜。北太平洋の灰色がかった風景と比べ、眩しいほどに鮮やかなその色彩は、何度見ても目を楽しませてくれる。

「いつ見てもきれいな景色ですね、雄人さん」

横に顔を振り向かせながら氷川丸が言う。

「海は碧にして浜はいよいよ白く、空は青くして花は燃えんと欲す——なんて」

「それ、『春望』の替え歌？」

「はい。ふと思いついたので、やってみました」

雄人の問いに、氷川丸は笑って答える。

「『春望』か……。懐かしいなあ。学校で暗唱させられたのを覚えてるよ。僕、漢文は苦手なんだよね。古文は好きなんだけど」

「好き嫌いしたらダメですよ。なんなら、私が教えましょうか？横須賀に帰るまでにすらすら読めるようにしてあげます」

「うっ……。それは、遠慮しておくよ」

分かりやすい反応を示す雄人に、氷川丸はくすくすと笑う。しかし、その声は不意に途切れた。

「あ——」

洋上の一点に目を向け、氷川丸は声を漏らす。彼女の視線の先には、一隻の軍艦があった。

その艦は、見るも痛ましい姿を水面に晒していた。火災の跡が残る上部構造物。甲板には大きな穴が穿たれ、応急修理用の木材が辛うじてそこを塞いでいる。舷側にも、無数の傷跡が刻まれている。恐らく、敵の空襲を受けたのであろう。舷側の傷は至近弾の破片に

よるものに違いない。少なく見積もっても、直撃一、至近弾多数。間違いなく大破判定だ。

だが、それほど酷い被害を受けているにも関わらず、氷川丸は相手の正体をはつきりと悟っていた。そして、それが彼女の表情を強ばらせていた。

「青葉・・・」

満身創痍の艦の名を、氷川丸は呟く。それきり、彼女は口を噤んだ。

雄人のおかげで立ち直ったとはいえ、氷川丸の心の傷が完全に癒えたわけではなかった。次に青葉と会う機会があれば、彼女に謝ろうと心に決めていた氷川丸だったが、いざその姿を前にすると、青葉の冷たい目つきや、胸を突き刺すような言葉が閃光の如く脳裏に甦り、足を踏み出すことができない。同時に、薄まりかけていた自責の念が再び噴出し、胸を締め上げる。

遠目に見える艦影に視点を定めたまま、氷川丸はその場に立ち尽くす。その隣で、雄人は様々な感情の色が浮かぶ彼女の横顔を見つめていた。

夏島泊地に停泊する軽巡洋艦「夕張」。開戦時、第六水雷戦隊旗艦であった彼女は、現在、第八艦隊に編入され第三水雷戦隊の所属となっている。

全長一三八メートルと「氷川丸」に比べ小型な「夕張」の艦体は、巡洋艦らしく細身で精悍な印象を持つ。その艦容には、結合煙突など後に日本巡洋艦の定番となる設計が多く盛り込まれている。竣工当時、三千トンほどの艦体に五千トン級の武装を搭載し、「造船の神様」と歌われた天才設計士、平賀譲造船中將の名を世に知らしめた艦である。流石に、太平洋戦争が開戦する頃には旧式化が否めない艦齢に差し掛かっていたが、第一次ソロモン海戦では五隻の重巡に続いて敵艦隊に殴り込みを仕掛けた経験も持つ。

このように輝かしい艦歴を持つ軽巡「夕張」であるが、この艦の艦魂である夕張は、そこから想像する姿とは程遠い。すなわち、彼女の容姿は十歳そこそこ——人間であれば小学生だろうか——であり、性格も外見と同様であった。

この日も、艦魂である夕張は趣味の科学実験（内容的には小学生の理科実験程度）を終えたあと、お気に入りの場所である主砲塔の上から景色を眺めていた。

丈の合っていないぶかぶかの白衣を広げて天蓋に寝転がる夕張は、楽しそうな表情で空を眺める。風の流れによって雲が刻々と表情を変えていく様は、見ていて決して飽きる事がない。頭を使った後は、こうして脳を休めるのが彼女の習慣である。

「あ、あの雲、アイスクリームみたいです。おいしそう・・・」

口元をふにやりと緩ませながら夕張が呟く。幸せそうな表情のまま涎を垂らしかけたその時、突然彼女を呼ぶ声がした。

「夕張——！」

「ひゃわっ!？」

想像の世界に耽りかけていた夕張は急に聞こえた大声に驚いて飛び上がる。主砲塔から転げ落ちそうになるのをどうにか堪えた夕張が下を見ると、一人の青年がこちらに顔を向けていた。

「久しぶり、夕張」

「もしかして、日高一曹ですか？」

相手が頷く。夕張は白衣の裾をはたいて埃を落とし、主砲塔の下におりる。

「お久しぶりです、日高一曹。先ほどはお恥ずかしいところをお見せしました・・・」

直前の自分の醜態を思い返し、夕張は恥ずかしそうに顔を赤くする。

「ところで、どうして日高一曹が私のところに？」

「病院船の仕事だよ。この船に医薬品の補充品を届けに来たんだ」

「そうでしたか。ありがとうございます」

と、以前彼に出会ったとき隣にいた少女の姿が見えない事に気がつき、夕張は質問する。

「氷川丸さんは、一緒じゃないんですか？」

「うん。・・・ねえ、夕張。一つ、頼みを聞いてもらえないかな」

「頼み・・・ですか？」

「なんでしょう、と夕張が首を傾げる。」

「僕を『青葉』まで連れて行ってほしいんだ」

「『青葉』に？」

夕張が怪訝な顔をする。

「構いませんけど・・・それは、氷川丸さんに頼めばいいのでは？」

「ちよつと、それはできない事情があつてね——」

雄人は氷川丸と青葉の一件について手短に説明する。話を聞き終えた夕張はひとつ頷いてみせた。

「分かりました。そういう事でしたら、私がお連れします」

そう言つて、夕張は雄人の手をとる。氷川丸の手よりも小さく柔らかな夕張の両手が雄人の右手を包む。

「・・・では、いきます」

目を閉じて意識を集中し始めた夕張の身体から、淡い蛍光色の光が生まれる。輝きを増すその光が視界を覆った次の瞬間、雄人は既に「青葉」の甲板に立っていた。

「氷川丸」のデッキから望遠した通り、「青葉」の艦上には其処彼処にまだ戦闘の傷跡が残っていた。甲板のチーク材に刻まれた機銃の弾痕が空襲の激しさを物語っている。

雄人と夕張は、空襲の傷跡生々しい「青葉」の艦上を歩く。やがて、二人は目指す人影を見つけた。

「青葉」

射出機付近の舷側に立っていた青葉は、雄人の声を聞き、海に向けていた顔をゆっくりと振り向かせた。

「ああ。日高一曹」

青葉の動きは、氷川丸の時と同様に緩慢で、心ここにあらずといった風情であった。彼女の身体にはまだ戦の傷が残っており、頭には血を滲ませた包帯を巻いているが、当の本人はそれさえも他人事である様子だった。

青葉は横並びに立つ雄人と夕張の姿を見ると、クスリと乾いた笑みを漏らした。

「その組み合わせは珍しいね。駆け落ちでもした？」

雄人はその軽口には答えず、真剣な目を相手に向けた。

「青葉。君に話がある」

「なにかな」

「氷川丸のことだよ」

雄人がその名を口にした瞬間、青葉の表情が僅かに強ばる。しかし、それはほんの一瞬のことで、青葉は口元に再び笑みをはりつける。

「なるほど。氷川丸から聞いたんだね」

肯定する代わりに、雄人は話を続ける。

「氷川丸は、故意でないとはいえ、自分の言葉で君の心を傷つけてしまった事を深く後悔している。あの後、氷川丸は横須賀に帰るまでの間ずっと自分を責め続けていた。『私のせいだ』って」

「・・・・・・・・・・」

「氷川丸は、君に謝って、仲直りしたいと思ってる。だから――」

「」

「・・・・・・・・分かってるよ」

訴えかける雄人の言葉を遮り、青葉が言う。呟くような小さな声で、青葉は繰り返した。

「分かってるよ……。そのくらい、私だって分かってるよ……」

「」

気づくと、青葉の声は震えていた。驚く雄人の前で、青葉は己の心情を吐露する。

「私だって、氷川丸と仲直りしたいよ……。でも、あれだけひどいこと言って氷川丸のこと傷つけて、今さら合わせる顔なんてないよ……」

今や、青葉の声音は泣き出す寸前だった。そんな彼女の声を聞きながら、雄人は事の全容を悟った。

青葉も、苦しんでいたのだ。姉妹を失い、精神的に不安定な状態にあったとはいえ、心無い言葉で親友を深く傷つけてしまったことに。青葉も氷川丸も、自分の発した言葉で親友を傷つけてしまった事を深く悔やみ、自責の念に苛まれていた。二人は共に、同じことで悩み、苦しんでいたのだ。そして、互いに仲を直したいと願いながら一步を踏み出すことができずにいる……。

雄人は初め、青葉に氷川丸のことを許してくれるよう頼むつもりだった。正直、かなり苦戦するだろうと雄人は考えていた。氷川丸の話を聞く限りでは、青葉の激情は相当なものだと思われたからだ。

だが、それは杞憂に終わった。青葉も氷川丸も、その心情はまったく同じだった。ただ、お互いにきっかけを見つけられていないだけ。なら、雄人のする事は一つだった。

「そういえば……」

何気ない口調で、独り言でも言うように雄人は話し始めた。

「明日、夏島に上陸することになってるけど、氷川丸の誕生日プレゼント買わないとなあ。明日が誕生日なんだけど、何にしよう」

雄人の言葉に、青葉は顔を上げて彼の顔を見る。それから、不敵な笑みを浮かべた。

「・・・日高一曹。最初から、これがねらいだったね？」

「ん？ 僕はただ、考え事を口にしたただけだけど。どうかした？」

素知らぬ顔で答える雄人に、青葉は思わず吹き出す。そして、大きな声で笑いだした。

「くっ・・・あっはははは！！ ほら、夕張！ なに突っ立てるのさ！」

「ふえっ！？」

突然予先を向けられた夕張が頓狂な声を発する。事態を呑み込めず混乱する彼女に、青葉が澁刺とした声をかける。

「氷川丸の誕生日パーティーの準備をするよ！ 他の艦魂たちも呼んできて！」

「・・・はいっ！」

いつもと変わらない、明るく快活な声で言う青葉に、夕張は本来の彼女が戻ってきたことを知る。顔をぱあっと輝かせて返事をした夕張は、早速、他の艦に転移していった。

「まったく、気が早いんだから・・・。これじゃ、日高一曹が帰れないじゃん。ま、私が『夕張』まで送ればいいか」

苦笑を湛えながら青葉が言う。青葉は雄人の手をとると、一瞬のうちに「夕張」へと転移した。

「それじゃ、またね、日高一曹。くれぐれも、パーティーのことは氷川丸に話さないでね」

「うん。分かってる」

「もし話したら、魚雷発射管に詰め込んで撃ち出すからね？」

冗談めかして言い、青葉は歯を見せて笑う。それから不意に柔らかな表情になり、穏やかな声で言った。

「ありがとね。日高一曹」

直後、青葉の姿は転移の光と共に消える。光の残滓が溶けゆくのを見届けた雄人は、内火艇で「氷川丸」へと戻っていった。

四月二五日。この日は、貨客船「氷川丸」が竣工した日だ。つまりは、この船の艦魂である氷川丸の誕生日にあたる。

氷川丸は、一三回目となる誕生日を、日本から遠く離れた南の海で迎えた。生まれたばかりの時は、まさか自分がこんな場所で誕生日を迎える日がくるとは夢にも思わなかった。普通に客船としての人生を過ごしていたら、決めることのなかった経験。それが、何の因果か、こうして実現している。そのことに、氷川丸は気持ちを高揚させると同時に運命の悪戯のようなものを感じた。

しかし、今の氷川丸の心は、もっと大きなものに占められていた。それは、苺のような甘酸っぱさを持つ感情だった。心の奥底から湧き上がってくるその感情は、氷川丸の身体を芯から熱くさせる。向かい合って座る相手がその源であることは、理解していた。

「誕生日おめでとう、氷川丸」

優しい微笑みを浮かべ、雄人が言う。彼は用意していた小さな紙袋を取り出し、氷川丸に手渡した。

「いま開いてもいいですか？」

「もちろん」

雄人の快諾を得て、氷川丸は袋の口を開く。中に入っていたのは、様々な色のリボンと種々の貝殻で作ったアクセサリーだった。

「わあっ・・・」

氷川丸が感嘆の声を漏らす。瞳を輝かせて貝殻のブレスレットを眺める氷川丸に雄人が言う。

「前と比べると島の店もだいぶ品揃えが少なくなってる、このくらいしか買えなかったんだけど、気に入ってもらえたかな？」

「はいっ！」

氷川丸は満面の笑みを浮かべて雄人に礼を言った。

「ありがとうございます、雄人さん！」

「どういたしまして」

心の底から嬉しそうな氷川丸の笑顔に、雄人もつられて笑顔になる。氷川丸は早速ブレスレットを腕につけ、雄人から貰ったリボンで三つ編みを結び直した。

「・・・似合いますか？」

「うん。よく似合ってるよ」

氷川丸は破顔し、部屋に備えられた姿見を覗く。そこに映る、いつもと僅かに違う自分の姿を見て、氷川丸は笑顔をさらに輝かせた。

「雄人さん。素敵なプレゼントをありがとうございます」

振り返ってお礼を言う氷川丸に、雄人は意味深な笑みを向ける。

「それだけじゃないよ」

「他にもあるんですか？」

驚き半分、期待半分の顔で氷川丸が聞き返す。身を乗り出す氷川丸を焦らすように、雄人はもったいぶった調子で言う。

「まあ、ついてきて」

微笑を絶やさない雄人に、氷川丸は回答を促す視線を送るが、雄人は答えてくれない。言われるままに、氷川丸は先導する雄人の後

を追って自室の一等船室から外に出た。

部屋を出てからも、雄人はわざとゆっくりとした歩調で歩く。焦らされている事を感じ、氷川丸は後ろで小さく口を尖らせる。やがて、船尾甲板に通じる扉の前まで来たところで、雄人が振り返って言った。

「この先だよ」

「この先って・・・船尾甲板ですか？」

「うん」

雄人が頷き、扉を開く。甲板に出た氷川丸は、頭上を仰いで歓声を上げた。

「わあっ・・・!!」

夜色の空に、満天の星が瞬いていた。藍色の天鰲絨テロウを敷いた宝石箱に無数の宝石を収めたような、美しい光景。夜空を見上げ、氷川丸は目を見開いた。

「これが、もう一つのプレゼントですか？」

瞳に星空を映しながら氷川丸が尋ねる。それに対し、雄人はまたも含みのある答えを返す。

「当たらずも遠からず、かな」

「どういふことですか？」

氷川丸が首を傾げた瞬間、複数の光が甲板に生まれる。同時に、幾つものクラッカーの音が鳴り渡った。

「きゃっ!？」

突然の炸裂音に、思わず身をすくめる氷川丸。その音に重なるようにして、賑やかな声が響いた。

「『誕生日おめでとう! 氷川丸!』」

光が収束した甲板に夜の情景が戻る。しかし、そこには先程までは無かった、様々な料理が載ったテーブルとそれぞれの制服に身を包んだ少女たちの姿があった。

「これは・・・」

「何だと思う?」

目を丸くする氷川丸に、雄人が悪戯っぽく問いかける。氷川丸は雄人に顔を向けると、驚きの色を浮かべて尋ねた。

「もしかして、もう一つのプレゼントって——」

「これだよ」

背中から聞こえた声に氷川丸がはっとした表情を浮かべる。反射的に振り返った氷川丸は、そこに立つ人物を見て身を固くした。

「青葉——」

口に出した音が、無意識のうちに強ばる。続く言葉が見つからず、氷川丸は口を噤む。

氷川丸は、青葉に会ったら謝りたいと思っていた。だが、こうして相手を前にすると途端に息が苦しくなり、言葉が出てこない。何か言いたくて、しかし何を言えいいのか分からなくて、氷川丸はその場に立ち尽くした。

無言の氷川丸に、同じく無言で青葉が近づく。腕一本ほどの至近距離に達したところで、青葉は足を止めた。

息の詰まる静寂が甲板に流れる。青葉と氷川丸は無言のまま互いの顔を見つめている。顔を強ばらせている氷川丸に対し、真顔の青葉からは感情が読めない。場の全員が注目する中、先に沈黙を破ったのは青葉だった。

「氷川丸——」

静かな声で、青葉が言う。名前を呼ばれ、氷川丸は一瞬、肩を震わせたが、青葉の口から出たのは温かな言葉だった。

「誕生日、おめでとう」

につこりと笑い、青葉は言った。明るく笑いかけるその表情は、親友の誕生日を心から祝うものだった。そこに突き刺すような冷たさはなく、ただ温かな優しさがあった。

「青葉……」

明るい笑顔を向ける親友の名を氷川丸は呼ぶ。胸の奥から込み上げる想いのままに、彼女は言葉を紡いだ。

「ごめんね・・・私、青葉の気持ち全然考えてなかった。姉妹を失つてとても辛かったのに、無責任な慰めの言葉をかけて・・・本当にごめんね」

瞳を濡らして言う氷川丸に、青葉は首を横に振って答える。

「ううん・・・氷川丸は悪くない。謝るのは私の方だよ。氷川丸が私のことを心配して言ってくれたのは分かった。それなのに、私はやり場のない思いを吐き出したくて、氷川丸にあんなことを言うて——八つ当たりだよ、完全に」

青葉は窺うような目を氷川丸に向け、問いかける。

「ねえ・・・氷川丸は、私のこと許してくれる？ 私ともう一回、仲良くなってくれる？」

「もちろんよ。青葉こそ、私のこと、許してくれるの？」

「当たり前だよ」

相手の返答に、二人は互いに顔を輝かせる。二人が握手を交わすと、それまで沈黙を守っていた周囲の艦魂たちが一斉に歓声を上げた。

「よかったね、おねえちゃん！」

「平安丸！」

群集の中から、一人の少女が氷川丸に抱きつく。

「平安丸、トラックに来てたのね」

「うん！」

氷川丸の問いに、平安丸はにつこり頷く。彼女は、姉が親友と仲直りできたことを自分のことのように喜んでいた。

「さて、それじゃあパーティーを始めよつか！ みんな、準備はいい？」

「「「オオッー！！」」」

音頭をとる青葉に、艦魂たちの叫び声が答える。調子よく場を盛り上げる彼女の表情には、もはや僅かな翳りもなかった。

「ほら、雄人さんも来てください」

少し離れた所から事の成り行きを見守っていた雄人に氷川丸が声をかける。

「そうそう。日高一曹も一緒に盛り上がりようよ！」

「それなんだけど・・・」

雄人は氷川丸たちの方へ歩きながら口を開く。

「僕、もう日高“一曹”じゃないんだよね」

「はい？」

「どういう意味ですか？」

疑問符を浮かべる二人に、雄人は懷から一枚の紙を取り出す。広げてみせた紙面の字を、氷川丸が追う。

「日高雄人―曹看護兵曹・・・本日付でこの者を上等看護兵曹に任命する・・・これって・・・！」

喜色を浮かべる氷川丸に、雄人が頷く。

「昇進辞令だよ」

「おめでとうございます、雄人さん！」

雄人が驚くのもお構いなしに氷川丸は雄人の手をとる。その横で、マイクを取り出した青葉がとびきりの明るい声で叫ぶ。

「と、いうわけで！ 日高一曹の昇進も氷川丸の誕生日と一緒に
お祝いするよ！！ レッツ・パーティー！！！」

「……イエエー……イッ！！！！」

乾杯の杯を手にした艦魂たちが、それらを一齐に掲げる。その夜、「氷川丸」の甲板からは無礼講のパーティーを楽しむ少女たちの歓声が絶えることが無かった。

<第二十三話>星降って絆深まる（後書き）

氷川丸「これからもよろしくね、青葉」

青葉「こちらこそ、よろしく」

作者「二人が仲直りして、後書きにも青葉が戻ってきて、これで一安心だ」

青葉「自分で事を起こしておいて、よく言うよ」

氷川丸「そうですよ。私たちがどんなに苦しかったか、作者さんは分かっていますか？」

作者「二人に辛い思いをさせたのは悪かったよ。でも、結果的には仲直りできたし、それによって二人とも前より更に絆が深まったでしょ？ 雨降って地固まる、ってやつだよ」

氷川丸「まったく、うまいこと言って……。まあ、確かにその通りですけど」

青葉「今回のタイトルも、その諺をもじったワケね」

氷川丸「作中では、星は降ってませんけど」

青葉「あんまり上手くはないよね」

作者「二人とも、もう少し柔らかい言い方は……」

氷川丸「それじゃあ、青葉。そろそろ終わりにしようか」

青葉「うん。賛成」

作者「ちよつ、スルー！？」

氷川丸「ねえ、青葉。せえの、で一緒に言わない？」

青葉「いいね。それでいこう」

氷川丸「いくわよ。せえのっ」

氷川丸・青葉「この作品を読んでくださる読者の皆様に、心からの感謝を申し上げます。ご意見・ご感想もお待ちしております！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1750/>

蒼海の天使～病院船「氷川丸」～

2011年11月14日10時10分発行